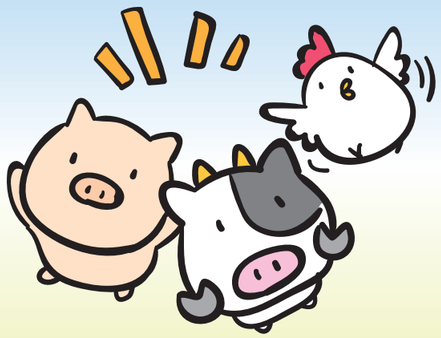
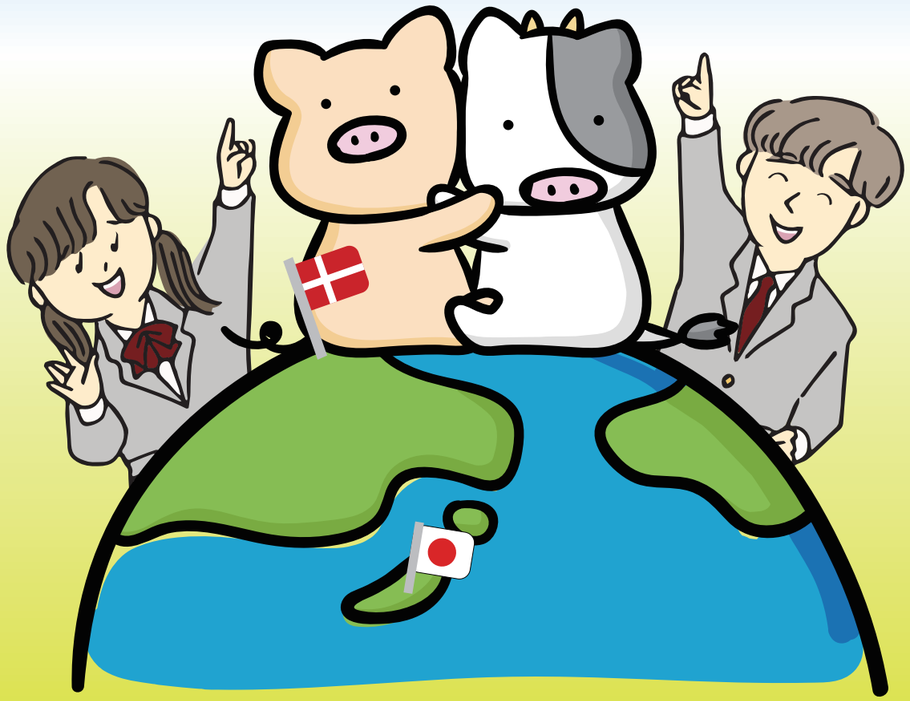


日本中央競馬会 令和4年度畜産振興事業 畜産ティーン育成プロジェクト

JRA
日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

畜産ティーン育成プロジェクト

デンマーク
オンライン畜産研修

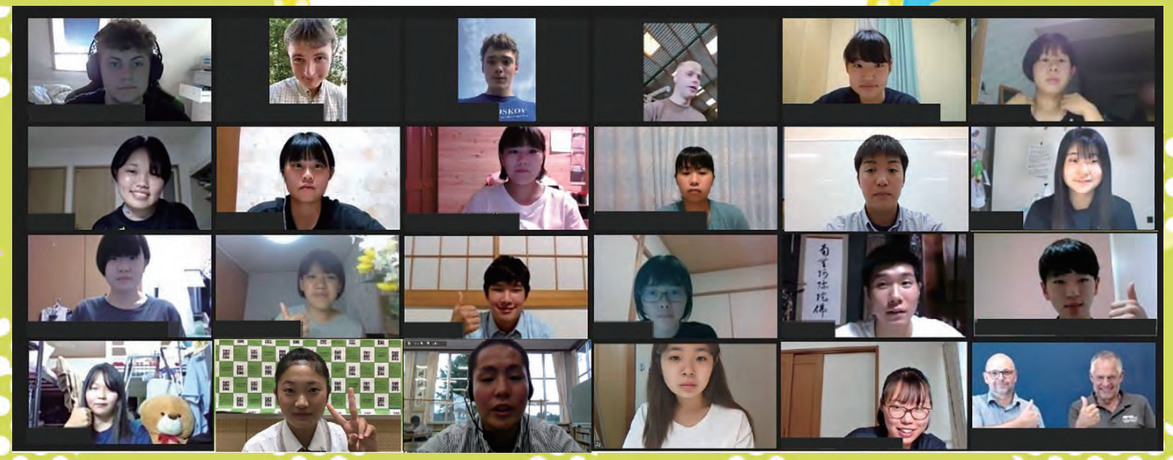


JAEC 公益社団法人 国際農業者交流協会

日本の畜産を
もっと元気に！！

私たちが学んだデンマークの畜産業

その中で感じたこと、
考えたことが、
日本の畜産をもっと元気にする！



私たち 畜産アンバサダー

目　次

1 はじめに 2

2 プロジェクトについて 3
- プロジェクトの目的 3
- 畜産ティーン育成プロジェクトの１年 4
- 参加者一覧 6
- 研修日程・研修の様子 7
- 研修でお世話になった方々 10

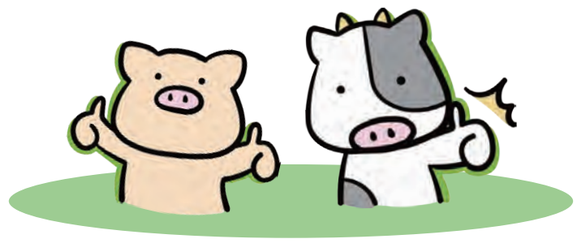
3 畜産アンバサダー活動の報告 12

4 参加者への意識調査 18

5 参加者の報告 24
- 畜産アンバサダー 19 名 24
- メンター２名 62
- 受入学校 66

6 未来の畜産業に対するアイデア 68

7 むすび 88



1　はじめに

公益社団法人　国際農業者交流協会
会　長　　野　中　和　男

公益社団法人国際農業者交流協会は、英語名を The Japan Agricultural Exchange Council（略称 JAEC）と表記し、海外において先進農業技術や経営などを実務的に学ぶプログラムを提供する専門機関として昭和 63 年に設立されました。前身団体からの累積では、これまでに 15,000 名を超える日本青年が海を渡り、言葉の壁や文化、生活環境の違いを乗り越 えて先進農業を学んできました。海外で研鑽を重ねた方々は、培った知識と経験を生かし、我が国における中核農業者として、さらには農業関連諸企業や国際協力分野において活躍されています。

本会では、上記に加え ASEAN やヨーロッパ諸国の農業青年に日本の農家で実務研修をしてもらう受入事業、研修を終えた方々に向けた農業の研究会やセミナーの実施なども手掛けています。これらの事業は、米欧豪及びアジア諸国の政府機関、関係団体との長年に亘る協力と信頼関係によって実現されているもので、その質と研修効果の高さは国内外から高く評価されています。

畜産ティーン育成プロジェクト事業は、JRA 日本中央競馬会の助成により実施されています。若年層（特に高校生）における畜産業への興味喚起が主なる目的であり、海外農業研修を通じた学びを主眼とし、参加者は学んだことを自らの口でひとに伝える・発表することとなっています。いうなれば、インプット・アウトプットがセットになったプロジェクトです。しかしながら 2022 年においても新型コロナの影響が続き、実際に海外で研修をすることは難しかったので、オンラインを中心としたプログラムを展開しました。

今年度も研修のコーディネートを Dalum 農業学校にお願いしました。デンマークの畜産業の基礎を学び、現地の畜産農家や Dalum 農業学校で農業を学ぶ若者たちとオンライン交流をしたりしました。また、予め用意したデンマーク畜産農家のインタビューや３D 動画（VR ゴーグルで立体映像）、デンマークの輸入豚肉を実際に料理して食べてみるなど、オンラインで不足しがちな体験を補完しました。
研修参加者は、これらの体験をもとに畜産業の魅力を伝える畜産アンバサダーとして活動しました。高校生たちの言葉は、聞く人たちの心を強く惹きつけ、畜産業の魅力を元気いっぱいに発信する機会となりました。将来の日本農業を担う人材として、皆さんの今後の活躍を心より祈念申し上げます。

最後になりますが、本プロジェクト実施にあたりまして、ご指導・ご支援・ご協力を賜りましたすべての方々に感謝申し上げますとともに、引き続き、本会運営事業へのご理解とご協力を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

2 プロジェクトについて

プロジェクトの目的

畜産ティーン育成プロジェクトとは

JRA 日本中央競馬会の令和 4 年度畜産振興事業により実施されました。平成 30 年度から実施してきました未来の畜産女子育成プロジェクトから名称を変更し、令和 4 年度から畜産ティーン育成プロジェクトとなりました。
この事業では、その時々の現状課題を踏まえた必要性や緊急性等に応じ、年度ごとの公募テーマと重点的に対応する事項が定められます。
公募テーマの中から「労働力･担い手の確保」、重点的対応事項の中から「経営を支える労働力や次世代の人材の確保のための対策」を選び、この公募テーマと重点的対応事項に沿って事業を実施するため、海外研修と啓発活動を組み合わせた事業が畜産ティーン育成プロジェクトです。
次世代の農業者につながる人材育成のため、北は北海道から南は熊本まで、全国から 19 名の高等学校生徒が参加しました。
令和 4 年度は、コロナ禍の状況を踏まえ令和 3 年度同様、オンラインでの研修を中心としたプログラムを実施することとなりました。

舞台はデンマーク

高校生たちに学んでほしい畜産先進国として、昨年度と同様にデンマークを選びました。デンマークは、世界幸福報告書（The World Happiness Report）2022 による幸福度ランキングで第 2 位（日本は 137 か国中第 47 位）という結果の国でした。幸福度の指標は、国民 1 人当たりの国内総生産（GDP）、社会保障制度などの社会的支援、健康寿命、人生の自由度、他者への寛容さ、国への信頼度などを基にしています。
面積は九州ほどの小さな国ながら、ヨーロッパ屈指の畜産国と言われています。酪農では、放牧酪農を主として、ホルスタイン、ジャージーを育成する酪農家が多く、乳固形分量は世界でもトップクラスであり、チーズに適した高品質の牛乳を生産しています。さらに、養豚産業は多くの農場が繁殖と肥育の一貫経営で、豚肉の輸出額は世界でもトップ 5 に入ります。
畜産現場でのジェンダーフリーな考え方も進み、輸出産業と位置付けた畜産ビジネス、大規模化による効率化・経営マインドの高さなど､日本のお手本となる部分が多くあります。
研修のコーディネートを、デンマーク王国第 3 の都市オーデンセにある、Dalum 農業学校に今年度も依頼しました。デンマークで最も歴史の古い農業学校です。135 年前から、この地域の農民に対して冬場の農閑期に教育の機会を提供してきました。将来、農業を目指す若者が多数学んでいる学校です。
また、Dalum 農業学校のあるオーデンセは、「人魚姫」「マッチ売りの少女」など童話作家で有名なハンス・クリスチャン・アンデルセンの生誕地です。

啓発活動

研修から得た知識と経験を基に日本の現状を比較考察し、得られた結論や意見を身近な人たちに広く啓発する「畜産アンバサダー活動」を実施しました。19 名の生徒が所属高等学校内外で広く宣伝・啓発し、若年層への畜産業参入の動機づけや、担い手の確保の重要性について意識改革をはかりました。将来の畜産業の担い手となる高校生が、海外の実情を知って感化され、日本国内で広く未来の畜産への提案をしたり、畜産の魅力を広く PR する機会を設けました。

未来の畜産業に対するアイデア

19 名のプロジェクト参加者は、本研修後、自身の畜産アンバサダー活動を実施する中で、未来の畜産に対するアイデアを考えました。このアイデアは、研修を通じて得た知識や考えを基に、各自で考えられる我が国の畜産に対する提案や宣言です。
68 ページから始まる畜産アンバサダーたちのアイデアをご覧ください。

畜産ティーン育成プロジェクトの１年

①推進委員会（5月6日）

準　備

②事前調査（5月8日～5月15日）
- Dalum 農業学校との打ち合わせ
- 農畜産概況等の確認

②事前調査
プロジェクトの核となる本研修を実施するため、デンマークのオーデンセにある Dalum 農業学校にご協力をいただき調査を行いました。

③プロジェクト参加者募集（4月28日～5月19日）

④プロジェクト参加者選抜（5月下旬）
- 書類審査
- オンライン面談

③④プロジェクト参加者募集と選抜
全国農業高等学校長協会、全国高等学校農場協会、日本学校農業クラブ連盟にプロジェクト周知のご協力をいただき、全国 20 の高等学校から応募がありました。
書類審査、オンライン面談により、プロジェクト参加者を選抜しました。

①推進委員会（6月17日）

研　修

オンライン

⑤事前研修（6月13日～17日）
- 事前学習
- テーマとキーワード選択
- メンターからの講義
- 畜産業有識者からの講義
- デンマーク大使館からの講義

オンライン

⑥本研修（8月15日～26日）
- テーマとキーワードに沿って研修
- VR を使った学習
- Dalum 農業学校の授業
- 畜産業従事者へのインタビュー
- デンマーク人学生との交流
- 農畜産物の食べ比べ

YouTube ライブ

⑦研修成果報告会（9月29日）
- 研修の成果を社会に発信
- 畜産アンバサダー活動のキックオフ

①推進委員会（9月29日）

①推進委員会⑧成果評価委員会
プロジェクトを客観的、意欲的、専門的に運営し評価するため、外部の専門家４名及びメンター２名による委員会を開催しました。

⑧成果評価委員会（3月10日）

畜産アンバサダー活動（9月～翌年3月）

パンフレット、報告書にまとめ広く配布

Instagram、Twitter、TikTok などの SNS、ホームページにて広く発信

未来の畜産へのアイデア

学んだことをふまえた自分の意見

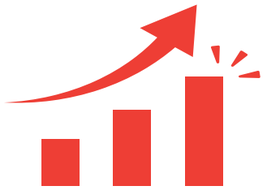
畜産業の魅力・女性の活躍促進

若者たちを鼓舞
- 高校生
- 畜産を目指す若者
- 中学生・小学生など

所属高校を中心とした発表会や農業イベントで畜産業の魅力を発信

農畜産業界に広く PR
- 農家
- 農畜産関連企業
- 農畜産団体
- メディア

就農者の増加



農畜産業界の活性化

畜産ティーン育成プロジェクト参加者

●畜産アンバサダー（高等学校生徒）

北は北海道から南は熊本県まで、全国から 19 名の高校生に参加していただきました。

	姓	名	所属学校	学科	学年
1	砂川	律	北海道帯広農業高等学校	酪農科学科	3 年
2	山内	彩花	北海道倶知安農業高等学校	生産科学科	2 年
3	早坂	凌雅	宮城県加美農業高等学校	農業学科	2 年
4	林	らん	宮城県農業高等学校	農業科	2 年
5	小林	椋堅	福島県立修明高等学校	生産流通科	3 年
6	酒井	謙心	栃木県立宇都宮白楊高等学校	農業経営科	2 年
7	前田	夏海	栃木県立鹿沼南高等学校	食料生産科	2 年
8	竹澤	愛笑	栃木県立栃木農業高等学校	動物科学科	3 年
9	平井	綾	群馬県立勢多農林高等学校	動物科学科	3 年
10	金澤	亜依	筑波大学附属坂戸高等学校	総合学科	2 年
11	志村	真桜	東京都立園芸高等学校	動物科	2 年
12	松島	杏桜	東京都立瑞穂農芸高等学校	畜産科学科	2 年
13	田島	ほの花	岐阜県立岐阜農林高等学校	動物科学科	3 年
14	伊藤	優志	静岡県立富岳館高等学校	総合学科	2 年
15	岡田	百夏	島根県立出雲農林高等学校	動物科学科	3 年
16	西田	直輝	広島県立油木高等学校	産業ビジネス科	3 年
17	飯田	茉景	愛媛県立野村高等学校	畜産科学科	2 年
18	永野	春菜	熊本県立菊池農業高等学校	畜産科学科	3 年
19	中嶋	彩乃	熊本県立南稜高等学校	総合農業科	2 年

●推進委員

本事業が目的達成のためにしっかりと正しく運営されているかを評価するため、推進委員として事業運営のアドバイスをいただきました。

高橋 ゆかり　デーリィーファーム富士山
青山 浩子　新潟食料農業大学 食料産業学部　准教授
遠藤 友治　文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程調査官
福島 直紀　農林水産省 経営局 就農・女性課 農業教育グループ

●メンター

海外農業研修経験を有し、畜産業で活躍する若手女性畜産農家にメンターとして参加していただきました。藤田さんからは酪農、髙橋さんからは養豚に関してアドバイスをいただきました。

藤田 春恵　左草ブラウンスイス牧場
髙橋 千南　龍泉洞黒豚ファーム

研修日程・研修の様子

⑤事前研修　6 月 13 日～ 17 日

効果的な海外研修を実現するため、プロジェクト参加者に対して、プロジェクトの意義と目的、心構えの習得、日本とデンマークの畜産業、本研修時に学ぶテーマとキーワード設定のため、5 日間の研修を夕方 16 時～ 18 時にオンラインで実施しました。

日次	月　日	曜日	内　容
1	6 月 13 日	月	**プロジェクト説明** **参加者自己紹介** プロジェクトの意義や目的、スケジュールなどを説明しました。 19 名の高校生たちが、元気いっぱいに自己紹介しました。
2	6 月 14 日	火	**日本の酪農について** **日本の養豚について** 尚絅大学 現代文化学部 光成有香先生より日本の酪農について、 中日本フード株式会社様のご協力により、日本の養豚について学ぶ機会をいただきました。
3	6 月 15 日	水	**メンター講義** メンターの藤田さん、髙橋さんから、これまでのキャリア、そして今取り組まれている畜産業についてお話いただきました。
4	6 月 16 日	木	**デンマーク王国大使館メッセージ** **Dalum 農業学校プレ講義** **研修テーマ別ワークショップ** Jesper Vibe-Hansen 参事官、松本美保上席商務官より、 デンマーク畜産業のご紹介と応援のメッセージをいただきました。 Dalum 農業学校の Carsten 先生、Erik 先生より、8 月の本研修に向けたプレ講義をしていただきました。 8 月の本研修に向けてテーマ別のグループを編成し、 それぞれのキーワードを決めました。
5	6 月 17 日	金	**事業推進委員挨拶** **研修テーマとキーワードの発表** **事前研修の振り返り** 事業推進委員の髙橋先生、青山先生、遠藤先生、福島先生から 応援のメッセージをいただきました。 テーマ別のグループに分かれて、それぞれが決めたキーワードを発表してもらいました。 今回の学びをとりまとめて、8 月の本研修に向けた意気込みを発表してもらいました。

3 日目の講義を担当されたメンターの 2 人
髙橋さんは息子さんと共に豚の蹄ポーズ、藤田さんは牛の角ポーズ

事前研修最終日
本研修に向けて決意の筋肉ムキムキのポーズ

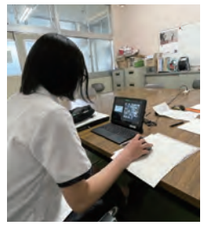
⑥本研修　8 月 15 日～ 26 日

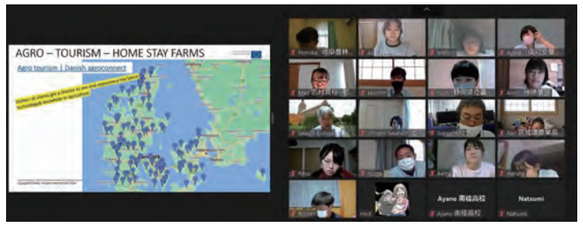
デンマークのフュン島にある Dalum 農業学校にプログラムのコーディネートを依頼し、オンライン研修を実施しました。
Dalum 農業学校の国際事業部講師による講義、畜産農家との意見交換、参加者同士の討論などを行いました。週末には畜産を学ぶ同年代の青年たちと英語で交流し、文化の違いに触れました。さらに、畜産物の比較として、デンマーク産、アメリカ産、そして国産の豚肉の豚肉食味実験も行いました。
さらに学習を深めるため、講義に先駆けて予め作成していた VR 動画教材や、インタビュー動画教材を利用し、講義の中だけでは分からない風景を体験しました。
オンラインでの研修は英語でしたが、日本語の通訳が入りました。

本研修日程　16 時～ 19 時 30 分　実際の講義は 16 時 30 分～ 19 時の 2 時間半

日次	月　日	曜日	内　容
1	8 月 15 日	月	**プログラムのスタートアップ** ・プログラム及び Dalum 農業学校の講師陣紹介 ・参加者の英語プレゼンテーション 最大 3 分 ・デンマークの農業教育について
2	8 月 16 日	火	**デンマークの酪農と肉牛について** ・酪農及び肉牛生産の基本的な紹介 ・伝統的な生産とオーガニック生産の紹介 ・有機酪農家 Christian Bonde さんへのインタビュー
3	8 月 17 日	水	**デンマークの養豚について①** ・豚の生産、管理に関する基本的な紹介 ・デンマークと日本の養豚産業の違いについて 病気やバイオセキュリティー、アニマルウェルフェア、豚舎の設計、生産から出荷までの流れなど ・女性養豚農家 Louise Ipsen さんへのインタビュー
4	8 月 18 日	木	**デンマークの養豚について②** ・屋内養豚と放牧養豚の違い ・女性有機養豚農家 Kirsten Rasmussen さんへのインタビュー
5	8 月 19 日	金	**バランスの取れた作物生産と畜産業** ・デンマークの農地活用を日本と比較して ・リーダーシップとプロフェッショナルな農業経営について ・バイソン農家 Niels Henrik Ove さんへのインタビュー
6	8 月 20 日	土	**Dalum 農業学校で学ぶデンマーク人学生との交流** 男子学生 4 人が、週末の暮らしぶりについて紹介してくれました。Zoom のブレイクアウトルーム機能を使い、日本人高校生を 4 つのルーム分け、それぞれの部屋に 1 人ずつデンマーク人学生が入り、およそ 30 分の交流タイムを 4 回行い、全員が話せる機会を設けました。
7	8 月 21 日	日	**研修中間取り纏め** ・デンマーク、アメリカ、日本の畜産物の食味比較 ・研修成果報告会に向けた準備①
8	8 月 22 日	月	**デンマーク農業と社会福祉** ・デンマークの農業継承について、農場運営の将来的な組織化や所有権など ・デンマークの協同組合運動の紹介、少数の農家から多国籍企業への発展について ・農家のエンパワーメントについて ・デンマークの福祉制度について 社会福祉、医療、高齢者・保育所、教育、休暇、ケアデイ、出産や育児休暇など
9	8 月 23 日	火	**次世代の畜産をどのようにかたちづくっていくか** ・農場での作物の取り扱い、保管、保存の基本的な紹介 ・作物の肥料となる動物の排泄物の取り扱い ・バイオガスを例に持続可能なエネルギー生産について
10	8 月 24 日	水	**Dalum 農業学校講師陣による、本研修全内容のフォローアップと全体的な質疑応答**
11	8 月 25 日	木	・本研修全内容のフォローアップ ・研修成果報告会に向けた準備②
12	8 月 26 日	金	・研修成果報告会に向けた準備③ ・本研修の総括

♣研修の様子





オンライン会議アプリ Zoom を用いて研修を行いました。

⑦研修成果報告会　9 月 29 日（木）13 時 30 分　YouTube ライブ

研修成果を広く知ってもらうために、研修成果報告会を YouTube ライブ配信しました。予め編成したグループごとに学びを取りまとめた動画を作成し、まずその動画を流しました。そのあと、畜産アンバサダー宣言として、研修で学んだことを参加者一人一人が発表しました。最後に、事業推進委員の青山浩子先生に総括していただきました。短期間のオンライン研修からデンマークの畜産業を学び、日本の畜産現場が抱える問題点や既存のやり方についての改善点をグループで議論して見出し、畜産アンバサダー活動の第一歩として自分自身の言葉を発信することができました。

1．稼げる畜産 ーライフスタイルと畜産経営
林　らん、早坂凌雅、酒井謙心、伊藤優志

2．ジェンダーフリーな畜産
ー男女共生の畜産社会を目指して
西田直輝、平井　綾、田島ほの花、岡田百夏、中嶋彩乃

3．持続可能な畜産
ー 人と家畜のパートナーシップ
金澤亜依、山内彩花、飯田茉景、志村真桜、永野春菜

4．若者のための畜産
ー私たちが創る日本の畜産の未来
小林椋堅、砂川　律、前田夏海、竹澤愛笑、松島杏桜

YouTube ライブでの報告会を授業の一環として取りあげてくださる学校もありました。

研修成果報告会は YouTube の
アグトレチャンネルから
ご視聴いただけます

♣研修でお世話になった方々

◆本研修受入学校（研修コーディネート） Dalum Landbrugsskole 国際事業部講師陣の皆さん

Mr. Carsten Friis Poulsen
国際事業部の部長で、豚の生産管理、リーダーシップのスペシャリスト。本研修の全般的なコーディネート、本研修の 1、8 日目を担当していただきました。

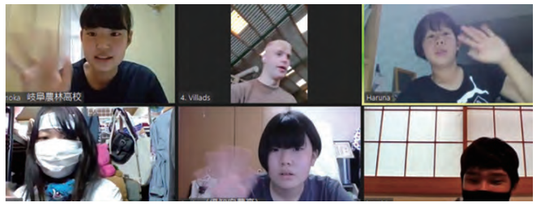
Mr. Niels Erik Jespersen
作物、粗飼料及び持続可能な農業のスペシャリスト。本研修の 1、5、9 日目を担当していただきました。来日経験があり、日本通です。

Ms. Marianne Kyed
豚の生産管理、リーダーシップのスペシャリスト。本研修の 3、4 日目を担当していただきました。

Mr. Kristoffer Eriksen
牛の専門家。本研修の 2 日を担当していただきました。

◆ Dalum 農業学校の生徒の皆さん

デンマーク人学生の週末の日常を、ビデオ通話を使って日本の高校生たちに教えてくれました。大きなトラクターを運転しながら、牛舎を案内しながら、料理をしながら、素敵な自分の部屋の中から…



Andreas さん

Mikkel さん

Mads さん

Villads さん

◆ゲストスピーカー

養豚農家 Ms. Louise Ipsen
母豚 400 頭規模の養豚農場のヘッドマネージャー。40 代で子育て真っ最中。「男性と女性で仕事の得手不得手があるのだから、それぞれの得意なことをやったらいい！畜産業は女性に適している！」とメッセージをいただきました。

有機養豚家 Kirsten Rasmussen さん
母豚 300 頭規模の放牧養豚農場のオーナー。オーガニックによる放牧養豚の取り組みについて、お話いただきました。特に、生産や管理過程をストーリーとして付加価値をつけ販売するマーケット戦略の話が興味深かったです。

有機酪農家 Christian Bonde さんご家族
100 年以上の歴史を持つ搾乳牛 120 頭、170ha 規模の酪農家。オーガニックによる放牧酪農の取り組みについて、お話いただきました。カーフハッチや放牧場、また家の中なども見せていただきました。

バイソン農家 Niels Henrik Ove さん
430 頭規模のバイソンを生産管理している農場のオーナー。農場内でバイソン肉を加工し販売したり、バイソン肉を提供するレストランや宿泊施設の経営を行うなど 6 次産業や、オープンファームの取り組みについてお話いただきました。

◆動画教材

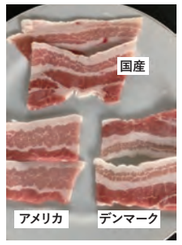
株式会社 Magic Plus
昨年度にデンマークを訪問いただき、VR 動画やインタビュー動画の撮影及び編集されたものを動画教材として提供いただきました。また、9 月 29 日の研修成果報告会では YouTube ライブ配信にもご協力いただきました。

◆通訳

Mr. Jerry Jewett（JJ さん）
ニュージーランド在住の英語・日本語通訳です。2019 年にニュージーランドで実施した事業からずっとご協力いただいており、今年度も安心できる通訳をしていただきました。

◆畜産物食味試験

中日本フード株式会社
畜産物を比較するため、デンマーク産、アメリカ産（中西部）、国産の豚バラ肉をご提供いただきました。また、事前研修にもご参加いただき、日本の畜産物流通過程についてもご説明いただきました。



3 畜産アンバサダー活動の報告

畜産ティーン育成プロジェクトでは、参加者がこのプロジェクトから得た学びを自分自身の考えにまで昇華し、畜産に対する熱い思いを対外的に示していくことが求められています。畜産業の魅力を PR する発表やイベントへの参加等で畜産に対する理解を広める役割を持った青年たちは「畜産アンバサダー」と称し、その PR 活動を畜産アンバサダー活動として広く推進しています。

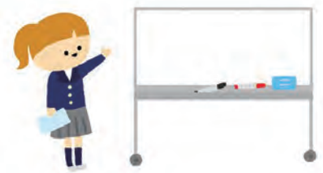
デンマークの畜産から学んだことをふまえて、日本の畜産との比較考察を行い、さらに、これからの日本の畜産をより良くしていくためにできることを考えました。そして、畜産の魅力を伝えるために、所属高等学校内での研修報告会、地域のイベント等での発表を通じて、畜産の魅力、担い手の確保、次世代の畜産業をテーマに研修成果の積極的な普及活動を行いました。

校内では、同級生や下級生たちに対して、また学校祭などのイベントでは、新年度入学予定の中学生や、来校した方々に思いを届けました。その他にも、保育園や幼稚園、小学校など様々な場所で活動しました。
畜産アンバサダー活動では、参集者に対してアンケートを取り、発表を聞いての感想や畜産に対する意識の意識向上を調査しました。

◆畜産アンバサダー実施期間
2022 年 8 月 29 日～ 2023 年 3 月 6 日

◆実施回数
〇学校内（プロジェクト参加者母校での活動、学校の文化祭なども含む） 27 回
〇地域（保育園や小学校、ふれあい動物園など） 7 回
〇国際化対応営農研究会 5 回
※全国を 5 ブロックに分け各 1 回

◆アンバサダーの声を届けられた人数
総数 11,102 人



畜産アンバサダー活動によるアンケート結果

有効回答数：2,455 名

1 畜産業に対する印象が良くなった

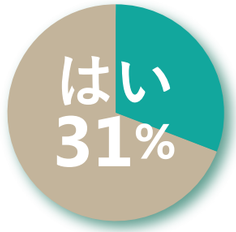
2 畜産業の重要性がよく分かった

3 畜産業では若者の活躍が期待できる

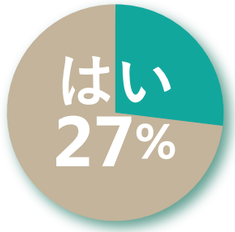
4 このような発表の機会がもっと必要だ

5 日本の畜産は変わる必要がある

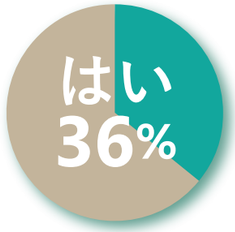
6 将来畜産業に携わりたいと思う



7 私も畜産アンバサダーになりたい



8 海外農業研修に行きたい



畜産アンバサダー活動の事例

学校祭での活動 ①

東京都立園芸高等学校　志村真桜さん

2022 年 11 月 9 日、10 日と 2 日間にわたり開催された学校の園芸展（文化祭）で活動を行いました。プロジェクトで学んだことを、模造紙に分かりやすくまとめた資料を作成しました。学校内の生徒はもとより、中学生や、保護者が足を止めて見てくだいました。

学校祭での活動 ②

愛媛県立野村高等学校　飯田茉景さん

2022 年 10 月 29 日に開催された高校祭で活動を行いました。プロジェクトを通じて学んだことをまとめた発表用紙を作成し、展示しました。畜産科以外の生徒や先生に取り組みを知ってもらうと同時に、質問もいただきました。研修成果報告会で用いたパワーポイントのスライドも活用し、工夫して質問に答えることができました。

地域に根差した活動 ①

北海道倶知安農業高等学校　山内彩花さん

2022 年 10 月 1 日に開催された収穫祭の来校者へ、プロジェクトで学んだデンマーク畜産業についてパンフレットを作成し、配布しました。実際にパンフレットを手にした方から、プロジェクトのことや学校での活動について質問があり、多くの人に畜産について興味を持ってもらう“きっかけ”をつくることができました。
また、学校のある倶知安町のおよそ 7,500 世帯に配布する地域通信のなかで、畜産ティーン育成プロジェクトの活動を紹介し、研修の成果を発信することができました。

地域に根差した活動 ②

宮城県加美農業高等学校　早坂凌雅さん

同校が認定を受けている酪農教育ファーム認証牧場の取り組みとして、受入型酪農体験活動の場で畜産アンバサダー活動を実施しました。体験にやってきた地元の小学生およそ 50 名に対して、搾乳体験や牛とのふれあい体験を中心に行う傍ら、このプロジェクトで学んだことや、畜産の魅力について伝えることができました。

地域に根差した活動 ③

広島県立油木高等学校　西田直輝さん

プロジェクトで学んだことをパネルにまとめ、地域の小中学生に畜産業の魅力や次世代の畜産業の在り方について話しました。デンマークにおける畜産業の課題点や気づき、発見などを紙芝居やポスターにして発表を行いました。
また、牛と触れ合う場を設け、徐糞やブラッシングも体験してもらいました。実際にデンマークに行ってみたいという生徒がいました。

地域に根差した活動 ④

熊本県立南稜高等学校　中嶋彩乃さん

同校の「総合実習」において、小動物舎を会場に酪農体験を開催した際に、畜産アンバサダー活動を行いました。この酪農体験には、地域住民や中学生が参加し、搾乳体験や牛とのふれあい、クイズ、牛乳石けん作りを通して、牛や牛乳、酪農・畜産の魅力をアピールする機会となりました。

共進会での活動

島根県立出雲農林高等学校　岡田百夏さん

2022 年 10 月に鹿児島県で開催された、第 12 回全国和牛能力共進会の場で発表を行いました。海外の畜産と日本の畜産の違いについて自らの考えをまとめ、特に女性の活躍という、これからの畜産に欠かせないテーマについて発表を行いました。学校での記録や、畜産業の担い手確保のために行っている取り組みについても触れ、大勢の前で堂々と発表することができました。

国際化対応営農研究会での活動

本会が主催する、全国各地の農業者や農業関係者の国際的な担い手育成をテーマとした勉強会である国際化対応営農研究会で、畜産アンバサダー活動を行いました。北から、福島県、栃木県、滋賀県、島根県、大分県で開催し、「未来の畜産に向けて」というタイトルで発表しました。
昨年度は、新型コロナウイルスの影響により中止となる会場やオンラインでの発表となりましたが、今年度はすべての営農研究会会場で対面による発表を行うことができました。
営農研究会の参加者の多くは、農業経営者または農業従事者、農業関係者、また就農を目指す青年であり、農業を良く知る人が多数いました。各会場での畜産アンバサダーたちの発表に大いに共感いただき、エールが贈られました。

【北海道・東北ブロック】
2023 年 1 月 31 日（火）
ホテル福島グリーンパレスにて
- 山内彩花さん
- 林　らんさん
- 小林椋堅さん
- 金澤亜依さん

【関東甲信静越ブロック】
2022 年 11 月 21 日（月）
栃木県総合文化センターにて
- 酒井謙心さん
- 前田夏海さん
- 竹澤愛笑さん
- 平井　綾さん

【東海・近畿・北陸 3 県ブロック】
2023 年 2 月 7 日（火）
ホテルボストンプラザ草津びわ湖にて
- 砂川　律さん
- 早坂凌雅さん
- 田島ほの花さん
- 西田直輝さん

【中国・四国ブロック】
2022 年 11 月 26 日（土）
島根大学 松江キャンパスにて
- 志村真桜さん
- 飯田茉景さん
- 中嶋彩乃さん

【九州ブロック】
2023 年 2 月 2 日（木）
別府 豊泉荘にて
- 松島杏桜さん
- 伊藤優志さん
- 永野春菜さん

ホームページでの情報発信

本会のホームページの中で、活動の様子や、オンライン配信した YouTube ライブでの研修成果報告会についてご紹介しています。

普及パンフレット

日本の畜産をもっと元気に！
研修成果を広く普及するため、研修のダイジェストとなるパンフレットを作成し、全国の農業高等学校や関連機関及び企業、農畜産業関係者等に配布しました。プロジェクト参加者たちが特に学んだ点を抜き出しました。本報告書の 90 ページ目からをご覧ください。

4 参加者への意識調査

畜産業に関する意識調査

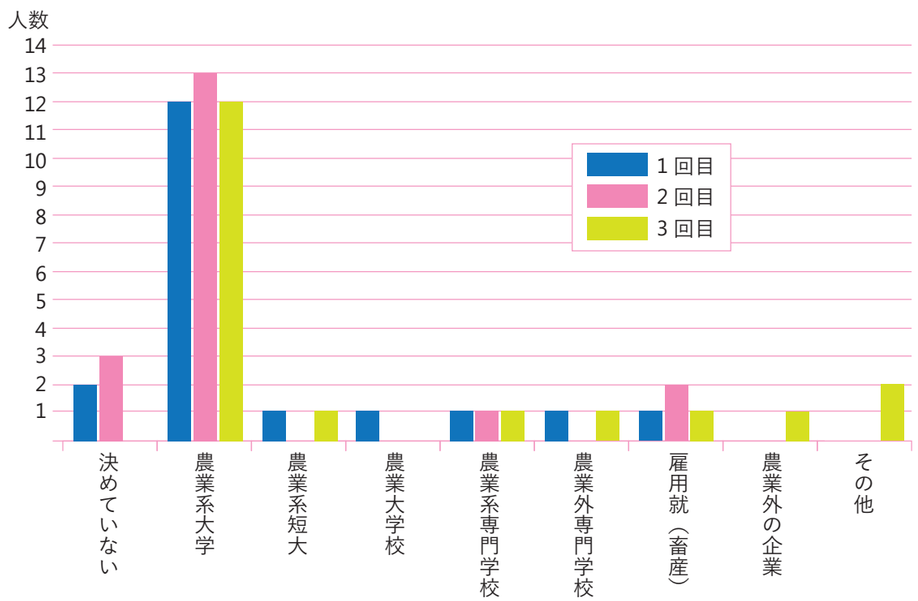
参加した高校生 19 名の畜産業に対する意識や考えが、本プロジェクトを通じてどのように変化したかを、アンケートを通じて調査しました。アンケートは以下の通り全部で 3 回実施しました。

1 回目：プロジェクト参加者として選抜された際（6 月上旬）
2 回目：本研修を終えた際（8 月下旬）
3 回目：本研修の経験を基に行った畜産アンバサダー活動後（3 月上旬）

設問は、当てはまる、やや当てはまる、やや当てはまらない、当てはまらない、わからない、の 5 つです。

1．プロジェクトは、自分の進路と向き合う機会となった

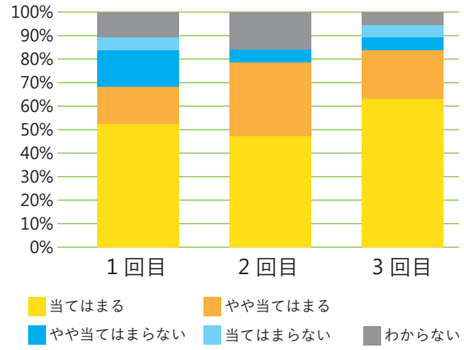
参加者の進路に関する統計結果では、農業系大学への進学を考えている人が多数を占めています。農学部、生物資源科学部など畜産系の学科がある、酪農学園大学、帯広畜産大学、鹿児島大学などを目指しているとのことでした。さらにその後は、畜産農家になるための道筋を思い描いているようでした。3 回目の調査では、決めていないを選ぶ人はいなかったため、本プロジェクトが進路を決めるきっかけの一つとなったと言えるのではないかと思われます。



2．現場だけではなく、畜産を支える側の仕事にも興味が広がる

畜産ティーン育成プロジェクトでは、約 10 か月間のプロジェクトを通じて、参加者たちが畜産業に対するポジティブなイメージを持つことを目標としています。その中でも、実際に畜産業をしてみたいと考えるかどうかは大切な指標です。
実際の将来の進路として、畜産業を考えることになる 3 回目のアンケートでは、畜産業に携わりたいと考える割合が 80％を超え一番大きくなっている一方、一部の人はそう考えられない、またはまだ決めかねているという様子がうかがえました。

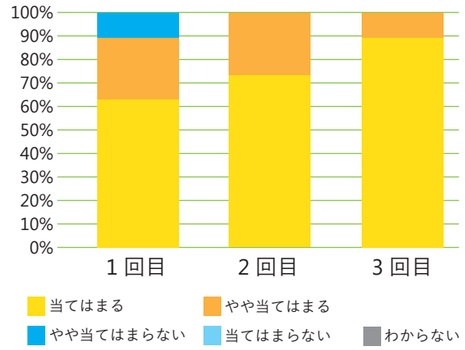
2．将来は畜産業に携わりたい



3．畜産業はかっこいい仕事！

畜産業を学ぶ高校生たちであるため、当初から畜産業に対してかっこいいというイメージがあったように見受けられます。かっこいいという言葉は漠然としており、人それぞれの持つイメージが異なるとは思いますが、デンマークの畜産農家の皆さんは、オンラインでのインタビューの際、自信に満ちた声で自分の農場の経営を紹介する様子からは、かっこよさがにじみ出ていたと思います。どんな畜産がかっこいいと思うか、さらに踏み込んだ質問もしてみたいですね。

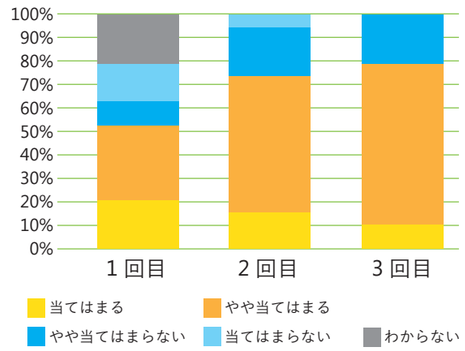
3．畜産業はかっこいい仕事である



4．家畜が幸せに暮らすためには、しっかりした経営が必要

今回のプロジェクト参加者は、特にアニマルウェルフェア（動物福祉）に対する興味が強い人が多かった印象です。動物と共に仕事ができるのが畜産業の醍醐味ですが、一方で、産業動物として売買され、食肉として加工されるという末路を考えた時、アニマルウェルフェアが持つ意味とは何なのか、深く考える機会となりました。デンマーク農家からは、しっかりとした経営により十分な稼ぎになり、それによってしっかり家畜管理ができるようになる。だからお金を稼ぐことが大切であると、お話しいただきました。

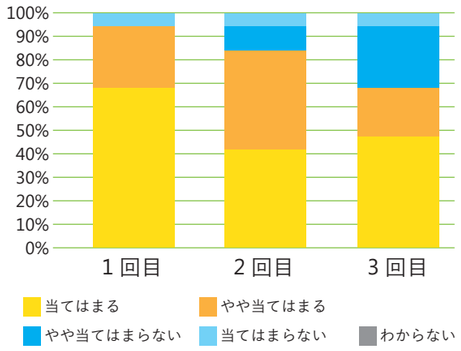
4．畜産業はもうかる仕事である



5．創意工夫で大変な作業を減らす努力を

畜産業は他の産業よりも大変な仕事であるという設問では、特徴的な変化が見られました。
普通、他業種と畜産業を比べるためには比較対象が必要になります。しかし、今回は日本とデンマークの畜産を比較する中で、同じ農作業をするにしてもより効率的にできること、スマート農業によって変わっていくだろう未来の畜産を想像する機会に触れ、当初思っていた“畜産業は大変”という認識に変化が生じたように感じられます。
一方で、大多数の参加者にとっては、畜産業が他の業種に比べて大変だという強い印象もありました。それは、毎日家畜の世話をする必要があるので、休暇が取りにくいこと、機械化されても残っている力仕事、動物のことばかりか機械や薬品など様々なスキル（技術）が必要となることなどを踏まえた場合、畜産を学ぶ高校生たちには、その大変さが身に染みているからかもしれません。

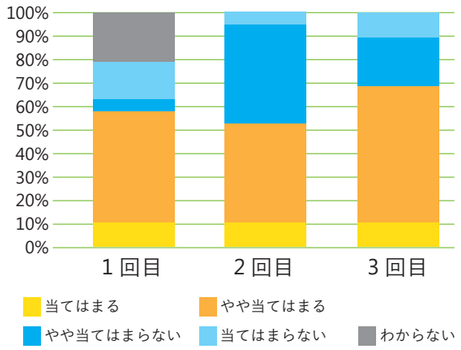
5．畜産業は他の産業よりも大変な仕事である



6．アニマルウェルフェアについての考え

アニマルウェルフェアは、まだ日本では十分に広まっていない考えではないかと思います。
特に、法律の面での理解は進んでいないのではないでしょうか。デンマークのアニマルウェルフェアの授業では、家畜の飼い方や管理の仕方について厳しいルールを設けて、虐待を防ぎ、生き物として尊厳を守ることを意図していることを学びました。アニマルウェルフェアが農家の負担になるというのは、様々なルールにより農家の経営が制限されることを前提とした設問です。授業では、アニマルウェルフェアの重要性について説明されるとともに、農家がしなくてはいけないこともたくさん聞きました。そのため、農家への負担になるという考えを持った人がいました。

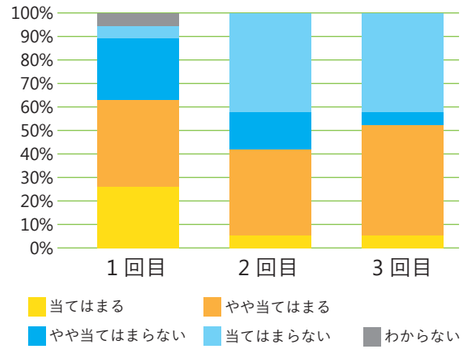
6．アニマルウェルフェアは畜産農家の負担になる



7．畜産業のジェンダーギャップについて

Dalum 農業学校の授業の中で、度々強調されたことがあります。それは、男性であっても女性であっても畜産業には必要な人材であり、その適正は男性だから、女性だからという違いではなく、その人、個人が持つスキルによるものだということです。農業機械の開発により筋力の差を埋めることができるようになったことも重要だということでした。
一方で、女性の細い腕や手、細かいことに気が付く性格的な特徴は畜産業に向いているという側面も紹介されました。プロジェクトでは、5 名の男子生徒が参加し、積極的にジェンダーギャップのことを学び、女子生徒と意見を交わすことができたのも一つ大切な機会だったと思います。

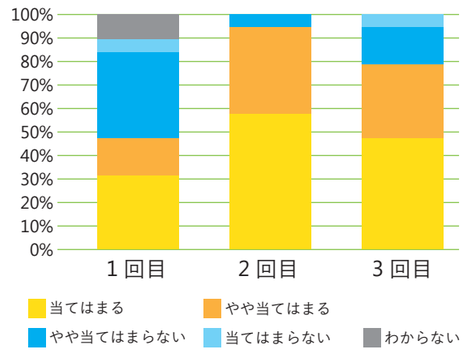
7．畜産作業の適正は男女によって差がある



8．出産・子育てと畜産業の両立は、可能である

未成年の高校生にとってはあまり馴染みのないテーマであり、少しイメージがしにくい設問でした。Dalum 農業学校の授業では、育児と仕事の両立の可能性について、色々なことを教えていただきました。一つ大切なことは、家族や地域の支えなしでは達成し得ないという純然たる事実です。

8．出産・子育てと畜産業の両立は可能である

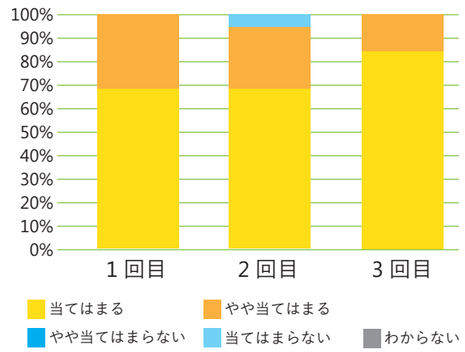


その一方、雇い主も高い能力のある女性農業従事者を失いたくないということから、デンマークでは Maternity Leave（出産休暇）なども積極的に取ることができるようになっていることが分かりました。

9．新しいことに挑戦していく意欲

このプロジェクトでは、日本国内にいてはなかなか知ることができない海外の畜産現場をオンラインで見聞きし、デンマークの農業者、農業指導者の皆さんの意見を直接聞くことができました。コロナ禍により、交流が途絶え気味だった高校生の国際的な取り組みの一端を担えたものと思っています。
今回参加した19人の高校生たちは、プロジェクト参加中に終始意欲的に質問したり、お互いの意見を求め交換し合うなど、高いレベルで畜産業を学ぶ努力を続けることができました。また、夏のオンライン研修後、自らが畜産の魅力を発信する畜産アンバサダー活動を通じて、畜産業の魅力や、自分の考える理想の畜産像を具体的にできたことは、将来、自分自身が畜産業に携わるときの道筋を照らす光になると思います。アンケートからは、すべてのフェーズで興味を持って取り組んでいた様子がうかがえました。

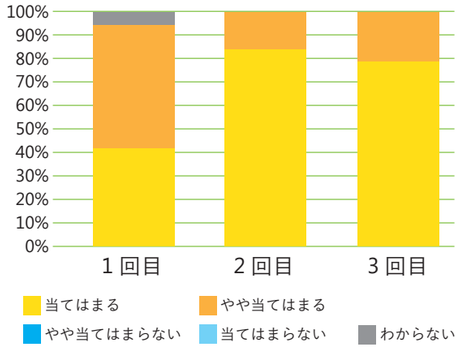
9．私は、新しいことにどんどん挑戦したい



10. 日本の農業者はもっと外国の農業を知るべきだ

高校生たちはデンマークの畜産を通じて、日本とは違う世界、違う畜産、違う考えがあることを知りました。新しい知識を得る機会は、素晴らしいことだったに違いありません。
逆に、デンマークの畜産業と日本の畜産業の類似点や、本質的に変わらない重要なポイントもあることを知りました。デンマークでしか行われていないと思われた技術や取り組みが、実は日本にも昔からあったり、知られていることだったりしました。例えば教育ファームやロボット技術、家畜福祉などです。
しかし、それらは二か国の比較によってもたらされた学びであり、アンテナを高く張って、違う側面から見て、初めて感動し実感したから得られた学びでした。他の方々にも自分たちと同じ体験をしてほしいという思いが、アンケートからも見てとれます。

10. 日本の農業者はもっと外国の農業を知るべきだ



日本とデンマークの畜産業の「強み」と「弱み」について記述式で回答してもらいました。

11. デンマークの畜産業の強みは、何だと思いますか？

- 有機農業が進んでいて、環境に配慮した食品への消費者の理解がある
- 消費者が農業や畜産に興味を持ち、自分の食べるものにこだわりを持って購入している
- デンマークの国民は環境配慮やアニマルマルフェアの関心度、認知度が高い
- 福祉に対する取り組みと有機農業への関心が高い
- 就農までのシステムが確立されている
- 大規模な農業経営と国民のニーズに合わせた生産や経営方法
- 男女の差別がなく仕事がしやすい環境
- 農家さんにも動物にとってもよい畜産業をしている
- 動物福祉、生産現場が消費者に見える（放牧）、国民にあった味の追求、誰でも働ける環境
- 消費者までもが、家畜の管理方法や味に関心がある
- 生産量、安全性、アニマルウェルフェア
- ジェンダーレスな考えが広まっている
- 畜産業に関する法律
- 土地が広い
- 付加価値をつけて、しっかり利益を得られている
- 広大な農地があり土地の循環がよく、また牛の飼育状態が良い、有機畜産をしている
- 消費者の意識が高く、アニマルウェルフェアが浸透している、生産者と消費者の強いつながりがある
- 消費者の意識が高い
- 働きやすさ

12. デンマークの畜産業の弱みは、何だと思いますか？

- 後継者不足、農業政策の厳しさ
- 就農者や農家戸数が減っている、畜産物の価格が高い
- 法律による生産者の負担
- 国土面積が小さいところ
- 法律が多く、経営するための課題が多い
- 他国に比べ生産するためのコストがかかりすぎる、季節により変動が大きい
- 環境への配慮が重要、多頭飼育・機械化など生産コストが高い
- 法律や規律が厳しく、畜産農家に負担がかかっている
- 法律による農家への負担
- 担い手不足
- 法律による飼育方法の規制
- 資格がないと就農できない
- アニマルウェルフェアの重視により、飼育動物の死亡率が高い
- 国土が小さい点
- アニマルウェルフェアが規制されていることで、農家の負担になっている
- 法律が厳しい
- アニマルウェルフェアにも問題がある

13. 日本の畜産業の強みは、何だと思いますか？

- 農家同士のつながり
- 農畜産物が安定価格で提供されている、食にこだわりを持つ人が多い
- 受け継がれた飼育技術、一頭一頭の飼育管理技術が高い
- 安心安全
- ブランド化が上手い、安心できる商品を届けるのが得意なところ
- 品質と安全性の高さ
- 複合経営している人が多い
- 動物の命を最優先に考えている
- ブランド化で質の高い畜産物
- 農家に変わろうという意思が一部に見受けられる（そこから拡散性があること）
- 安全性、品質の良さ
- 農産物の高い品質
- 農産物の付加価値
- 資格がなくても就職できる
- 高品質なものを提供できている
- 和牛などを含む海外でも人気のある高品質の牛の生産能力が高い点
- 農産物の安全性が重視されている
- 日本のブランドが世界で評価されている
- 家族経営

14. 日本の畜産業の弱みは、何だと思いますか？

- 飼料、肥料の輸入、休日の少なさ、後継者不足
- 農業や畜産業があまり身近なものではない、飼料を輸入に頼っている
- 海外からの輸入飼料に依存
- 機械化が進んでおらず小規模
- 輸入飼料に頼ることが多く、飼料価格の高騰に影響されやすいところ、担い手不足
- 飼料を海外に頼っているため、海外情勢の影響を受けてしまう
- 放牧場がない、自国で飼料を生産することが少ない、ブランドにこだわりが強い
- 飼料コストがかかる
- 高齢化・担い手不足、耕作放棄地を利用できていない
- 畜産業の仕組みや考え方の改善ができない
- 労働者不足
- 休暇が取りづらい
- 後継者不足
- 土地がせまい
- 機械化が進んでない
- 中山間地が多くを占めており放牧が難しく生産コストカットが難しい、また肥育において重要である濃厚飼料を日本で補うのが難しく、輸入に頼り切っている
- アニマルウェルフェアが浸透していない、畜産に関するイベント等を積極的に行っていない
- 消費者意識
- 未だに男女平等の考え方が薄い

5 参加者の報告

畜産アンバサダー
北海道帯広農業高等学校
酪農科学科３年
砂 川　　律

❶ テーマ

若者のための畜産
― 私たちが創る日本の畜産の未来

❷ キーワード

就農しやすい環境づくり

❸ キーワードのつながりと考察

私は将来、酪農家になるという目標を持っています。就農する際は、金銭面や責任の大きさ、作業の大変さなど、将来への様々な不安があると考えており、少しでもそれらの不安を払拭することができれば、就農へのハードルは今よりも下がるのではないかと感じました。そのため、「若者のための畜産」というテーマで、キーワードとして「就農しやすい環境づくり」を設定し、中心的に学びました。
このキーワードは、就農する際の不安を取り除くヒントが含まれており、将来、私たちのような若者が日本の畜産を支えていくための第一歩になると考えています。また、将来、自分が就農することになった際、この研修でキーワードを中心に学んだ内容を少しでも役立てることができるようにしたいと考えました。
デンマーク研修に参加したことから、私が感じた日本とデンマークの畜産の相違点は二つあります。
一つ目は、都市部と地方部とで畜産に対するイメージの違いが少ないことです。デンマークでは牛や豚を連れたイベントが都市部で開催されており、子供に対する農業教育が行われていることから、印象の相違が少ないように感じました。
二つ目は、就農するための流れが確立されていることです。一般教養と専門知識、技術を学ぶことが義務化されていることから、農家の知識量の違いが少なくなると感じました。これらが行われていることで、若者が畜産について学ぶことができ、就農する際の不安を少しでも減らすことができると感じました。
デンマークでは子供や大人、農業と関わることが少ない人たちも畜産について知ることができるイベントが、農業を広めることを目標とした団体が主催して行われていました。農業後継者が減少傾向にある今、未来の畜産を支えていく子供たちや若者、農業に関わることの少ない人々に、農業教育を行うことはとても大切だと考えます。また、畜産に関わることの少ない人が持つ「くさい・汚い」などの悪い印象を払拭することが最も大切だと考えています。
そのため、日本でも積極的に都市部の方々に、畜産について知ってもらうことができるイベントを開催することが必要だと感じました。また、私たちのような若者がそのようなイベントを行うことで、より親近感のある参加しやすいイベントになると考えます。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

私が研修を通して感じたことは二つあります。
一つ目は、デンマークの農業政策が多く、特にアニマルウェルフェアについて厳しいということです。デンマークの農家は、農業政策と深く関わりあいながら農業経営を行っており、特にアニマルウェルフェアに取り組んでいる畜産農家は、厳しい政策に上手に対応していました。農業政策の多さから、デンマークでの農業経営の大変さを感じるとともに、国全体として農業に関わっており、農業の重要さを国民が認知することができる体制がつくられているように感じました。
二つ目は、酪農経営方法の違いです。有機生産された生乳だけを買い取る企業や、酪農家の収益が体細胞数に左右されることなど、日本では聞いたことのない内容ばかりでとても驚かされました。私が特に驚いたことは、体細胞数が増加した際に、買い取りメーカーに無料で改善を手伝ってもらうことができるということです。
日本では各酪農家が対応して改善を行っているため、デンマークの畜産に対する対応力の高さを感じることができました。また、生産者や消費者と企業のつながりが強く、信頼関係が成り立っており、値段よりも品質を重要視する考えが日本よりも多いように感じました。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私の実家がある大阪府の地域では、農業が盛んではないため、中学生でも酪農が何を意味しているか知らない人がほとんどでした。そのため、都市部の方々に酪農について少しでも興味を持ってもらいたいです。また、農業の大切さを知ってもらい、どのように食品が生産されているのかを知ってもらいたいです。
酪農とは何なのか、牛がどのような動物なのか、酪農がどのように大切か、どれだけ楽しいか。高校に入学するまで農業について何も知らなかった私が３年間で何を学び感じたのか、伝えていきたいです。
このことにより、国民の畜産業に対する興味関心が向上すると考えます。国民の食料を生産していること、毎日大変な思いをしながら食料生産を行っていることなど、畜産業の重要性を知ってもらうことができます。
また、畜産の重要性を広めることで、悪い印象を払拭することができると考えます。「動物がかわいそう、健康に良くない」などの畜産業に関する様々な意見による悪いイメージを払拭することにより、本当の畜産業について知ってもらうことができます。
これからの畜産業については、作業効率を向上させるために、機械化やロボット化が進むことが予想できます。機械化が進んだ牧場が増えていくとともに、今よりも価格の安い機械が販売されると考えます。しかし、現在、生乳の生産調整が実施されているため、酪農家の規模拡大はあまり進まないと考えます。また、地球温暖化や異常気象が進んでいくことが予想できるため、本州の酪農家は、猛暑や台風、飼料価格の高騰など、様々な影響により減少していくと考えます。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は酪農家になることです。具体的には、高校在学中に様々な活動に参加した経験から、アニマルウェルフェアに取り組んだ放牧酪農家になりたいと考えています。日本では、アニマルウェルフェアの普及は進んでいないため、その普及に貢献できるような酪農家になりたいです。
高校卒業後は大学に進学し、酪農や農業経営について学びたいと考えています。また、大学在学中に積極的に英語の勉強を行い、海外の牧場を見学できるようにしたいです。
酪農家の方々から「将来どのような経営を行っていくかは、これからいろんな酪農家を見学して自分に合ったものを見つけるといいよ」と助言をいただいたため、大学進学後に様々な酪農家を見学したいと考えています。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は、専門性の高い職業であり、将来の選択肢が狭まることから、将来への不安があると思います。ですが、まだ中高生の頃から将来について具体的に考え行動することは、とても勇気があり凄いことだと思います。
私は酪農家の方に「したいことは必ず声に出して、少しでも行動し続けなさい。そうすればどれだけ経験がなくても必ずチャンスは回ってくる」と言われたことがあります。
自分のしたいことのために貪欲に行動し続け、頑張ってください！

畜産アンバサダー

北海道倶知安農業高等学校
生産科学科２年
山　内　彩　花

❶　テーマ

持続可能な畜産
― 人と家畜のパートナーシップ

❷　キーワード

生産性とアニマルウェルフェアの両立

❸　キーワードのつながりと考察

私の通う学校では和牛を飼養しており、飼養頭数が少ないため１頭１頭が自由に動き回れる十分な飼養面積が保たれていますが、農家さんでは飼養頭数も多く、狭いスペースで何頭もの牛が飼われていることがあります。そのため、日本ではアニマルウェルフェアが浸透しにくいと感じました。しかし、農業経営について考えたとき、アニマルウェルフェアだけに配慮すると、生産費が高くなり畜産物の値段も高くなるため、消費者の方々に買ってもらえなくなる可能性があります。一方で、生産性だけを考えてしまうと動物の自由度や快適性が保たれなくなってしまいます。
そこで「生産性とアニマルウェルフェア」の二つのバランスを保つことが、人間にも動物にもやさしい農業経営・持続可能な畜産業につながると考えました。
デンマークでは、アニマルウェルフェアに関する法律が制定されており、畜産農家は、アニマルウェルフェアを意識できる環境が整っていることが分かりました。それに加え、消費者が「動物が幸せに飼われていたものが欲しい」という考えを持つ人が多いため、農家さんは動物を第一に考えた飼養管理を行っていても、経営が成り立ち、生産性とアニマルウェルフェアの二つのバランスが取れていると感じました。デンマークでは、農場を観光できる観光牧場やオープンファームなどが多く、よくイベントが開催されていると聞きました。小さな子供から大人まで幅広い年代に情報発信ができ、幼いころから畜産業がデンマークの人々にとって身近な職業であるため、消費者もアニマルウェルフェアについて意識することができているのだと感じました。

デンマークのように、人間にも動物にもやさしい農業経営をするためには、アニマルウェルフェアなどの付加価値がついた畜産物を手に取ってもらえる環境が必要だと考えます。今の日本では、アニマルウェルフェアがあまり浸透していないため、畜産物に対する付加価値がどのようなものか伝わらず、ただ「値段の高い肉」ということしか伝わらない可能性があります。そうすると従来のものしか売れず、農家さんが稼ぐことができず、アニマルウェルフェアも普及しません。そのため、アニマルウェルフェアや畜産業について情報発信を強化し、消費者に伝えることで、付加価値のついた畜産物を手に取る機会も増え、生産性とアニマルウェルフェアのバランスが取れ、持続可能な畜産業になると考えました。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークでは養豚業が盛んで、有機農業を行う農家も多いことを知りました。有機農業では特にアニマルウェルフェアへの意識が強く、法律やルールも細かく定められています。研修で養豚農家さんの話を聞き、「動物が農場などの飼われている環境に合わせるのではなく、動物が快適に過ごせるように私たちが環境を作って合わせてあげることが大切」と述べていたことが、強く印象に残っています。
動物の飼育でうまく仕事が進まないとき、無理やり動かそうとしたり、ストレスを与えたり、音を立てて誘導するのではなく、柔軟に対応していくことが大切だと思いました。自分のタスクを急いでこなすのではなく、動物と対立せずに仕事を進めていくことが、人間のためにも動物のためにもなると考えました。さらに「動物のことを考えて行動していると、私たち人間が仕事のためにやってほしいことを動物のほうから進んでやってくれる」とも述べていました。仕事をするために人間の思い通りにするのではなく、日々動物ともコミュニケーションを取りながら仕事をすることが、動物たちと仕事をするうえで大切だということを学びました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は今回の研修や学校生活で学んだ、肉質や値段だけでなく動物が飼われていた環境や過程などの「見えない価値」について広めていきたいと考えています。現在の日本では、アニマルウェルフェアはまだ浸透していませんが、個体識別管理などの取り組みは、どの農家でも行っています。消費者のもとに安心・安全な畜産物がどのようにして届くのか、そのために生産者はどのような取り組みをしているのかを私自身が深く学び、伝えていきたいです。まずは学校や自分が住んでいる町など、手の届く範囲からパンフレット配布や宣伝などの情報発信をしていきたいと思います。
情報発信を盛んにすることで、デンマークのように幼い頃から農業が身近な職業になると思います。

現在、農業や畜産業では 3K（きつい、汚い、危険）などのマイナスなイメージが強いです。マイナスなイメージをなくし、農業や畜産に対して「楽しそう、体験してみたい」と思えるようなプラスのイメージを少しずつ増やしていくことで、消費者が農業や畜産に関心を持つことができ、食への関心や命への関心がもっと深められると思います。
畜産先進国のように、アニマルウェルフェアを基準として畜産物を購入してもらうことは、今すぐには難しいかもしれませんが、オープンファームやイベントなどの取り組みを増やし、情報発信を強化することで、消費者に畜産物や産業動物へ関心を持ってもらい、それが次世代の畜産業につながっていく近道なのではないかと考えました。
私が考える次世代の畜産業とは、生産者と消費者がつながる畜産だと思います。畜産への関心を深め、生産者がどのように家畜を育て販売するか、消費者がどのような畜産物を買うか、どちらもこだわって行動することが大切だと思います。生産者と消費者のこだわりが一致し、畜産物を生産し、購入できることが生産者と消費者がつながる次世代の畜産業だと思います。

❻　私の夢、これからやりたいこと

将来の夢はまだ明確に決まっていませんが、動物にかかわる仕事に就きたいと考えています。
現在、私が所属している畜産班では、地域資源を活用した飼料開発を行い、新たな和牛ブランドを創出する活動をしています。地元企業との連携や地元農家との共同研究を通して、畜産業を支える人間になるには、「畜産農家として就農すること」だけではないと学びました。
これから私は今回の研修で学んだことや、日頃の学校生活で学んだことをもっと深く学ぶために大学に進学し、将来畜産業を支えられるような人間になるため、幅広い分野に興味を持ち勉強していきたいと思います。
残りの高校生活で、畜産業や和牛についてもっと学んでいきたいです。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今回の研修で、畜産業に熱い想いを持つ全国の高校生の皆さんと共に、デンマークの畜産業について学ぶことができ、貴重な時間となりました。これから個人で畜産アンバサダー活動をしますが、同じ想いを持つ仲間とともに将来の畜産業をつくっていけると思うと、とても心強いです。
楽しいことだったり、うまくいかなかったり、色々な経験をすることができますが、みんなで今回学んだ畜産業の魅力を多くの人に伝えていけるように、一緒に頑張りましょう！

畜産アンバサダー
宮城県加美農業高等学校
農業学科２年
早 坂 凌 雅

❶ テーマ
稼げる畜産 ― ライフスタイルと畜産経営

❷ キーワード
環境配慮

❸ キーワードのつながりと考察
「稼げる畜産」というテーマで、「環境配慮」について考えたとき、最初は単に環境に配慮しながら畜産を行えば稼げると、上辺だけの単純な考えを持っていました。
畜産における環境に関する点で、これまでに牛のゲップの温室効果ガスを減らすためには、海藻が良いということには興味がありましたが、それを経営的視点でさらに主体的にどのように行うかなどは、考えたことはありませんでした。環境に配慮した畜産のやり方や、どうやって収支につながるか、そこに関わる法律や国民の考えなど考えてはおらず、足元しか見えていませんでした。実際、日本とデンマークで違いがあるかなど考えたこともなく、経営規模が違うだけであるというような視野の狭かった自分を思い出します。
実際にデンマーク研修をしてみて、有機畜産を行うことは色々な問題があり、リスクが伴うと考えていました。しかし、自分の収入を国に納め、失業したときなどは保険でその一部を補償してくれる制度がデンマークにはありました。また、平均的に収入の４割から５割は所得税として国に納めますが、失業してしまった際には、最大収入の９割を補償してくれます。環境を大事にする良い行いをすることは難しいと考えますが、このようなバックアップがあれば思い切ってできるのではないかと感じました。
また、税金が高くても、その他の医療費や教育に向けた補償も含め、デンマークの国民は社会的な補償がしっかりされていて、不満に思ってはいませんでした。国民は気持ちよく税金を納め、国のために自他問わず環境を一番に考えた生業をすることができると思いました。
そのような国や国民の意識もあり、幸福への考え方も異なり、利益中心よりも、安心や安全への意識が高く、有機農業やアニマルウェルフェアの認知度や関心度は、日本と比べ圧倒的にデンマーク国民の方が考えていると思いました。それはデンマークの国自体が、有機農法という環境に配慮した農業を推進しようという者に対して、とても良い追い風になる思いました。
日本で有機農業により付加価値を付け、通常よりも高く販売しても、日本人は安い方を買ってしまいます。これでは農家の皆さんは収入が伴わないため有機農業が普及せず、規模拡大に向けた国の事業を頼りに集約された畜産を目指してしまうことになると考えます。これにより、日本とデンマークに畜産業の差がついたと考えます。今回の研修成果を学校行事などの時に全校生徒の前で、学んだことや、これから取り組まないと行けないことなどを発表します。そして、私が２年になってから取り組んでいる研究テーマは、自給飼料生産に関わるものです。有機畜産を行うためには、飼料自給率を上げることが大切です。現在、飼料の原料が高騰しています。今がその機会かもしれません。消費者の求める“しもふり肉”などの畜産物へ求めるものは、なかなか変わらないかもしれません。しかし、有機に向けた取り組みを私達が実践していくことこそが、その考えを変える始まりになると信じます。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと
私はこの研修で、日本とデンマークでは何が違うのかを学びたいと思い参加させてもらいました。私が研修を通じて学んだことが三つあります。
一つ目は、デンマークと日本では法律の種類と数が違うことです。日本にも法律がたくさんありますが、デンマークの法律は畜産業をしやすいように整備されていると思いました。例えば、失業したときの補償や、赤ちゃんが生まれた時に取る育児休暇、医療費が無料であることなどです。このようなことから、安心して生活できる基盤があり、国民の仕事が国民の幸せのために行うものとして、環境や健康に配慮した取り組みが良いとされる国になっていると考えました。
二つ目は、畜産農家の充実したライフスタイルです。日本では個々の家族で農業を営んでいることから、小規模では従業員を雇うほどの利益が得られません。大規模経営によって従業員を雇うことで、作業を分担したり頼ったりできます。作業をより効率化することで、自分自身や家族の時間が確保でき、プライベートや家族との団欒の時間の充実につながっているのだと分かりました。
三つ目は、商品の生産過程（有機農業やアニマルウェルフェア）に付加価値を付け、稼いでいることです。近年、世界では消費者が生産物の生産過程を気にする世の中になってきています。デンマークでは、有機畜産や家畜に良い飼い方を取り決めた「アニマルウェルフェア」について、国民の認知度が高いようでした。農産物の育成過程や生産地などを学んでいて、地球にやさしい有機農業で作ったかどうかなどを考え、少し高くても買ってくれます。日本でデンマークと同じように付加価値を付け、販売したとしても国民の皆さんは安い方を買ってしまいます。国民の考えの違いを変えていくのも、畜産業を志す私達だと考えます。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと
私は次世代に畜産を引き継ぐために、三つのことを広めていきたいと考えます。

一つ目は有機畜産やアニマルウェルフェアといった、環境に配慮した取り組みを広めたいと考えています。理由は、持続可能な農業を実現させたいと思ったからです。これを実現させるためには、農家の皆さんが有機畜産を実施したくなるような取り組みをする必要があると思います。例えば、デンマークのように有機畜産の取り組みに見合った付加価値を付けることなどです。ですが、日本で有機畜産に付加価値を付けて販売しても、国民は外国産の安いものを買ってしまいます。そのため、国民の意識を変えながら農家の皆さんも少しずつ有機畜産に取り組む必要があると思いました。
二つ目は、国民にもっと農業に興味を持ってもらうことです。今後、日本で農業を続けていくためには、若い担い手を増やす必要があると思ったからです。そのために私自身が畜産を営み、畜産の楽しさを広めたいと考えています。
三つ目は、農業の組織的な大規模化です。デンマークのように大規模経営ができなくても、農家同士が協力して農業を営むようになれば、同じ利益が得られるようになると考えたからです。例えば、大型機械のシェアやレンタル、牧草地や粗飼料畑の共同購入や共同の刈り取り調整、飼育段階での分業、授乳だけを行う農家や、繁殖種付けだけを行う農家、乾乳牛だけを行う農家などです。
以上、これらを達成することで、持続可能な農業として畜産を次の世代に受け渡すことができるようになると考えます。

❻ 私の夢、これからやりたいこと
まずは、今回学んだことを今の自分なりにできる方法で広めることです。宮城県加美農業高校にいながら、研究活動や小学生との交流を通して、より多くの人に畜産の素晴らしさを伝えることです。
そして将来は、大規模な放牧畜産を営んで、畜産アンバサダーとして、日本の畜産人口を増やす取り組みをしたいと考えています。放牧畜産をしたい理由は、省力的かつ低コストで生態系を維持でき、自然な環境で牛を育てる光景に憧れたからです。また、アニマルウェルフェアの視点を踏まえつつ、牛が運動することで足腰が強くなり、健康かつ、分娩事故などが少なくなります。耕作放棄地などで放牧を行えば、未使用な土地の有効活用や景観保全につながることを知ったからです。
そして、畜産を広める活動として観光スポットにし、牛を見たことのない人に自然にいる牛を見せ、牛の美しさを伝える取り組みをして、担い手を増やせると思ったからです。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私たちの代で畜産業が途切れないように、諸先輩方の考えをしっかりと受け継ぎ、自分たちよりも良い状態で次の世代に渡せるよう、多くの学びと経験が必要だと思います。
チャンスはあるので、ぜひ挑戦してください。
そして将来は、海外に依存しない畜産業をみんなで実践し、助け合いながら、持続可能な畜産業を目指していきましょう。
スーパーに国産の畜産食品がたくさん並ぶように、デンマークをも超える畜産業に取り組んでいきましょう。そのために私達がやらないといけないのは、広めること。
知らない人に広めて行きましょう。畜産と関わる楽しさを！

畜産アンバサダー
宮城県農業高等学校
農業科２年
林　　ら ん

❶ テーマ
稼げる畜産 ― ライフスタイルと畜産経営

❷ キーワード
福祉

❸ キーワードのつながりと考察
「稼げる畜産」というテーマで、「福祉」について考えたとき、最初はどんなつながりがあるのか全く分かりませんでした。稼ぐことと、動物の福祉がどのように結びついているのか、果たしてつながりはあるのかと疑問に思っていました。
実際にデンマーク研修を通して、人間の利益と動物の福祉とのバランスを考えて、愛玩動物や展示動物ではなく、家畜という経済動物と携わっているということを忘れてはいけないなと思いました。また、稼ぐにあたっては、伝統的な畜産経営ではなく、新たな畜産経営を行っていくべきということが分かりました。
日本の畜産は、消費者の畜産に対する知識や認知が他国と比べて低いということが分かりました。なので、実際に畜産に携わっている人たちが、日本の畜産業の現状を発信することが大切だと感じました。
こうすることで、まずは多くの人に日本の畜産を知ってもらうことができると思います。そこから、他国の良さや日本の改善点に向き合っていくべきだと思います。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと
デンマーク研修を通して考えたことは、経済動物の生き方についてです。
もちろん稼ぐためにはどうしたらよいのかも考えましたが、福祉という点から経済動物について考えることが多かったように思います。
私は養豚の妊娠ストールに興味があり、この研修に参加しました。はじめは妊娠ストールに対して、マイナスなイメージしかありませんでした。しかし、研修を通して、母豚にも好みがあり、一概に妊娠ストールが悪いとは言えないということを知りました。また、経済動物と携わっている以上、福祉への配慮にも限度があるということが分かりました。なぜ、その動物を飼育しているのかという根本の目的が、大切になるのだなと感じました。今回の学びをもとに３年生の課題研究で、妊娠ストールにおける母豚及び子豚への影響について調べたいと思っています。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと
私は畜産アンバサダーとして、畜産業のメリットを広めていきたいです。理由は、日本で今、畜産業へのイメージはあまり良くないと思うので、まずは畜産に対するイメージを変えていかなければならないと思います。イメージを良くしていくことで初めて、やってみたい・興味があるにつながると思います。
具体的な内容としては、重労働や休みがないといったマイナスなイメージに対して、多くの人や機械を用いることで一人にかかる負担が減り、仕事の効率化が見込めるといった改善策です。
日本の畜産業に対するイメージを変えることで、畜産に興味を持つ若者が増えて、担い手不足の解消につながると思います。また、多くの人が畜産業に携われば、その分国の関心や他国からの関心も高まります。こうすることで、国からのサポートも手厚くなるのではないかと思います。多くの人が畜産業に携われば、日本の畜産業が一体化して大規模経営も行えるのではないかと思います。イメージを良くし、認知度を上げることで、有機農業といった希少価値をつけて行う農業も普及していくのではないかと思います。
次世代の畜産業は、大規模経営が主流となり、ひとつの場所で大量の経済動物が飼育されるのではないかと思います。小規模経営がそれぞれの国にまばらにあるのではなく、一カ所にまとめられるのではないかと思います。こうすることでロボットが導入され、管理作業もほとんど人の手が必要なくなるのではないかと思います。一カ所にまとめることで、ロボットの導入にかかる費用も削減できると思います。管理作業を機械が行うことで、人件費の削減にもつながると考えます。

❻ 私の夢、これからやりたいこと
私は、将来の夢がまだ決まっていません。具体的にこれがやりたいということがありません。
しかし、ないからこそ選択肢は無限にあり、可能性も無限に広がっていると思います。これからの高校生活はもちろん、これからの人生においてたくさんのことに挑戦していきたいです。
その第一歩として、畜産アンバサダーの活動を一生懸命頑張っていきたいです。デンマーク研修に参加した私だからこそ伝えられることを、多くの人に伝えていきたいです。
畜産に少しでも興味がある人はもちろん、畜産を全く知らない人にも畜産業の現状と良さを伝えたいです。また、良さを伝えるだけでなく、課題やデメリットも同時に発信していきたいです。なぜなら、中途半端な気持ちで始めてほしくないからです。命と関わるので、中途半端な気持ちで始めては意味がないと思います。畜産に興味を持てるきっかけや、これからも頑張ろうと思ってもらえるような活動をしていきたいです。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産業を目指すみなさん、みなさんはどのような畜産業を行っていきたいと考えていますか？
それぞれが思う畜産業のかたちがあると思います。これがしたい・こうしたいという考えは、たくさんあると思います。自分はこれがしたいという意志はとても大切です。しかし、こうしたい、こうしたかったで終わってしまうのは一番もったいないです。自分の望むかたちにたどり着くために、どう行動していくかが最も大切だと思います。自分のなかでとどめることなく、多くの人に発信してください。
一緒に畜産業を盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
福島県立修明高等学校
生産流通科３年
小 林 椋 堅

❶ テーマ

若者のための畜産
― 私たちが創る日本の畜産の未来

❷ キーワード

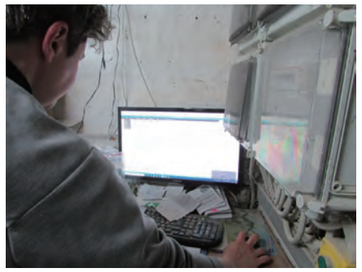
情報発信

❸ キーワードのつながりと考察

「若者のための畜産―私たちが創る日本の畜産の未来」というテーマで、「情報発信」について考えたとき、はじめは自分が未来の畜産アンバサダーとしてどのように情報を発信するか悩みました。また、デンマークの方々はどのようにして情報を発信しているのか、また若者が新規に就農したいと思う畜産業にするために、どのような工夫をしているのかを実際に学ぶことができる良い機会なので、この機会を生かしていきたいと考えていました。
デンマーク研修のはじめは、たくさんの方々と触れ合うことに緊張していましたが、キーワードについて考えながら取り組んでいく中で、様々な方法があることを知り、研修がとても楽しく有意義なものになりました。
情報発信については、そんなに難しいものではないと甘く考えていましたが、講義での説明や、チームのみんなと話し合っていく中で、改めて正しい情報をしっかりと発信することの難しさを考えさせられました。
私は研修前、SNS で発信すればとても早く、楽にみんなに情報を届けられると思っていましたが、自分のことを知ってもらうことが前提なので、そこに至るまでの過程や取り組みの努力が必要でとても難しく、大変なことであると痛感しました。この話をチームのメンバーと共有し、相談したり、講義を聞く中で考え直した結果、まずは地域の小さな母体から少しずつ知ってもらい、つながりを作っていくことがとても大切なのではないかと考えさせられました。
日本の畜産は、デンマークの畜産と大きな違いがありました。それは飼育している土地の規模です。デンマークの畜産業と同じ規模を日本の畜産に反映し、土地を広げることで日本の畜産業も飼育できる土地が多くなり、大きな利益につながると思いました。しかし、日本は森林面積が多く、平地を確保することが難しいため、デンマークのように工夫して、付加価値をつけ消費者に買いたいと思ってもらえるような畜産業を目指すのも一つであると考えました。どのような取り組みを行うにしても、生産者の力だけでなく、消費者、近隣住民などの協力体制が必要であるので、地域の人々に協力してもらい、地域ぐるみで畜産業を支える必要があるのではないかと考えます。その他にも地産地消の取り組み、残渣を餌として再利用し、フードロスを減らすなど取り組んでいけることはたくさんあると研修で学びました。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークの学生との交流を通して、同じような考えを持つ学生が世界にもたくさんいることを知り、とても刺激を受けました。また、デンマークの生徒はトラクターを子供のころから運転することや、たくさんの動物の飼育を体験していて、私自身もたくさんの経験を今後していきたいと思いました。
また、デンマークの農家の人々から、自分が知らない豚の病気に関する貴重な知識、日本の農家とは違う形態のストールの種類、放牧の重要性など、普段の授業では学ぶことのできない外国の畜産業の形態を学ぶことができました。
一番感銘を受けたのは、デンマークでは豚舎に 24 時間体制でいつでも消費者が見ることができるカメラが設置されていて、作業工程、給餌風景、分娩の風景など、消費者に安心安全なものを届けたいという農家の思いと、安心で安全な畜産物を食べたいという消費者の考えの両方の意見を汲み取ることができた画期的な取り組みだと感じました。
将来、私自身は黒毛和種の経営を行いたいと考えています。この研修で学んだ消費者を思う気持ちや姿勢は、学ぶものがたくさんあると感じました。



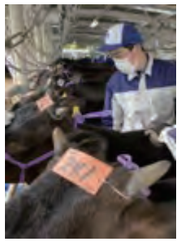
❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

小学生や、幼稚園生などに畜産業が楽しいことを伝えたいです。幼い頃から畜産の楽しさを知ることで、子供たちが将来畜産業に携わりたいと思い、畜産農家が増えるきっかけにつながると考えます。また、私自身高校生になるまで、畜産業とのかかわりがありませんでした。このように非農家の生徒でも、きっかけさえあれば畜産業に興味を持つ可能性があり、今は制度が整っているので、畜産業を一から始められる可能性も大いにあると考えるからです。
幼稚園や小学生の頃の楽しい思い出は、頭の中に残りやすいと考えます。そのため幼少期から畜産業の楽しさを経験することで、将来、畜産業に就きたいと考える若者が増え、日本の畜産業がますます発展していくと思います。それにより、次世代の畜産業の担い手が増加するきっかけになっていくのではないかと思います。また畜産業に取り組む若者が増えることで、牛の血統やより良い交配を見つけ出すことができる可能性が高まり、日本の畜産業の成長にも大きく寄与していくことができるのではないかと考えています。

現在よりもさらに機械化が進み、畜産業に対する危険、大変、汚いといったイメージは払拭されていくことを期待しています。
機械化が進むことで、常に現場にいなければいけなかった状態が改善され、従業員一人一人の生活も楽になり、牛の安全にもつながっていくのではないかと考えています。
また、機械化されていくことで、生産者は牛の調整や健康状態の把握などにより時間を回すことができるようになり、より質の良い和牛の生産を行えると考えています。
また機械化が進むことで、家畜ファーストな畜産業を行える環境が作られていくのではと考えます。衛生管理や餌の厳選、また家畜の管理などにおいて給餌のタイミングや除糞の頻度など、不快指数を読みとり、自動で行うことのできるシステムの構築なども近い将来出てくるのではと思います。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

私は、黒毛和種の一貫経営をしている農業法人から内定をいただきました。この農業法人で、牛の肥育や分娩、学校３年間では学習することができなかった知識の習得をしていきたいと考えています。また農業法人で働きながら、多頭飼いの経営方法などの勉強もすることで、将来は私自身で和牛の肥育、繁殖の一貫経営をしたいと考えております。また、消費者に寄り添い、安心で安全な牛肉を提供できるような農家になれるよう、卒業後も努力していきたいと思います。また、今回学習したことを生かして、たくさんの人と関わりながらたくさんのことに取り組んでいきたいと思います。



❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産はとても楽しく、奥が深いです。臭い、暑い、大変だからやりたくないという意見も多くあると思いますが、実際に体験すると、命の誕生の瞬間に立ち会うことができることや、自分で一から育てた牛が他人から評価される喜びなど、日常生活では味わうことができないことがたくさんあります。経験することで大変さが楽しさに代わると思うので、畜産をやったことがある人、やったことがない人でも一度は畜産に携わってほしいです。

畜産アンバサダー

栃木県立宇都宮白楊高等学校
農業経営科２年
酒　井　謙　心

❶　テーマ

稼げる畜産 ― ライフスタイルと畜産経営

❷　キーワード

餌

❸　キーワードのつながりと考察

「稼げる畜産」というテーマで、「餌」について考えました。
日本では濃厚飼料の多くを輸入に頼っているため、世界の情勢や円安の影響を大きく受けて、飼料の値段が高くなっています。そのため、現在の日本の畜産では、稼ぐ、より収入を増やす以前に、動物の頭数を減らして、経営を維持するほど利益を上げるのが難しい状況です。
このような状況になったのは、日本で以前から問題になっている自給率の低さです。今を乗り越えるとともに、長期的に見た自給率の低さの改善が必要だと考えて、デンマークでは飼料についてどのような対策を取っているのか、今とこれからについて知りたいと思いました。
実際に研修をしてみて、デンマークでは、飼料を輸入にそこまで頼ってはいませんでした。しかし、日本より少なくともウクライナとロシアの侵攻の問題により影響がありました。今その対策として、日本と同じように、以前より動物の頭数を減らして、経営を成り立たせていました。長期的な対策として、国で新しい飼料の開発をして、外国の輸入に頼らない工夫をしていました。
また、デンマークの畜産では、有機農業を行っている農家は、高く商品を売ることができるということも、影響が小さい理由だと思いました。
日本の畜産に、今回の研修成果を反映するのは難しいと思います。デンマークではそもそもの飼料の自給率が高く、商品も有機で生産したものは通常の二倍ほどに高く販売しています。その理由は、デンマークの平地が大きく、一つの農家当たりの土地が多く、大規模な営農ができていたからです。有機の商品もデンマークの人々が、有機農業にとても関心を持っていて、品質というよりも生産工程がどのようなものか重視していました。そのため高くても有機の商品を買う人が多く、経営を安定させることができたのではないでしょうか。
日本の飼料の問題を解決するには、日本で飼料を生産する農家を増やしたり、放牧して飼料にかけるお金を節約したりすることが必要だと思います。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

今回の研修を通して、デンマークと日本の違いで一番印象に残っているのは、消費者のニーズについてです。研修をする前は、デンマークも日本と同じく品質と値段が重視されていると思い、自分も品質と値段を重視していましたが、研修後にデンマークでは有機やアニマルウェルフェアなど、生産する過程がどのようなものかを重視していることに驚きました。また、デンマークでは有機の商品を高く売っていること、その商品を消費者が買うことで、農家も有機農業を進めたくなるというデンマークの人々のニーズが有機栽培を進めるサイクルにつながり、そしてそれは地球規模で進む温暖化問題の解決の糸口になるとても素晴らしい活動だと思います。日本では、生産過程に興味を持っている人が少ないのでこのことが新鮮で面白いと思いました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

これから畜産アンバサダーとして日本に広めたいことは、企業大規模化、ロボット機械化です。これらは、効率化、生産性を高めるとともに農業従事者の負担軽減、動物のストレスを軽減することができます。具体的には、企業大規模化によって、自分が休みたいときに他の人に代わってもらったり、プライベートと仕事のメリハリをつけてモチベーションを上げたりすることができると思います。
ロボット機械化では、例えばロボット搾乳機があります。無人で時間を問わず、牛が自由に搾乳できるので、ストレスなく生産を上げることができます。次世代の畜産業は、動物にも人にもメリットがあるものだと思います。これを広めることで、今までの畜産に対する「作業が大変」「自由な時間が少ない」などの悪い印象を払拭できると思います。これにより畜産をする若者が増え、より畜産業を盛り上げることができると思います。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、まだ明確に決まっていません。
しかしこれからやりたいことは、日本で有機農業を進めることです。デンマークでの有機農業はデンマークの人々の独自のニーズによるもので、商品の品質と値段を重視する人が多い日本ではできないと思います。しかし、地球温暖化対策のため進めなければいけないと思います。私はこれから、有機農業、マーケティング、日本の畜産についてさらに深く知り、日本の畜産をさらに素晴らしいものにして世界に求められるものにしたいです。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産はとても夢のある産業です。好きな動物達と触れ合いながら、たくさんの愛を注いで成長していく姿を見るのは、とてもうれしくやりがいのあることだと思います。しかし、畜産はそんな動物たちの命の重さも教えてくれます。畜産を学ぶことで、これまで以上に食品に感謝の気持ちを持つことができると思います。日本の高齢化が進む中、畜産を目指す私たちの担う役割は、とても大きく重要なものがあります。
今こそ私たちの若い力で、一緒に畜産を盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
栃木県立鹿沼南高等学校
食料生産科２年
前 田 夏 海

❶ テーマ

若者のための畜産
― 私たちが創る日本の畜産の未来

❷ キーワード

効率を上げるための機械

❸ キーワードのつながりと考察

「若者のための畜産－私たちが創る日本の未来」というテーマで、「効率を上げるための機械」について考えたとき、畜産業は、労働時間が長く、家畜の知識や管理技術等の経験が問われる職業だと考えていた。そのため、新規就農する若者が増加することは難しいと思っていた。特に労働時間は、職業を選択する際に大きく影響すると思う。また、家畜の臭いや家庭との両立をするため、作業効率を良くするための機械の導入が必要だと思う。機械を導入することで、短時間に作業ができ、長時間労働が解消される。その結果､家畜の健康状態が観察でき、他の作業への時間を持つことができるため、生産性を向上させると考えた。
また、家畜の知識や管理技術においては、家畜を飼育するための基礎基本や給餌内容、家畜の成長、病気等をデータ化することで対応できると思う。効率を上げるための機械と、データ化するための機器の活用があれば、若者が畜産業を職業として選択すると思った。
デンマーク研修に参加すると、食料生産の向上だけを考えた管理だけではなく、家畜にストレスを与えない管理をするための、「アニマルウェルフェア」を取り入れた飼養管理をしていることが理解できた。また、機械導入は、管理者の労働力軽減もあるが、作業を効率的に行うことで、家畜の健康管理や衛生面を管理する時間が増加することもできることが理解できた。そして、福祉制度を利用し、産後休暇や子育て休暇を取得することで、家庭との両立もできることが理解できた。機械導入は、管理者である人間と家畜の両方に必要なことだと思った。
今回の研修を通して、家畜に関わる仕事は、大変なこともあるが楽しくやり甲斐もあり、地域に貢献できる職業だと思えた。誰もが目の前にある肉は、豚肉、牛肉等と判断することができる。しかし、その肉を生産するための管理を理解している人は少ないと思った。だからこそ、生産過程を紹介することで、家畜の命をいただいていることや、生まれながらに役割を持った動物の使命を理解してもらうためのポスターを作成したいと考えた。特に、小さな子どもには、お肉ができるまでの管理が分かりやすい絵本も作りたい。対象年齢に合わせた資料づくりが必要であると思う。食農教育の一つとして、畜産の楽しさを伝えられたらいいと思う。私は、畜産部に所属しているので、日本の畜産の良さも伝えていきたい。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

日本とデンマークでは、食料生産における家畜に対する考え方が違うことが理解できた。特に、日本の食料生産では、家畜を狭い牛床で管理するため、家畜自身の自由を奪っている。その理由は、運動を制限し、無理に太らせ脂肪交雑をよくするためである。生産者は、消費者が求める肉質を生産することで、収入を得ることができるため、生産者として必要なことだと思う。しかし、家畜は不自由な管理の中でも健康であり続けることを求められ、立場により矛盾が生じるとも感じた。
デンマークでは、生産向上を求めるだけでなく、「アニマルウェルフェア」を意識した家畜の飼養管理が印象的であった。また、日本のように性別で職業を選択するのではなく、自分自身が身に付けた知識や経験を生かした職業選択ができることに驚いた。性別によるライフスタイルが決定されているのではなく、互いに協力し、仕事と家庭を両立するための福祉制度が充実していることも理解できた。これからの日本は、加速的に少子高齢化の時代がくる。そのためにも、デンマークのような福祉制度が日本にもあることを紹介し、ライフサイクルに合わせ福祉制度を利用することで、女性も畜産業に今まで以上に参入できることを紹介することが、職業の自由選択につながると考える。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

畜産業を経営するには、家畜の知識や経験だけでなく、多額の費用が掛かると考えてきた。しかし、制度を利用することで、機械の導入や飼養管理工程のデータ化等をすることで新規参入が可能となり、若い力が参入しやすい職業であることも理解できた。そのため、家畜の飼養管理を紹介することや家畜のことを考えたアニマルウェルフェアを取り入れた食料生産をすることで、人や家畜に優しい畜産業を広めたいと思う。
現在の畜産に対する印象は、労働時間が長い、汚い、儲からないと良いものではない。しかし、「お肉ができるまで」をテーマに就職を考える世代の若者や、動物に興味関心のある子どもたちに家畜のことを説明し、畜産業が楽しいことややりがいのある職業であり、家庭との両立ができる職業であると認識してもらえれば、畜産を選択する若者が増えると思う。
そうなれば若者の新規参入が増加し、就農構成年齢が若くなると思う。また、各種の制度利用をすることで、機械化や飼養管理のデータ化など、AI を活用したスマート農業の取り入れもあり、データに頼る飼養管理が主流になると考える。そのため、畜産は労働時間が短く、畜舎が衛生的で儲かる職業となり、男女間での職業の選択が変わると思う。

また、アニマルウェルフェアを取り入れた管理が主流となることで、畜舎ではなく、自然の山林を利用した管理も増加すると思う。日本は、国土の７割が森林のため、森林の再生は、林業の活性化も可能となるため、畜産は社会に貢献する職業であるという印象も強くなると思う。現在、実施している畜産業の形態が変わることで、生産される肉質が異なるため、消費者への生産物における情報提供がより重要不可欠になるとも考える。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、動物に関わる仕事をすることです。
今回の研修を通して、アニマルウェルフェアを取り入れた家畜の管理を学ぶことで、多くのことを考えることができました。今までの私は、家畜を管理する人間の考え方を中心にしてばかりいました。狭い牛床で家畜を群飼いし、家畜の自由を奪う管理をすることは、消費者が求める肉を生産することだと考えていました。しかし、この飼養管理では、家畜のストレスを増加させていたのです。私たちの食料になる家畜たちに対して、家畜が過ごしやすい環境を整えることは、管理をする人間の働き方にも影響することが理解できました。
私たちの人生に、動物は食料として、パートナーとして、必要となる動物と理解したからこそ、動物の生理生態を理解し、人間の人生を豊かにする動物に関わる仕事を調査することで、動物が人間に与える喜びを伝えることのできる職業を選択したいと思いました。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産の印象は、労働時間が長い、汚い、儲からないと悪いイメージばかりです。
しかし、各国の畜産業を学ぶことで、家畜が人間に与えることや家畜を管理することで、必要な制度を知ることができ、畜産が私たちに与えるものが何かと考えることができました。また、プロジェクトを通じて同じ目標を持つ仲間と出会い、畜産に関して話をしたことはとても楽しい時間でした。この時間を得たからこそ、自分自身の将来を真剣に考えることもできました。この研修は、自分を成長させることができ、学習したことを生かして地域貢献もできると思います。
参加を悩んでいる人がいたら、迷わず参加してください。必ず、自分自身を成長させることができると思います。

畜産アンバサダー

栃木県立栃木農業高等学校
動物科学科３年
竹　澤　愛　笑

❶　テーマ

若者のための畜産
― 私たちが創る日本の畜産の未来

❷　キーワード

農業に対しての意識

❸　キーワードのつながりと考察

私は、若者のための畜産というテーマで、農業教育について考えました。
野菜や肉を食べているのに、日本では農業や畜産に対して関心を持っている人が少ないどころか、悪いイメージを持っている人が多い現状です。「これは自らが知りたい。勉強したい」と思わなければ、農業や畜産を知る機会がなかなかないからだと考えました。しかし、デンマークは、農業先進国・養豚大国といわれているため、日本より教育制度がしっかりとしており、関心を持っている人が多いのではないかとイメージしていました。また、消費者が畜産に興味を持ち、自ら畜産を学んでいるのかもしれないと考えていました。
実際にデンマーク研修をしてみると、私たちと同じ年齢の高校生たちが朝早くから手伝いをし、自分の家の牧場や畑、機械についていきいきと説明をしてくれました。そして「農業が好きだから、将来は家の農家を継ぐ」と言っていました。まだ決まってない人も、農業関係の仕事には就きたいと話していて、同じ農業と畜産を学んでいる自分たちとは、意識の違いを感じました。
デンマークには、幼少期から農業や畜産に興味を持ってもらうための取り組みや、就農するまでのシステムが確立され義務化されている、サンドイッチ教育と呼ばれるものがありました。このシステムを行うことで、しっかりとした農業者の育成をすることができます。これにより、同じ農業高校生でも意識の違いが出てくるのだと感じました。
今後、若者のための畜産をつくっていくためには、やはり幼少期に家畜動物とのふれあいや体験が必要であり、農家になるまでのしっかりとした教育システムを確立させることが重要だと考えました。
今回の研修結果を日本に反映していくためには、土台となるものが必要であると考えます。日本はデンマークとは違い、機械や

ロボットを導入するだけのお金も土地もない。そして家畜にも環境にもいい有機を理解している人が少ない。そもそも畜産に関心のない人が多いため、高価格の肉を買う消費者はごく一部であり、日本に取り入れたいと思っていてもそう簡単にはいきません。デンマークのように畜産業を盛んにしていくには、今の日本の現状からでは理想に過ぎない状況です。
まず私たちが発信することで、海外の畜産業について知ってもらいたいです。そして時間はかかると思いますが、従来とは違った考え方で、少しずつ問題を解決していきたいです。これからの未来を支える私たち若者が、日本の畜産をつくっていきたいと考えています。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークでは、農家さんと消費者が同じ目線で農業について認識しており、環境にも畜産にもいい有機が発展していました。これを消費者が理解することで、農家は経営を続けることができていますが、日本では理解している消費者は少なく、高い値段のものを買う人はごく一部にすぎません。
また、デンマークの農家さんの話を聞いていく中で、みんなが家畜のことを第一に考え、楽しみながら経営していることに気が付きました。オープンファームを経営している方は、「誰もやったことがないことを始めたい」と言っていました。前例がなく成功するかも分からないという不安があるなかで、若者が挑戦できる環境があるデンマークは羨ましいと感じました。それと同時に、日本で新たなことに挑戦したいと思っていても問題点が多くあるため、躊躇してしまい行動することが難しいと感じました。
デンマークにある農家さんの、好きだから何かを始めたいという挑戦する気持ちや実行力は、何を始める前にも大切なことだと思います。このような人が増えれば、今までよりもいろいろな視点からの農家ができ、より一層盛り上がっていくと思います。研修を通して畜産業を盛り上げていくには、農家と消費者が一体となることが必要であると考えました。また、実際に畜産業を営む農家さんが、努力しながらも楽しんで畜産業を営むということが一番だと考えました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、アニマルウェルフェアとバイオマスを日本に広めていきたいです。
日本ではアニマルウェルフェアを知らない人が多いため、取り入れても農家の経営が苦しくなるだけだというのが現状です。しかし、アニマルウェルフェアを取り入れることにより、家畜にとって自然と同じような環境をつくることができます。そして家畜がストレスを感じることが少なく、高品質の肉を生産することができるため、生産価値が上がります。一方で、生存率は従来よりも低いという結果が出ていますが、デンマークの人は、生きるも死ぬも自然であるという考え方を持っています。デンマークでは法律や制度を設けているため、アニマルウェルフェアの取り組みは当たり前となっていました。
また、バイオマスは畜産をやっていれば必ず排出される、糞尿の問題を発電に利用できるものです。牛のゲップからでるメタンによる温室効果ガスが問題視されていますが、バイオマス発電により、倍以上に温室効果ガスを削減することができます。従来では、家畜排泄物を畑に散布し、栄養素を与えるという使用目的がありましたが、近年ではバイオガス発電所で、糞尿の 95％を消費することができ窒素の再利用ができます。日本でもバイオマスを取り入れるための取り組みがなされていますが、普及するのが難しい現状にあります。これらは会社がやってくれるため、農家の負担になることもなく、臭いといわれる問題も解消できます。バイオマスは環境への負担が少なく、環境配慮型・循環型として、持続可能なものをつくっていくためには欠かせない取り組みです。

これらを日本に取り入れることにより、家畜や環境、人間にもいい畜産になります。そして、悪いイメージを少しでも軽減することができ、このような取り組みによって畜産に興味を持ってくれる人が増えるのではないかと考えます。
私が考える次世代の畜産業は、消費者･農家･会社などが協力して、従来とは違い環境にも家畜にもいい取組みをたくさん取り入れ、進化させていくことです。この様々な取り組みから、人々に興味を持ってもらうことで、みんなで創り出していく畜産業になればいいなと思っています。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、農業教員になることです。
教員として専門的な知識を教えるだけでなく、日本ではあまり普及していないような新たな畜産を高校生のうちから教えたいです。これにより、社会で問題になっていることを理解し、改善していくための取り組みなど、自ら考える力をつけてほしいです。
今回の研修がなければ、海外の畜産を学び、これからの日本の畜産業に必要な取り組みを知ることができなかったので、研修に参加をしていなくても、海外の畜産について学べる機会を授業の中でつくれたらいいなと思っています。

そして、自分が学んだことや経験したことを次の世代につないでいき、畜産業を仕事とする人を増やしていくことで担い手不足の解消につなげたいと考えています。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

日本の畜産は改善することがたくさんあり、言うならば真っ白な状態です。これを私たちの意識や考え方次第で、どんな色にも変えることができます。「日本の畜産業はこうあるべきだ」と言うよりは、「自分がこうしていきたい」という意見をみんなが持つことで、より良い畜産をつくりあげていけると考えます。
畜産業をやりたいと思っているのならば、自分はどのような環境で働きたいのかを考えてみると、自然と自分の描く畜産業が見えてきます。その理想に向かって、みんなで日本の畜産業をより良いものにしていきましょう。

畜産アンバサダー

群馬県立勢多農林高等学校
動物科学科３年
平　井　　綾

❶　テーマ

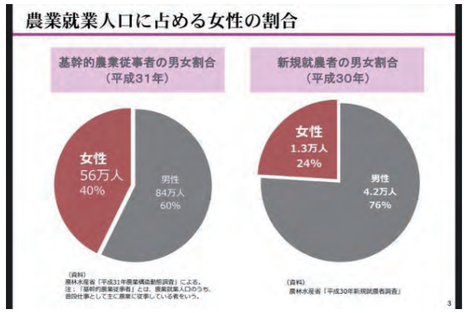
ジェンダーフリーな畜産
― 男女共生の畜産社会を目指して

❷　キーワード

男女のニーズ

❸　キーワードのつながりと考察

最初は、ジェンダーフリーな畜産に対して、日本では自分の経験上、女性が就農する際は危ないからという理由で却下されていたのもあって、日本では女性の就農者の低さが顕著であると思っていました。また、男性女性それぞれの制度等の考えには個人だけでは及ばず、ただ意識の差という曖昧なものしか浮かんでいませんでした。
前回のプロジェクトの研修報告を視聴したこともあり、デンマークでは制度が整っていたり、女性の就農者が多いということだけは記憶されていたので、「デンマークってすごい素敵だな」という浅い感想だけでした。学習する前は、そもそもジェンダーフリーってどこからが良いのかということすらあまり理解できておらず、ただ男女が働ければそれでいいのかなと考えていました。
デンマーク研修をしてみて、今回のプロジェクトのメンターが女性のお二人だったので、日本の就農者の中には女性が少ないというわけではなく、今では逆に女性就農者が増えているのではないかという仮説が立ちました。そう考えていく中で、意識以外にも、働きやすさの観点での解決していく問題があるのだと学習の中で感じました。夏の本研修では、デンマークでのジェンダーフリーへの取り組みとして、男女の尊重、働きやすい環境づくり、制度の改善についてがあげられました。



研修前に考えていた、ただ男女が働ければいいというわけではなく、適切な環境且つ周囲の協力もあることが、本当のジェンダーフリーなのかなと考えを改め、深めることができました。

日本の畜産は、とにかく代わりがいないという状況のところも多くあると思います。なので、ジェンダーフリーを進めていくためにも、働きやすい環境づくりが第一だと考えました。デンマークでは、機械の導入や育休制度の精度の高さももちろんですが、それよりも日本に足りないものは、助け合い、尊重する精神だと思います。そのためにも、まず一般の方々に農業について知ってもらう必要があるのではないかと考えました。
また、食に対する意識を高めることも重要だと考えたので、観光牧場をより活発化することが客観的にあげられます。自身のできることとしては、畜産アンバサダー活動として今後を担っていく若者に対して、農業の楽しさを伝えたいです。農業は女には難しいや、ちまちました作業がかっこ悪いとかではなく、すごい格好いい仕事なんだと支える人材を増やすことに反映させたいと考えてます。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

まずテーマであるジェンダーフリーについては、日本に比べデンマークでは、育休の制度が整っていることが一番印象的でした。日本でも育休制度はありますが、先ほどもあげた通り、代わりの少ない状況で、男女ともに育休の取りづらい状況であるのに比べ、デンマークでは育休を取ることが男女ともに義務付けられていることが印象的でした。女性の政治家の多いデンマークですが、なぜ日本とそれほどの差が出てしまうのか、少し疑問に思いました。
次に今後の日本の農業の問題である担い手不足について、デンマークでは、バイソンファームのように観光牧場が盛んで（人気のある観光牧場が多い）、そこへの宿泊客も多くいることを知りました。また、飼育する中でのストーリーがお客様の関心を引き、商品の販売（6 次産業）にもつながっているそうです。なので、一般の方の農業への興味関心が高いのだと感じました。
日本にも観光牧場はありますが、「今この牧場が熱い！！」等あまりスポットライトの当たるような場所ではないように感じます。デンマークでは、農業のテレビ取材等もあることを研修の中から感じましたが、日本で農業を取り上げる際は大抵、問題点の提示であるので、メディアで楽しい農業を多く取り上げていけたら影響するのではないかと考えました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

まず、畜産を知らない人に、畜産ってこんなにも面白いんだよ！というのを伝えたいです。
今回デンマークと日本を比べて、国によって全く違う経営もあることを知って、自身もやっぱり畜産って面白いと思えたので、それを周りにも知ってもらいたいと思いました。
畜産の面白さ（魅力）を知ってもらうことで、一般の方の畜産への関心が高まると思うので、そうなったら日本の畜産業は、活発化また発展していくと思います。
例えば、デンマークのようにストーリーを知れば、その畜産物への興味がわくので消費量が増えますし、そうすると大規模化が進んで、新たな雇用創出にもつながると考えます。また、次世代を担う者も、興味次第で増えていくと私は考えています。そうすれば、次世代の新たな畜産のかたちを作り出すことも可能なのではないかと思いました。
次世代の畜産業は、今のままの状況が続けば、担い手不足や高齢の農業従事者の離農、飼料価格の高騰による経営困難な状況に陥ることは避けられません。そうなってしまえば、日本は食料自給率の低下が進み、より輸入品に頼っていかなければならなくなってしまいます。それらを避けるためにも次世代の農業は、大規模化により一戸あたりの生産量の増加や機械化による省力化、農業に対してグローバルな人材の育成を進めていくべきであると考えます。デンマークのように、放牧を進んで取り入れていけるような広大な土地は日本にはありませんが、舎飼いであれば動物にとって生活のしやすい、また人にとって作業のしやすい構造にすることは不可能ではないと考えています。なので、次世代の農業はグローバルな人材の多い環境、機械とともに作業をする環境、動物にとって不自由ない環境が求められると思います。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私の将来の夢は、農業科の教員になることです。
私たち畜産アンバサダーのように、農業に興味を持ち、考えを深める次世代の芽を潰すことのないよう指導に努めたいと考えています。そのためにも今後、アンバサダー活動として中学生向けに農業の面白さをテーマとしたプレゼンテーションに取り組みます。そこでの経験を踏まえ、反省や改善点を見つけ、相手の心を打てるようなプレゼンテーション能力を身に着けたいと考えています。
私が今知っていることは、日本の農業のほんの一部に過ぎません。日本の農業の良さも悪さも、まだまだ私の知らないことだらけです。なので、今後教員になる夢を追いながら農業への知識を深め、自身の考える農業のあり方について確立していきたいなと思います。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業を知識も経験もないところから始めることは、確かに難しいことで不安もあると思いますが、やってみたら分かる面白さは計り知れないものだと私は思っています。
それに、今農業をやっている人みんな、初めは何にも分からない初心者です。
なので、知識や経験の差を恐れずに、興味の赴くまま、ぜひ畜産に触れてみてください。きっと動物たちは私たちの知らないことを言葉ではなく経験でたくさん教えてくれます。
私たちで未来の畜産業を盛り上げていきましょう！！

畜産アンバサダー

筑波大学附属坂戸高等学校
総合学科２年
金　澤　亜　依

❶　テーマ

持続可能な畜産
― 人と家畜のパートナーシップ

❷　キーワード

ストレス

❸　キーワードのつながりと考察

「持続可能な畜産」というテーマで、「ストレス」について考えたとき、最初は農家側がアニマルウェルフェアと生産性の両立を実現して持続的に行うために、なにか対策を練ってゆくべきだと考えていた。理由は、持続可能性を取るならば、現在注目されているアニマルウェルフェアを写真１のようにストレスをかけないことを家畜へ徹底的に行い、その上生産性を上げたら畜産に対するイメージが緩和されて、貢献者が増加するのではないかと考えていたからだ。また、持続可能性は、環境への配慮や家畜動物への配慮などがすぐに浮かんできて、環境を守れば継続して土地利用ができ、さらには大規模化ができ、家畜動物への配慮を行えば、消費者が高いお金を払ってでも買ってくれる機会が増えて、今よりもアニマルウェルフェアの考え方が広まってゆくと考えていたので、農家さん達への支援やアプローチをすることで、何らかのサイクルが形成されて持続可能な畜産になるのではないかと思っていた。

デンマーク研修を通して、実際、農家さんは今できることは最大限行っていることが分かった。

写真１：デンマークでの放牧養豚の様子（本研修の ZOOM にて）

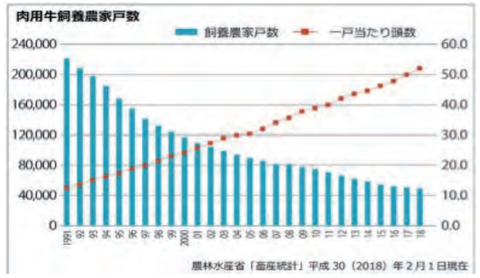
そこで私が注目したのが、商品を買う側の消費者だった。私も消費者の一人だが、今回のデンマークでの講義やインタビューを聞いていなかったとしたら、農家さんの努力には気が付けなかったと思う。つまりは私を含め、消費者が現状を理解しきれていないことから、持続可能性が現在うまく実現できていないのではないかと研修中に感じた。理由は、農家さんが一方的に努力をしていても、知ってもらえなければそれは非効率的になってしまって、理解してもらっているとは言えない。しかし消費者側が、一方的に方針を主張したところで、農家さんに実現できることとできないことが存在するため、消費者と農家さんの中で矛盾が生まれ始めてしまうと考えたからだ。
そのためまずは、消費者側が理解をしようとする努力を極める必要性があるという考えにいたった。
日本の畜産では、現在の中学生、高校生が中心となって海外の畜産業を学び、それを拡散してゆくべきだと思った。現代の中高生は、外国の文化や言語に興味がある人が多い。しかし、いきなり外国の畜産を知るとなると、日本の畜産の悪いところを無意識に考えようとするバイアスがかかってしまう。
そこで海外の畜産業をこの夏のデンマーク研修のように学んだあとに、日本との相違点を探すのではなく、日本の良いところと日本の畜産の可能性について話してみることで、学生の畜産への興味関心と理解を深めることができる。そして若い世代の学生が、畜産への理解を深めると、それに伴って大人も自然と若者の流れに沿って畜産を知るようになると考える。具体的には、子供から知識を提供してもらうや、学生主催の畜産関連のイベントに参加をするなどがあげられる。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

今回デンマーク研修を通して考えたことは、日本が目指すべき畜産とは何なのかについてだ。
私が思う理想の畜産や、デンマークで率先して行われている畜産業を考えたり見たりしたが、必ずしもすべてが日本のこれからの畜産でできるわけではないと考えているため、外国の畜産の現状を踏まえて日本が目指すべき畜産はどのようなものなのかを考えた。
法律や条例を出して規則に沿って畜産業を行ってもらうよりかは、農家さん自身が率先して畜産の現状を改善できるように、地域のコミュニティーを利用して、少しずつそれぞれが思う畜産のあるべき姿を作れるようにすることが、日本の目指すべき姿だと考えた。日本人独特の謙虚さと礼儀正しさは、家畜動物にも応用が可能と考え、さらにコミュニティーを形成することで、将来の担い手不足解消にもつながり、私の思う畜産業に近づけるといった一連のサイクルが完成することによって、畜産を知らない人の意見や国の法律や条約から人間にもストレスを与えないようにすることが大事であり、これができるようになれば農家さんが農家の価値を今よりも広めやすくなると考えた。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

日本で広めてゆきたいことは、外国で今、家畜動物に対して行われている対策の紹介と、農家さんが行っている具体的な飼育方法・出荷方法やその他の工夫、現在の日本の畜産業の長所だ。理由は、研修を通して改めて日本が遅れていること、外国の考え方は新しくて行っていることも理にかなっていることがよく分かった。
しかし、日本は畜産業のすべてにおいて欠けているわけではなく、もちろん継続したほうが良いこともあった。そのため外国の魅力的な政策を伝えつつ、日本の畜産業の長所を広めることで、新しい組み合わせの畜産ができたり、私のテーマである持続可能性な畜産の実現につながると考えたからだ。
これができるようになると、消費者の理解が促進して「畜産」を知ってもらえるような機会が増えるようになると考える。これは、現在、観光で使用されるよう牧場などの「畜産」の現場に出向いてもうことで、畜産業を営んでいる農家さん達の活性化と、消費者と生産者のコミュニティーの生成にもつながる。
次世代の畜産業は、畜産物を「安さ」ではなく「魅力」で売れるようになるのが理想だと考える。現在は、あくまで畜産業が発展している最中であって、現在がベストではない。「安さ」ではなく「魅力」で畜産物を消費者が買うようになれば、畜産業は活性化とともに教育の面でも変化をもたらすと考える。
また、「誰かのため」を考えて畜産業を営むことができるようなればと思う。理由は、消費者の手に渡ることを考えると、畜産動物を雑に扱うことはできないし、少子高齢化により、日本でグラフ１のように年々畜産業の大規模化が進んでいる中で、「誰か」に届くことを忘れないで営んでいくことで、根本的な考え方は捨てずに新規性のある畜産業が完成すると思う。



グラフ１：肉用牛飼養農家戸数（農林水産省）

❻　私の夢、これからやりたいこと

私の夢は農業科または理科の教師になって、畜産の情報を広める立場で畜産に関わっていきたいと思う。
このプロジェクトに参加するまでと参加している中で、数名の人から影響を受け、私は情報を提供して、自分が興味ある畜産を広めていき、私の他に畜産に興味を持てる人を育成したいとこのプロジェクトを行っている中で考えるようになった。
また、私が中心となって畜産に興味を持ってくれる人が増えると、とてもうれしいと思えると思う。家畜動物は、いろいろな角度から視点から、つながりが見えてくるものだと研修を通して感じたため、大学に進学した際に外国に畜産関連の留学をこれからしたい。実際に行って自分の目で見てみることで、新しく見えること・得ることはあると思い、さらにそこから自分がしたいことを見つけたいと思う。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業は複雑なサイクルでできていて、色々な人や環境が関わることで成り立つ産業だと私は研修を通して感じたので、これから畜産業に関わっていくみんなが畜産に貢献することは、いろいろなカテゴリーからできるのではないかと思います。
これからの時代、バイアスに縛られずに自分なりの視点を持って畜産を考えてみると、新しく発見があったり、その先に新しい考え方が生まれると思うので、人の話を聞いて納得することも大事だけど、自分なりの「畜産」とは何かを考えてみてほしいです。

畜産アンバサダー
東京都立園芸高等学校
動物科２年
志 村 真 桜

❶ テーマ
持続可能な畜産
― 人と家畜のパートナーシップ

❷ キーワード
循環型畜産

❸ キーワードのつながりと考察
私は「持続可能な畜産」というテーマで､「循環型畜産」をキーワードに考えました。
私の学校では、飼育しているエキゾチックアニマル等の動物の糞尿をコンポストに集め、籾殻を加えて撹拌し、畑の堆肥として再利用しています。また、自然環境を専攻して学んでいる上で、畜産業から排出される糞尿やメタンガスなどの温室効果ガスが、自然や地球にダメージを負わせる要因の一つであると感じました。このことから、環境先進国であり畜産業が盛んなデンマークでは、大量に排出される家畜の糞尿をどのように再利用し、近年問題視されている畜産業から生じる環境問題にどのように対応しているのか調べてみたいと思い、この研修に参加しました。
実際に研修に参加してみて、デンマークでは糞尿を堆肥化するだけではなく、糞尿を利用したバイオマスプラントから電気を生産し、国内電力の 25 ～ 30% を賄っていました。これほどの進んだバイオマスの利用ができているのは、社会全体が環境に優しい畜産を求め、選んでいるからだと感じました。しかし、関心が高いからこそ厳しい制限があり、農家への負担が大きいところがありました。しかしその反面、それらを達成するために、制度や補助が豊富であることが、広く普及させることができている大きな要因であると考えました。

日本でも、小規模ですがバイマスプラントが取り入れられ始めており、農家の方々も環境や家畜に配慮した生産に力を入れています。しかし、社会や消費者の関心・認知度が低いために、コストと収入が比例せず安定して経営をすることが難しいというのが現状です。
日本で農業は、人々の生活に一番近いにも関わらず、人々の関心から一番遠い存在だと感じました。消費者に農業の必要性をアピールすることが、これから日本の農業・畜産が続いていくために重要だと私は思います。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと
私は、日本の畜産についてもっと学ばなければならないと思いました。
研修の中で、他の参加者よりも理解が追いつかない場面や、学びの発展が不足していると思う場面がありました。それは畜産への知識が浅く、日本とデンマークの畜産を比較ができていなかったことにあります。畜産の授業が少ないため、資格や家畜審査の勉強、コロナが落ち着けば、実際に畜産農家さんへインターンシップをして理解をより深めたいです。
また、デンマークの農業青年との交流では、英語が第一言語ではないにもかかわらず英語力が高く、母国語のようにスラスラと話していたことや、自分の将来の夢が明確で、既にスキル・知識が豊富だということに良い刺激を受け、自分の将来に対するモチベーションが高まりました。

自分のテーマの他に、「機械化」の話がとても印象的でした。例として、酪農の面で一頭が排出する CO_2 の算出機器や、糞尿を集める機械があります。世界の温室効果ガスの総排泄量のうち、畜産業は約 14% を占め、その中の約 65% は牛から排出されています。CO_2 排出量の少ない牛を残し、繁殖していくことでもとから排出を抑えていました。また、糞を集める機械など、重労働であった仕事を機械へ移行することで、他の業務や自身の子育てや生活に余裕を持つことができ、女性でも働きやすい環境を作ることができていて、とても素晴らしいと思いました。
デンマークと日本で一番違うことは、地理的条件です。デンマークの農地が平地なのに対して、日本は中山間地です。そして気候も異なるため、デンマークではトウモロコシなどの家畜飼料を自国でほとんどを賄えますが、日本は飼料作物を栽培するのに適してはいません。デンマークには、日本の畜産技術を高める素晴らしい機器やノウハウがありますが、そのまま日本に取り入れるのは困難であり、日本の畜産とは言えないと思います。そのため、今の日本の畜産で足りない部分へ、日本に適したかたちにデンマークの技術を応用して取り入れることで、より可能性や魅力がある畜産へと発展していくと思います。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと
私が畜産アンバサダーとして広めたいことは二つあります。
一つ目は、正しい畜産の知識です。私もそうでしたが、畜産への知識が浅いと、ネットなどに記載された偏った情報を鵜呑みにしてしまいます。そうすると畜産への偏見や誤解が起こり、ネガティブなイメージが植えつけられてしまうことで、畜産へのハードルが上がり、視野を狭くしていると感じました。私は研修で「母豚が子豚を踏んで死なせてしまうのを防ぐために、妊娠ストールは大切」などの基本の知識を知ったことで、思い込んでいた誤解が解け、畜産へのハードルが下がったことで視野を広く持てました。
このことから、消費者の方々に正しい畜産の知識を広めることで、畜産へのポジティブ指数が上がり、興味を持ちやすくしてくれると考えました。

二つ目は、畜産の現状についてです。私はこの研修に参加するまで､畜産は「遅れている」「簡単である」というイメージがありました。しかし、今の畜産業では、高度で効率的な機器が取り入れられており、近代的であることや、家畜の思いを汲み取り飼育管理を工夫するのは、とても大変で難しいことが分かりました。新たな畜産の姿や、畜産農家の方々の姿を届けることで、国産品の応援者を増やすことや、分野外の方々も畜産に関心を持つきっかけになると考えました。
これからの日本の畜産は機械化が進むとともに、昔の循環型畜産に戻ると思います。機械化は課題である担い手不足を補い、農家さんの負担を減らし、家畜の管理の質を高めます。循環型畜産は、現在ある環境問題や化成肥料の枯渇のリスクを減らすために、実現可能で持続可能な畜産のあり方です。そのため、畜産の幅が広がり、今まで関わりのなかった人達も巻き込むことができ、多方面から畜産を盛り上げることができると思います。

❻ 私の夢、これからやりたいこと
私は研修に参加するまでは、自分の将来の夢が定まっていませんでした。
しかしこの研修で、これからの農業は、国と国との協力が必要になってくること、また農業には人々の食料を生産するというとても大きな責任が課せられていること、そして農業から生じる環境問題があることなどを知りました。これらのことから、将来農業に携わるという決心がつき、自分の中にあった海外に関わりたいという思いが高まりました。
私は将来、途上国で持続可能な農業開発に携わり、安定した食料の供給に貢献していきたいです。そのために海外研修などを取り入れた農業系大学に進学し、語学力やコミュニケーション力、高校で学んだ基礎的な知識・考えを発展させていきたいです。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
私は研修に参加するまで、あまり畜産について知らなかったので、マイナスな考えや簡単そうと言うイメージがありました。しかし研修を通して、畜産は人と動物と自然の関わりが深く、つながりを大切しながら自分が食べていけるほどの稼ぎを得ることは、容易なことではないと分かりました。しかし、畜産農家さんが、日々畜産業のあり方が変化していく中でも、柔軟に適応して自分の家畜と地球との関係やライフスタイルを考え、築き上げている姿に感銘を受け、とても魅力的に感じました。
畜産業も時代とともに進んでおり、発展を続けています。皆さんが感じている畜産の魅力を全国へ広めて、もっともっと畜産を一緒に盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
東京都立瑞穂農芸高等学校
畜産科学科２年
松 島 杏 桜

❶ テーマ

若者のための畜産
― 私たちが創る日本の畜産の未来

❷ キーワード

担い手不足

❸ キーワードのつながりと考察

「若者のための畜産」というテーマで、「担い手不足」について考えたとき、豚肉の輸出大国であるデンマークの農業従事者は足りていると思っていました。そのため、デンマークでも日本と同じく担い手不足に悩まされていると聞いて驚き、なぜ盛んに行えているのだろうかと疑問に思いました。
実際にデンマーク研修を受けると、同じ問題を抱えている国でも、様々な経営の工夫がされていることが分かりました。特にバイソンファームを経営している Niels Henrik さんのお話を聞くと、そこではオープンファームを実施しながらレストランや宿泊施設を経営し、年に数回牧場でパーティーを開催するなど、消費者が楽しみながら畜産を学べる取り組みがされていることに気づきました。
Niels Henrik さんは、この経営方法について「クレイジーなアイデアから始まった」と仰っていましたが、日本でも消費者の関心を高めるような、少しクレイジーな取り組みをしてみるべきだと思います。そして、「畜産ってこんなに楽しいんだよ。面白いんだよ」ということを、実際に体験することで知ってもらうことが大切だと思います。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

私は高校から畜産を学び始めたため、12 日間も海外の畜産を学ぶということが不安でした。
しかし、終わってみるとあっという間で、短い期間でとても濃いことを学べたなと実感しました。特に、Dalum 農業学校の学生とのオンライン交流はとても刺激になりました。自分の農場や使っている機械について詳しく説明してくれて、同い年なのに知識の量に天と地の差があると驚きました。そしてなにより、皆ユニークな方たちでした。バイソンファームの Niels Henrik さんの話でも思いましたが、デンマーク人は考えが豊かで、ユニークな方が多いと感じました。そのユニークさが様々なアイデアを生み、消費者に興味を持ってもらえるきっかけになっているのだと思います。私も学んだことだけでなく、視野を広げて、誰も思いつかないようなアイデアを考えてみたいです。
また、今回の研修で改めて英語の必要性に気が付きました。日本の畜産を高めていくには、海外の農家の方との関わる機会を増やすべきだと思います。そのためには、世界の共通言語である英語が必須です。私はまだ勉強中ですが、大学では今よりも英語を活用する機会が多いと思います。今のうちから英語により力を入れて勉強し、海外のアイデアをたくさん吸収できるようにしていきたいです。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

畜産アンバサダーとして広めていきたいことは、畜産の魅力です。
ペットとして扱われる愛玩動物や動物園にいる展示動物、自然に生息する野生動物など、世界には様々な動物がいます。そんな中でも家畜は、人間が生きるために必要不可欠な存在であるため、私たちとつながりが深い動物だと思います。しかし、身近な関係だからこそ忘れてしまいがちな存在でもあります。
私は高校で家畜と真正面から向き合い、初めてそれに気づかされました。学校では養豚を専門的に学んでいます。分娩介助から、産まれてきた子豚に歯切り、耳刻、予防接種をし、大きく育て出荷をする。そんな普段は当たり前のように行っている一連の流れもとても大切で、知って初めて畜産の魅力が分かると思います。あんなに小さかった子豚が、日に日に逞しく育っていき、お肉となって自分の元へ帰ってくる姿を見た時は、今までにないやりがいを感じ、お肉もより美味しく感じました。
また、アニマルウェルフェアについても広めていく必要があると思います。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、産業動物の獣医師になることです。
幼い頃から医者という職業に憧れていたこと、高校で畜産に出会えたことからこの職業に興味を持っています。獣医師になったら、動物にたくさん寄り添って、頼られる獣医師になり、農家さんの幸せな顔を見たいです。機械化が進んでいても、獣医師は必要だと思います。その動物にとって最適な手術を見極めることは、目の前の動物の気持ちと向き合える人だからこそできる職業だと思うからです。
獣医師になるためには、たくさんの知識を覚えるだけでなく、動物とコミュニケーションを取れるようにならなければなりません。そのため、日頃から担当豚をもっと観察し、表情や行動から気持ちの変化にも気づけるようになりたいです。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

畜産業を学ぶことは、普段家畜からお肉をいただいている私たちにとってとても重要だし、いただく過程に携わる人も絶対に必要です。畜産はとても面白いし、好きな動物のためになっていると思うとやりがいを感じます。また、「やりたい！」という気持ちがあれば誰でも挑戦できると思います。
これから一緒に畜産をより楽しく盛り上げていきましょう！

畜産アンバサダー
岐阜県立岐阜農林高等学校
動物科学科３年
田 島 ほ の 花

❶ テーマ

ジェンダーフリーな畜産
― 男女共生の畜産社会を目指して

❷ キーワード

仕事と家庭の両立

❸ キーワードのつながりと考察

「ジェンダーフリーな畜産―男女共生の畜産社会を目指して」というテーマで、「仕事と家庭の両立」について考えたとき、はじめ畜産業は労働時間が不安定で休みも少なく、仕事と家事や育児を両立して行うことが大変な職業だと感じていました。また、畜産業に限らず、日本では育児休暇を取るのは、主に女性であり、男性は取得しようとしても、周囲の声に影響されたり、自分の仕事に代わりがいなかったりするなど、育休を取得しづらい環境があると感じていました。そのため、男女によって働き方に違いがあり、男性は家族のために朝から遅くまで仕事をし、女性は仕事をする他に、家事や育児も主体的に行うという一種の役割が生まれてしまい、これが仕事と家庭の両立のやりにくさの要因であると考えていました。
デンマーク研修では、家族経営で養豚業をされている Louise Ipsen さんに仕事と家庭の両立についてインタビューした際に、畜産業は確かに、家畜の様子によって作業内容が変わることがあり、労働時間は不安定である職業だけれど、工夫次第で効率よく作業をすることができ、男性にできることのほとんどは女性にもできると仰っていました。また、男性よりも広い視野を持ち、家畜の些細な変化にも気づくことができ、繁殖生理についても深く理解し、分娩介助や種付けの際に活躍できるなど、男性だけでなく、女性にも畜産業界で働くメリットがあることに気づきました。
さらに、デンマークでは家事や育児は女性が主体となり行うのではなく、男性も当たり前のように家事と育児を行い、仕事だけでなく、家事や育児も協力し合って支えあいながら生活をしていることを知りました。このことから、畜産業は自己スキルを最大限に生かして、個人のスキルに合った仕事をすることで男女の差を気にすることなく働ける職業であり、仕事と同様に、家事と育児も男女がともに協力し合うことで、仕事と家庭の両立は当たり前にできるものになると知りました。

デンマークの酪農家は、搾乳の際に、床の高さを男女と問わず、それぞれの身長に合わせて調整することができる搾乳ロボットを取り入れたり、女性専用の農業機械を多く利用したりしていることから、男性も女性も働きやすい職場環境づくりができていることを知りました。そのため、日本の畜産業にも、農業機械を今よりも多く取り入れ、作業の効率化を図るとともに、ジェンダーフリーな職場環境を作ることが大切だと考えました。そして、これらを実現することで、畜産業がより働きやすい職業となり、畜産農家の方々が家事や育児も行いやすい環境が整うのではないかと考えます。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

この研修を通じて、日本の畜産業とデンマークの畜産業には、大きな違いがあることに気づきました。それは、制度の違いです。
日本の畜産業にも、家畜伝染病に関する法令やアニマルウェルフェアに関する制度はいくつかあります。しかし、アニマルウェルフェアに関しては、義務ではなく、推奨されているのみです。その一方で、デンマークの畜産業では、家畜伝染病に関する法令はもちろん、アニマルウェルフェアに関しても厳しく法律が定められています。例えば、牛舎に設置するカウブラシです。日本では、このカウブラシの設置も推奨されているのみですが、デンマークではカウブラシの設置が義務になっています。
アニマルウェルフェアに関する制度のほかにも、デンマークの育児休暇制度は、女性だけでなく男性も最低で９週間取ることが義務となっています。このように、制度が充実することで、働きやすい職場環境の形成ができていることを知りました。
このように、日本の畜産業にもデンマークのように、制度の義務化を図ることで、産業動物たちのストレスの解消につながり、今までよりもさらに安全で高品質な畜産物を作ることができると考えます。また、畜産業が働きやすい職業となれば、魅力を感じ就農する人が増えるのではないかと考えます。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は、畜産アンバサダーとして、日本とデンマークの畜産業の現場で働く女性の活躍について広めていきたいです。
なぜなら、日本の畜産業界では近年、多くの女性が就農していますが、それと同時にまだまだ畜産に対するマイナスな考えを持つ方や、畜産業は力仕事が多いことから、男社会であるというイメージを持つ方が多く、意識改善が必要であると考えたからです。
畜産業に固定概念を持つ方々は、畜産業で働く女性の活躍について知らない方が多くいるのではないかと考えます。そのため、研修で出会った、日本の女性農家やデンマークのジェンダーフリーな考えを発信していくことで、畜産業で働くうえで、男女ともに多くのメリットがあることに気づいてもらう必要があると考えます。意識改善により、日本の畜産業にも男女が互いにリスペクトし合う、ジェンダーフリーな考えが浸透していくのではないかと考えます。
ジェンダーフリーに対する考えを多くの人が知り、意識改善を行うことで、次世代の畜産業は、デンマークのようにジェンダーフリーな考えが深く浸透し、男性と女性の働く比率が同じくらいになり、男女が共生し合う職業になると考えます。そして、男女で仕事内容を分け隔てるのではなく、個々のスキルを生かした働き方をすることで、達成感を味わうたびに、生きがいを感じる素敵な職業になるのではないかと考えます。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

私は、将来、多くの畜産農家を支える経営アドバイザーになりたいと考えています。
この職業は、研修に参加し、日本とデンマークの農家の方々と交流する中で、就きたいと考えるようになりました。研修で、日本の畜産業は自分が思っていた以上に経営に苦しむ農家が多く、これらの経営不振が、若い世代や、新規就農をして経営を始めようとしている方々の不安材料になっているのではないかと考えました。
そのため、直接現場に行き、経営方針を農家の方々と交流をしてともに考え、良好な道を導きだして経営を立て直すことができる経営コンサルタントになりたいと考えるようになりました。この職業に就くために、まず、大学に進学し、畜産経営について学びたいと考えています。そして、大学卒業後、国際農業者交流協会が行っている海外研修に参加し、海外の畜産経営について実際に学びたいと考えています。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

この畜産ティーン育成プロジェクトを通じて、畜産業は、個人のスキルを最大限に生かした同じ志を持った仲間と協力し合い、国の食料生産を支える大好きな産業動物のために働く、やりがいのある素敵な職業であることに改めて気づきました。しかし、まだ畜産業に固定概念を持つ人も多くいます。
そのため、少しでも多くの人に畜産業の魅力を発信していき、若い世代や、畜産業に興味を持つ方の畜産業の道に進むきっかけづくりをしていきたいです。
私たちで、畜産業の流れを変えていきましょう。自信を持って畜産業の魅力を発信していきます。

畜産アンバサダー
静岡県立富岳館高等学校
総合学科２年
伊　藤　優　志

❶　テーマ
稼げる畜産 ― ライフスタイルと畜産経営

❷　キーワード
機械

❸　キーワードのつながりと考察
「稼げる畜産」というテーマで、「機械」について考えたとき、はじめは機械を使うことによって労働者の負担の軽減や仕事の効率化ができると考えていました。私の家での酪農経営にも、大型の機械は欠かせないものであり、人の手ではこなすことのできない重労働などはすべて機械を使っての作業となるので、畜産業に携わっている方々にとっては、とても大切なものなのではないかと考えていました。これが畜産業の「稼ぐ」に直接つながっていると思いました。
機械を使用することによって、労働者の負担などが軽減される一方で、社会問題にも結び付くのではないかと思いました。機械を動かすためには、燃料が必要です。それを消費することによって、CO_2 が発生して地球温暖化にも影響するのではないかと疑問に思ったこともありました。
実際にデンマーク研修を行い、機械についての多くの知識を得ることができました。まずはデンマークの機械は、日本の機械よりも発展した種類のものがありました。搾乳は労働者の手を使わずに、牛が好きな時間に行うことができる機械や、餌を自動で出してくれる機械、出した餌を牛が食べやすい位置にまで押してくれる機械、除糞を自動でしてくれる機械など、今まで見たことのない機械を駆使して、労働者の負担軽

減や仕事と家庭との両立を組んでいることを知りました。

しかし、社会問題はデンマークでも解消されていないとのことでした。今後の畜産業においての問題解決が、これからの課題であることが分かりました。
日本では、経営を維持しつつ、いきなり機械の導入をするのは厳しいと私自身は思います。しかし、社会問題を解消することにつなげることはできます。例えば、燃料の節約です。機械を使用しないときには、エンジンを切ることや必要最低限のことにしか使用しないようにするなど、CO_2 の排出をゼロにできなくても、最低限に抑えることは可能です。これは畜産業に限らず、どんなことにでも心掛ける必要があると思います。私たちの普段の生活にも取り入れることが、これからの社会問題の解決につながることを今回の研修を通して学びました。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと
デンマークの畜産業を知ったことによって、日本の畜産業と比較することができました。はじめに感じたのは、デンマークの方々の農業に対する関心でした。常に前向きな思考で、どのようにしたら自分の農家で稼ぐことができるのかを考え、日々仕事を行っているということを感じました。牛や豚それぞれの動物に合った飼い方をすることによって、ストレスを与えることなく飼育できるという動物への愛情も感じることができました。
フリーストールの牛舎や豚舎を作り、その中を家畜が自由に餌を食べたり、寝たり、遊んだりする姿を研修中に見ることができました。家畜が利用されるためだけに生まれてきたわけではなく、一頭の動物として生まれてきたという意味を動物たちに教えているような取り組みがされていて、手厚い経営をされていることが分かりました。日本でも実際にフリーストールを利用した飼育方法がありますが、デンマークのような自由を求めたかたちになってはいないので、未来の畜産に生かしていきたいと思いました。私も自分たちの経営のことだけではなく、動物のことも気を配ることができる酪農家を目指したいと思うきっかけになりました。
そして、もう一つ研修を通して感じたことがあります。それは、デンマークの農業の方々の親切さです。畜産アンバサダーである私たちに、畜産経営について熱心に説明

してくださり、本当に嬉しく感じました。これからの畜産業を世界へもっと広げるために、直接農家さんから学んだことを発進していこうと思います。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと
機械を利用した畜産業を広めていきたいです。
機械を導入することで、畜産労働者の悩みの一つである休める時間が少なすぎるという問題の解決につながると考えるからです。日本の畜産業で稼いでいくためには、大規模化が必要です。デンマークではより多く稼ぐために、家畜をたくさん飼育しています。しかし、人間の手だけで大規模経営を支えるのはとても大変なことです。
そこで、より多く稼ぐためにも機械の導入が必要となります。機械を設置することによって家畜のストレスだけでなく、さらに仕事の効率化にもつながります。また、一つ仕事の手間が省けることで、仕事と家庭の両立ができます。これで、空いた時間を労働者の休みにあてることができます。
これをこなすことができれば、日本でも畜産業が発展していくと思います。機械を導入することで、今まで実現不可能だった新たな畜産経営につながると私は考えています。
動物のストレスは、人々が求める「稼げる」に大きく影響してくるものです。また、機械の使用は、男女差別関係なく利用できるものであると考えます。力に差のある男女でも機械を利用することで、新たな畜産業が見えてくるのではないかと考えます。これからの社会は、大規模経営をすることで、今までよりもさらに多く稼げるようになっていくと思います。
家畜のストレスが解消されて、労働者の負担も軽減され、仕事と家庭の両立ができる、そんな畜産業になっていると考えます。これからの畜産業を支えていくのは、もう私たちの世代なのかもしれません。未来の畜産業を支えるためにも、新しい経営方法を見つける必要があるのかもしれないと、私はこの研修を通して学びました。

❻　私の夢、これからやりたいこと
私の夢は、酪農家である家業を継ぐことです。
今回の研修に参加させていただき、まだ触れたことのない畜産業を知る良いきっかけとなりました。デンマークでは、僕たちと同年代の方々も立派な労働者の一員として働いている姿を、オンラインを通じてみることができました。私も負けないように、家の仕事でもさらにできることを増やせるようにしたいです。
また、新型コロナウイルスの影響によって、デンマークへ直接行くことができなかったので、大人になった時にデンマークへ一度行ってみたいという気持ちも生まれました。私は畜産関係の大学進学を目標としています。その夢を叶えるために、普段の授業も懸命に受けていきたいと思います。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ
畜産業は未知なる職業です。知らなかったことや、分からなかったことがたくさん生まれてきます。そして責任感が求められる仕事です。今回の研修で、一つのミスが大きなミスにつながるリスクもある、とても大変な仕事なのだと改めて認識しました。しかし、動物のことを考えることができる、とても楽しい職業でもあります。どのようにしたら動物がさらに快適に過ごすことができるのか、アイデアも重要となってきます。
皆さんも一緒に新たな畜産経営をつくりませんか？皆さんの夢を叶えるために、一緒に頑張りましょう！！

畜産アンバサダー
島根県立出雲農林高等学校
動物科学科３年
岡　田　百　夏

❶　テーマ

ジェンダーフリーな畜産
― 男女共生の畜産社会を目指して

❷　キーワード

男女の意識

❸　キーワードのつながりと考察

「ジェンダーフリーな畜産」というテーマで、「男女の意識」について考えたとき、最初は、畜産業などの力仕事は男性が主に行っているイメージがあり、女性は畜産業に対して抵抗があるのではないかと考えていました。そのため、そもそも男女が共生して働く畜産農家は少ないのではないかと思っていました。
実際に研修をしていると、デンマークでは多くの女性が畜産業で活躍していることが分かりました。そして、男女ともに共生して働くことができていました。その中で、男女に意識の差はなく、個人の能力を尊重し合っていることが分かりました。本人のスキルに合う仕事を行っているので、個人の能力を最大限に生かすことができ、男女それぞれが得意分野で十分に活躍できていることが分かりました。
また、デンマークの畜産業において女性が多く求められていることから、力があるかないかは関係なく、女性の活躍が認められ、多くの畜産農家から必要とされていることが分かりました。これらのことから、日本でも、男女が互いに持つイメージを改善し、個人の能力を生かすことで、男女が働きやすく共生できる職場の実現ができると考えました。
男女が共生できる職場の実現をするためには、畜産のイメージの改善と働きやすい環境を作る必要があると考えます。畜産のイメージとして、男性の仕事と考える人は少なくないと思います。また、「きつい」「汚い」などの畜産に対するマイナスなイメージもあるのではないかと思います。
近年では、スマート機器や機械が普及しており、男女ともに無理なく働ける環境が整いつつあります。これらを多くの人に広め知ってもらうことで、マイナスなイメージを改善できるとともに、女性も畜産業で活躍できるイメージを持ってもらえるのではないかと思います。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

12 日間の研修では、初めて知ることばかりで、毎日が新鮮でとても充実した研修でした。その中で、私が印象に残ったことは二つあります。
一つ目は、養豚についてです。デンマークの放牧養豚場はとても広く、アニマルウェルフェアを重視した飼育方法や飼育環境になっていて、動物福祉をとても大切にしていることが強く印象に残りました。生産者だけでなく、消費者のアニマルウェルフェアに対する意識の高さにとても驚きました。日本でも、経済面だけでなく、家畜の幸せに重きを置くのも必要であると思います。
また、デンマークの養豚業では、分娩時や母豚の管理に女性の活躍を必要としていることを学びました。畜産業で女性の活躍が求められていること、必要とされていることに日本との差を感じました。日本でも、女性が多くの畜産現場で活躍できれば自身の能力の可能性が広がり、畜産業に求められていくのではないかと思います。
二つ目は、デンマークの畜産業で男女に差がないことです。日本では、畜産業は男性という固定概念に縛られているように感じます。実際に、私の住む地域の和牛農家の方も男性で、女性が畜産業に関わるのは珍しいという印象を持っておられました。しかし、デンマークでは、男女関係なく畜産業で活躍し、個人のスキルに合った仕事内容に取り組んでいます。性別によって仕事内容を分けるのではなく、個人の能力を最大限に生かせることを重視して仕事内容を決めていることで、女性も畜産業にかかわりやすい環境が自然とつくられていると感じました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は、これから畜産アンバサダーとして「男女の共生できる畜産業」を広めていきたいです。
畜産業では、体力や力のいる作業などが多くあります。そのため、機械化を進めることで男女が共生できると思います。実際に、デンマークでは、搾乳ロボットや自動給餌器、自動掃除機など、様々な用途の機械が普及しているため、作業の効率化と生産性の向上が図れます。女性にとって不利な作業も、機械化が進めば効率よく楽に作業ができるので、女性の活躍の場も増えると思います。
また、性別に関わらず、背が高い人と低い人、力がある人とない人などに考慮した機械・設備が導入されれば、誰もが簡単に作業を行え、生産性の向上にもつながるのではないかと思いました。それと同時に、男女で仕事内容を分けることなく行えるので、男女に差をつけることなく、平等に仕事に取り組めるというメリットがあると思います。
また、制度の改善が必要だと思います。特に家庭を持っている場合、仕事と家庭の両立をするうえで制度の充実さは、とても重要であると思います。デンマークでは、24 週間の産休を男女ともに取る権利があります。しかし、24 週間中 13 週間は妻と夫どちらかに渡せます。例えば、夫が 24 週間中 13 週間を妻に与え、夫は 9 週間の産休を取ることができます。デンマークのように、日本も育休や産休が男女ともに義務化されることで、仕事と家庭の両立がうまく循環させられるのではないかと思います。
また、女性だけでなく男性も育児にかかわらなければならないという意識も生まれ、女性の負担軽減にもつながると思います。これらの取り組みが普及すれば、より男女が共生できる職場が実現できると思います。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私は将来、家畜人工授精師になり、女性という立場で多くの畜産現場で活躍することが目標です。
「女性」といえば、男性と比べると体格や力に差はありますが、不利な部分も工夫しながらカバーし、プラスにしていきたいです。そして、女性も畜産業に向いている、女性も畜産業で活躍できる、そんな可能性を広げていけるような人材になりたいです。
また、畜産業を含めた農業に興味がある人や迷っている人などが農業の道への一歩を踏み出すきっかけになれたらいいです。これからも多くのことに挑戦し、日本の農業に貢献していきたいです。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

動物と関わるなかで、上手くいくこともあれば上手くいかないこともあります。また、命と向き合う場面もたくさんあります。しかし、私たちが大切に育てることで動物もそれに応えてくれます。畜産は、苦労した分やりがいをたくさん得られる職業です。畜産に興味がある人、畜産にかかわりたいと考えている人がいたらぜひ農業について学んだり、様々なことに挑戦してみたりしてください。
そして、この魅力あふれる畜産業を若い世代の私たちで守り続けていきましょう！

畜産アンバサダー

広島県立油木高等学校
産業ビジネス科３年
西　田　直　輝

❶　テーマ

ジェンダーフリーな畜産
― 男女共生の畜産社会を目指して

❷　キーワード

制度

❸　キーワードのつながりと考察

「ジェンダーフリーな畜産―男女共生の畜産社会を目指して」というテーマで、「制度」について考えたとき最初、デンマークは北欧に位置しており税金が高く、制度が充実してそうだなと曖昧な考えしか持っていませんでした。また、制度が農業大国であるデンマークの畜産業をより良いものにするようになっているかも気になっていました。
実際に研修に参加してみて思ったことは、社会保障制度の充実さ、デンマーク人と日本人の畜産業における女性への考え方の違いです。デンマークでは、50％にもなる高い所得税により生涯医療費無料や教材を除いた教育費は無料になっており、出産と子育てでは男女それぞれに国が定めた産休・育休期間（義務）が設けられており、その間の給与は 100％会社から支払われ、その後最大 32 週まで育休期間の給与補償は政府が受け持ち、有給休暇は父母どちらがとっても良いことになっています。またデンマークの法律により、待機児童はいないようになっています。このようなことから直接的ではありませんが、間接的に制度が畜産従事者の生活のしやすさにつながっていました。
そして、デンマークには男女の差がなく、畜産業においても女性は母性本能があり、動物の管理に向いている点などから、力仕事が機械化しつつある現在では、畜産の女性従事者は男性以上に求められており、日本と違いジェンダーフリーが当たり前のように浸透していると感じました。
現在の日本は、少子高齢化や産業の担い手不足に直面しており、畜産業においても例外ではありません。この現状を打破するためには、「女性は畜産業には向いていない」という古い考えを完全に撤廃し「きつい」「汚い」「危険」の「農業の 3K」が、現在どのように変わってきているのかを、畜産を知らない方に積極的に知ってもらうことが大切だと感じます。また、デンマークのように女性の政治参画の割合が増えれば、女性のための子育て制度が充実していき、畜産業の助けになるのではないかと考えました。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークとのオンライン研修は、ほんの 2 週間程度とは思えないほど時間の進みが早く、濃い時間でした。日々習うことをノートにまとめ、時にはキャパオーバーしてしまい熱が出ながらも研修に参加したことも、今後辛いことがあった際、乗り切れる力がついたのではないかと感じます。多少しんどいことがあったものの、毎日知らない知識、考え方を学ぶことは本当に楽しいものでした。実際に現地に行き、研修を行うことが良いことなのかもしれませんが、オンラインだからこそ質問したいことを通訳の JJ さんを通して、ぐいぐい質問できたのはよかったと感じました。
また、デンマークの畜産農家さんの話や学生とのセッションは、自分の常識が覆されるものでした。オンライン研修で初めて知ったアニマルウェルフェアは、デンマークでは法律化されていること、畜産を利用した経営など「こんなこともあるんだ」「こんなこともしてるのか」など、興味がひかれるものばかりでした。Dalum 農業学校の学生とのセッションでは、顔立ちや風格が同い年や年下とは思えないほどに大人びていました。それに加え、乗用車や大型機械も乗りこなしており教育や文化の違いを改めて目の当たりにしました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私が畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいことは、大きく分けて三つあります。
一つ目は、畜産に対する悪いイメージを払拭することです。多くの人は、畜産と聞くと糞尿臭いや獣臭い、汚いといったイメージが定着していると思います。そういった人々には、畜産の体験をしてもらうことが

効果的だと考えるので、私自身が畜産の体験ができる場を設けていきたいと思います。
次に教育方針を変えることです。日本は、農業を学ぶことができる機会が少ないと感じます。しかし、農業などの一次産業はすべての産業の基盤であり、なくてはならない産業だと思います。今回学習したデンマークでは、座学で勉強し、その後一年間畜産農家で働くサンドウィッチ教育を行っており、これに似たこと、例えばインターンシップを増やしていく取り組みを日本の教育にも取り入れていけないかと考えました。私自身まだ教育に携わっていませんが、地域の畜産農家さんと協力してイベントを開催し、そこに教育的視点を組み込むことは可能だと思っています。そういったことにも注力していきたいと思います。
最後に、有機畜産の必要性を農家にレクチャーすることです。農業のスマート化が進み、有機的な畜産は衰退していると感じました。しかし、デンマークの畜産は有機的な畜産に力を注いでおり、その点が日本の畜産とかけ離れている点だと思いました。SDGs の観点からみても、今後は有機的な畜産に価値が必ずあると思うので、多くの畜産農家さんが、持続的に生産活動ができるよう、私からアイデアの提案を行っていきたいと思います。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私は将来、畜産経営に携わる仕事か、農業科の教職員になろうと考えています。
そのために高校卒業後は、４年生大学に進学し、畜産の主に和牛の知識をより深め、研究していきたいと考えています。そして今後は、広く日本の「食」を支えることのできる人材になりたいと考えています。
また、私の考えている「食」の未来を実現させるために、自身が学んできたことやそれに対しての思いを教員や畜産経営者として若い世代に伝えていきます。これにより、若い世代が抱いている畜産に対してのネガティブなイメージを転換し、畜産人口の増加を図ることにもつながると私は考えています。
そして、日本は海外の技術を取り入れる必要があると私は考えているので、海外研修にも積極的に取り組んでいき、日本の畜産業に貢献していきたいです。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

皆さんから見た畜産のイメージは、どう見えているのでしょうか。
多分、「汚い」「臭い」「牛が怖い」などのネガティブなイメージを持たれている方が多くいると思います。非農家から農業高校に進学した私も、最初はそう思っていました。しかし、子牛の肥育に携わったり、一頭一頭個性が違い、かわいらしい行動をとる牛を管理する中で、ネガティブなイメージはかき消されていきました。
ですが、畜産動物は愛玩動物とは違い、愛情をかけて育て出荷、と殺する経済動物です。現在、日本の畜産業は飼料高の影響により、経済的に厳しい状況が続くと考えらますが、一次産業である畜産業はなくてはならない産業です。今後は有機畜産などで付加価値をつけたり、新たな飼料生産方法などが考えられ、今後の畜産業にはまだ明るい未来が待っていると思います。
畜産業の衰退を止めれるよう頑張りましょう。

畜産アンバサダー
愛媛県立野村高等学校
畜産科学科２年
飯 田 茉 景

❶ テーマ

持続可能な畜産
― 人と家畜のパートナーシップ

❷ キーワード

快適性

❸ キーワードのつながりと考察

「持続可能な畜産」というテーマで､「快適性」について考えたとき、動物が快適に暮らせる環境をつくることだけでなく、人間も快適に働けるような環境にしていくことが、持続可能な畜産の実現につながるのではないかと思った。畜産と聞くと、よくキツい、汚い、危険の 3K のようにマイナスな印象を抱いている人が多い。人間が快適に働ける環境を整えることで、畜産業へのイメージが変わり、興味を持ってくれる人が増えるのではないかと考えた。
最初に思い付いた具体的なアイデアは二つある。一つ目は放牧を行うなどして飼育スペースを確保すること、二つ目は機械を導入して作業効率を上げることだ。しかし、日本では土地の確保が難しく機械化があまり進んでいないため、この二つのアイデアを普及させることが難しい。デンマークでは、持続可能な畜産を実現するためにどのような取り組みをしているのかに着目して、研修に臨んだ。
特に印象に残ったことは、デンマークのアニマルウェルフェアのあり方だ。私は、アニマルウェルフェアといわれるとなんとなく放牧をイメージしていた。しかし、全ての個体が放牧による群れでの行動を好むわけではない、という話を聞いた。現地の農家さんは、動物一頭一頭の個性をしっかり観察し、それぞれに合った飼育を心がけることが大切であると仰り、放牧することが必ずしもアニマルウェルフェアにつながるわけではないことを実感した。日常の管理にも違いがあった。デンマークでは給餌、餌寄せ、除糞、搾乳などを行うロボットが導入されており、機械化が進んでいたことも印象的だった。機械を導入することで作業効率を向上させ、一人で牧場を経営することも可能になる。ロボットは設定された時間に決まった仕事をすることで、動物のストレスが減少するなど、動物に対してもメリットがあることが分かった。
デンマークでは、家畜のストレスを軽減するために、豚のストールに鼻で遊べるおもちゃを設置する、牛床を冷やしてくれる設備を導入するなどの取り組みがされていた。放牧は難しいと考えていたが、これらの方法なら、日本でも取り入れやすいのではないかと思う。また、日本でも機械の導入を進めていく必要があると考えた。畜産業は力仕事が多いというイメージから、女性や若者から敬遠されがちである。機械化することで作業の省力化や効率化、均一化など人間も家畜も快適に仕事をすることが可能となる。そうすることで、力仕事は機械がしてくれるというイメージになり、男女関係なく働きやすい労働環境を整えることができると思う。

❹ デンマークの研修を通じて考えたこと

研修に参加していただいた現地の方で特に印象に残っているのが、6 次産業化の取り組みを行う肉牛農家さんだ。始めは趣味でバイソンを飼育していたそうだが、脂肪分が少なく健康志向の方に好まれるバイソン肉の味を知ってもらうために、レストランを開業した。現在は牧場内の宿泊施設の経営、オープンファームも行っているという。宿泊施設はパーティーやコンサート、結婚式場として貸し出しも行っており、結婚式は来年に予約をされている方が 20 組以上もいるほどの人気である。
畜産業は、家畜を育てて肉や牛乳などの生産物を出荷する仕事だという考えを持っていた私は、衝撃を受けると同時に、畜産業に対して無意識に固定概念を持っていたことに気づいた。レストランなどが経営の柱としてプラスで収入を得ることができると、自分の発想力を生かして様々なビジネスに挑戦できることなど、6 次産業化には多くの魅力ややりがいがあると思った。

❺ 畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は、畜産業の魅力を多くの人に広めていきたい。理由は二つある。一つ目は担い手を増やしたいから、二つ目は誇りを持って働いている農家さんを知ってほしいからだ。
私は高校に入学するまで、畜産とは全く縁がなかった。高校入学後に初めて搾乳した時、前搾りの温かい牛乳に触れたこと、ミルカーで搾られてバルククーラーに溜まった牛乳、そして牛乳の生産現場に私は立っていることを実感した。それから、酪農を知りたいという気持ちが強くなり、休日には搾乳をするようになった。今では畜産のイメージが、魅力的な職業へと変わっている。この経験から、畜産を知る機会を増やすことができれば、見た人の関心が高まり、私が抱いていたような縁のない職業とは違ってくるのではないかと考えた。

情報発信の機会を増やすことで、畜産物が販売物として陳列されるまでの過程を知ることができる。生産者の飼育方法や経営理念を知ることができれば、消費者が商品を購入するきっかけになる可能性がある。また、その考えに共感し、私も一緒に畜産をしたいと考え始める人もいるかもしれない。知ってもらうというきっかけが、多くの効果につながっていくと思う。
生産者が情報を発信していく畜産業が、次世代の畜産業なのではないかと私は考える。畜産には、家畜の可愛さや感動、生産者の偉大さや思いなど、多くの魅力が詰まっている。その情報を伝えることで、消費者は畜産物への感謝の気持ちも高まり、畜産への理解が深まる。情報発信が生産者と消費者のつながりを作る第一歩になり、農家さんを知ってもらう機会になり、思いに共感した人が担い手として次世代を支えていくという、消費者からリスペクトされる畜産業が実現するのではないだろうか。
そのために、私もアンバサダー活動でたくさんの人に情報発信していきたい。

❻ 私の夢、これからやりたいこと

この研修を通して、循環型農業や 6 次産業化などを知り、畜産業は奥深い職業だということを学ぶことができた。畜産業に限らず、外国での教育法や価値観が日本とかなり違うことに気づくことができた。
また、デンマークの学生は、畜産業をしている実家での作業や動物の様子を、とても楽しそうに説明してくれて、私もこんな風に生き生きと、畜産業の魅力を語れる人になりたいと思った。
将来の具体的な夢はまだ決まってはいないが、将来、畜産業について多角的な視点から学び、いろんな人の価値観に触れてみたいと感じた。そして、畜産業に携わり、たくさんの人にその魅力を伝えていきたいと思った。

❼ 畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

今回の研修は、全国の高校生の皆さんをはじめとする畜産業に誇りを持つ人達と交流し、多様な考え方やアイデアを知ることができ、私の視野を広げてくれる貴重な経験になりました。畜産業を目指す方がいたら、同じ夢を持つ仲間と考えを共有することで、自分の思い描く畜産業に誇りと自信を持てるのではないかと思いました。
畜産業はたくさんの可能性がある職業です。いろんな視点や角度からアイデアを出し、一緒に畜産業をさらに魅力的なものにしていきましょう！

畜産アンバサダー

熊本県立菊池農業高等学校
畜産科学科３年
永　野　春　菜

❶　テーマ

持続可能な畜産
― 人と家畜のパートナーシップ

❷　キーワード

人と自然の共生

❸　キーワードのつながりと考察

「持続可能な畜産」というテーマで、「人と自然の共生」について考えたとき、最初は持続可能って何だろうと考えました。将来にわたって、現在の社会の機能を継続していくことができるシステムやプロセスのことを指しますが、これを日本の畜産として考えた時に、人間の力だけでは実現するのが難しいと思いました。

近年では、地球温暖化が進み、熱帯や温帯の動植物が日本でも見られるようになりました。多様化している自然界に、人間が柔軟に対応していかなければなりません。持続可能な畜産を実現するためには、人間と自然との助け合いが存続していく必要があると考えました。

デンマーク研修を通して、日本では消費者の意識を変えていく必要があると考えました。持続可能な畜産は、生産者と消費者、行政という人間の輪が、自然と共生していく必要があることを学ぶことができました。そして、デンマークと日本の農業は、消費者の農業に対する意識に違いがありました。

また、それに伴って教育や福利厚生が行政によって整っていました。

デンマークの農業を人と「自然の共生」というキーワードからみたときに、放牧はアニマルウェルフェアと環境保全の両面で優れていて、持続可能な農業につながってくると考えました。しかし、日本では十分に放牧できるスペースはありません。耕作放棄地を使用しながら、少しずつ放牧が日本の農業で浸透してほしいです。

日本の畜産に、この研修成果を反映するために二つのことを考えました。

一つ目は、農業に対する意識改革を教育の面から始めていくべきだと考えます。サンドイッチ教育や農業体験を一つの学習プランとして構築していき、農業、命の大切さや安全な食への理解を目的にします。

二つ目は、日本に適した農業のスタイルを見つけることです。研修を通して、デンマークの農業は、日本がこれから目指していく農業のスタイルの一つになると思います。しかし、日本でデンマークの農業を始めてしまうと、気候や国土に違いがあるため、かえって持続可能な農業の実現が難しくなると考えます。デンマークの農業をそのままのかたちで実行せず、形態を変えて一つでも取り入れていきたいです。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

デンマークでは、国全体が一丸となって農業をしていると考えました。

実際に畜産物を生産、加工するのは生産者ですが、消費者がアニマルウェルフェアやオーガニック農業などの付加価値を納得して購入することで、農業が成り立っています。消費者の関心が高いと、国もそれに合わせた農業の法律を整備します。子育て支援や補助金制度があるため、生産者が農業をしやすい環境になります。これは、生産者側だけではなく、消費者の理解が進んでいるからだと考えました。デンマークは、個人に合わせて働ける環境ができています。デンマーク生産者側の負担やライフスタイルを考慮することで、農業の担い手不足も解消されると考えました。デンマークと日本はともに、人口のおよそ3%の人しか農業を始めていません。持続可能な農業を実現

するためには、色んなアプローチの仕方があると考えました。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

日本の農業の現状と、持続可能な農業を実現するためには、消費者の協力が必要不可欠であることを広めていきたいです。理由は、今の日本に農業について発信しても、消費者は関心を持ってくれないと思ったからです。自国の農業が深刻な状態にあり、このまま深刻な状態が続くと食料が高騰してしまいます。それを食い止めるには、消費者の意識向上が重要であると認知してほしいです。

それができると、日本の畜産業は確実に、持続可能な農業の実現に近づけると考えます。消費者が農業について関心を持ち、付加価値の畜産物を購入するようになれば、国は農業従事者が働きやすい環境に整備します。農業に触れる機会を増やすことで若年層への農業従事者の促進につながります。次世代の畜産業は、輸入飼料に依存しない体制を築くことだと考えます。消費者の意識が向上しても、世界情勢の悪化や気候変動などで飼料が高騰しているなか、日本では自給型畜産を一つの経営方法として確立する必要があります。限られた資源を有効に使わなければなりません。エコフィードや未利用資源を飼料として与え、付加価値をつけていくべきだと考えます。付加価値をつけることで、食料自給率の低迷を阻止できます。

❻　私の夢、これからやりたいこと

私の夢は、持続可能な農業を実現するために地方公務員になり、農業教育を通して子供たちに農業や命の大切さを伝えていくことです。日本の農業の課題である担い手不足と、消費者の意識向上の両面からアプローチしていきたいと考えています。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

ぜひ、この研修に参加してほしいです。畜産業を目指すのであれば、色々の農業形態や経営、考え方を吸収したほうが良いと考えたからです。私自身、研修前と後では農業について考え方が変わりました。これからの農業を担っていくのは「私たち」です。デンマークの農業は日本と違います。日本においても都道府県によって地域の特色を生かした農業をしているように、農業には正解がありません。だからこそ、海外や日本の農業を見て、考えてください。きっと、日本の農業のベストなかたちが見えてきます。

畜産アンバサダー

熊本県立南稜高等学校
総合農業科２年
中　嶋　彩　乃

❶　テーマ

ジェンダーフリーな畜産
― 男女共生の畜産社会を目指して

❷　キーワード

畜産におけるデザイン

❸　キーワードのつながりと考察

「ジェンダーフリーな畜産」というテーマで、「デザイン」について考えたとき、はじめはジェンダーフリーな畜産というテーマを選んだものの、なかなかイメージがわかず、「性別による違い」や「制度・法律はあるのか」ということしか頭にありませんでした。
しかし、同じチームのメンバーと話していると、どんどん知らない単語や知りたいことが出てきました。その中でも、特に「デザイン」というキーワードに惹かれました。畜産におけるデザインについては、作業服や小物などを性別にかかわらず気軽に購入できる店はあるのか、また、施設・設備において、作業者が性別や体格、筋力の差によって、不便を感じたり諦めたりする作業があるのかという課題があげられます。日本ではどうなのか、研修先のデンマークではどうなのか、また、両者にどのような違いがあるのか、興味を持ちました。チームで話をして、これから調べることが楽しみになりました。
研修を通して、デンマークと日本を比較すると、デンマークの方がより、ジェンダーフリーな畜産が実現できていると感じました。作業服や手袋・帽子などの小物、農業機械などにおいては、どちらの国も性別にかかわらず店頭で販売されており、それほど大きな違いはありませんでした。しかし、施設・設備には大きな違いがありました。デンマークでは、性別や身長、筋力の差などにかかわらず、働きやすいと感じることのできる環境作りに尽力されていることが分かりました。日本がデンマークより遅れていると感じる背景には、農業者には男性が多いことに加え、性別による役割意識もいまだに根強くあることなどが背景にあると考えます。
この研修を通して、私と同じように畜産を志す高校生がたくさんいること、海外にも私たちを応援してくださる方々がいることに勇気づけられました。学んだことを同級生や周囲の人たちに伝えたいと考えます。畜産がどのように変化すれば、ジェンダーフリーと言えるのか、考え続けていきたい課題です。
デンマークの畜産に触れ、日本との違いや、私にできることなど、考えたことを自分の言葉で伝えていきます。同じ志を持った仲間が地域に増えていくことで、少しずつジェンダーフリーな畜産を実現できると考えます。
このように書くことは簡単ですが、実際に行動に移すのはとても難しいことです。しかし、自分のできることから取り組んでみたいと思います。

❹　デンマークの研修を通じて考えたこと

この研修を通して、思っていた以上に私には知らないことが多く、畜産の奥深さを肌で感じました。私は、幼いころから牛の世話をする両親の手伝いをしており、学校でも牛について勉強しているため、畜産について大体のことは分かるだろうと思っていました。しかし、初めて聞く言葉や話題が多く、話を聞いてメモを取るだけで一苦労でした。
しかし、研修後にメモを読み返すと、その苦労以上に新しい知識を身につけた喜びや、自分の成長を実感することができました。デンマークと日本の畜産を比較するということも貴重な機会でした。
仕事に関して性別の差がないのは、すごいことだと思います。日本では未だに「農業は男性の仕事」という意識が根強くあると感じますが、デンマークではそのような考えが浮かばないほど、性別の差がありませんでした。
制度面でも、デンマークでは男性も育児休業を取得しなければいけないという話を聞きました。日本にも制度はありますが、必ずしも希望する人が取得しやすい状況であるとは言えません。日本の畜産をより良いものにしていくために、誰もが働きやすい畜産を私たちがつくっていくのだという意識を強く持ちたいです。

❺　畜産アンバサダーとして日本に広めていきたいこと

私は畜産アンバサダーとして、日本の畜産は誰もがより働きやすいものにすることができると伝えていきたいです。
この研修でデンマークの畜産について学び、日本ができることや取り入れられるもの、しなければならないことなど、たくさんの課題を発見できました。デンマークにおける育児休業制度など、日本もこうなったらいいなと何度も思いました。畜産に限らず、日本がより暮らしやすい国になるために、研修で学んだことを多くの人に伝えていきたいです。次世代の畜産業には、ジェンダーフリーが必要になると考えます。ジェンダーフリーな畜産とは、誰かが性別や体格・筋力などによって不便さを感じたり、自分には無理だと思って諦めたりすることのない状態を指します。そのために、常に自分の自宅や地域・学校の農場経営だけでなく、国内の先進的な農家や海外の事例について情報を収集したり交換したりして、高い意識を持ち続けます。
私の通う熊本県立南稜高校の動物コースでは、今年度、男性の先生が育児休業を取得され、先日復帰されました。先生に話を伺うと、子どもと過ごす喜びや家族での時間を大切に感じると同時に、職場への心苦しさや、毎日世話をしてきた牛を心配する気持ちも尽きなかったそうです。「男性が育児休業？」と驚かれることも多く、畜産業にかかわらず、誰もが育児休業を取得しやすい状況ではないことが分かりました。
畜産アンバサダーとして活動する際には、こうした課題からも目を背けず、どうしたらよいのかを考え続けていきたいです。そうした思いを持った私たちが、地域のリーダーとなり活躍することで、次第にジェンダーフリーな畜産を実現できると考えます。

❻　私の夢、これからやりたいこと

現在、２年生の生徒で、地域の中学生や幼稚園児・小学生・保護者などを対象とした、牛とのふれあい体験を企画しています。牛や畜産の面白さや奥深さを伝えるとともに、ジェンダーフリーな畜産の可能性について伝えます。畜産の専門学校に進学し、さらに知識・技術を身につけるとともに、国内外における実習・研修など様々なことに挑戦したいです。そして、将来は、家業である黒毛和種の繁殖農家を継ぐことが目標です。
両親のように牛をよく観察し、長く大切に飼うという姿を受け継ぐことはもちろんですが、体験活動の実施や実習生の受け入れなど、地域に開かれた農場経営を目指しています。同じ志を持つ仲間と協力しながら地域のリーダーとして活躍し、畜産を盛り上げる人材になりたいです。

❼　畜産業を目指す仲間たち、後輩たちにメッセージ

ジェンダーフリーな畜産と聞いても、ピンとこない人が多いのではないでしょうか。
しかし、日本の畜産をさらに発展させるためには、必要なことだと考えます。一人だけでできるものではありません。畜産を学ぶ全員で協力しあい、一緒に未来の畜産を作りませんか。
一緒に頑張っていきましょう。

メンター

左草ブラウンスイス牧場
藤 田 春 恵

1. はじめに

平成 30 年度（2018 年）から続く本プロジェクトには、今年 1 つの変化があった。開始当初は、畜産業界での女性の活躍を促進する目的で、対象者を女子高校生に限定してきた事業だったが、近年ジェンダーに対する考え方が、「平等」から「共生」へ変化しつつあるのに伴い、男子高校生も募集対象としたことである。

畜産情勢もこの 1 年で激変している。酪農業界では、世界的な穀物需要の高まりから飼料の輸入困難に加え、円安、化成肥料・燃料等あらゆるコストは上昇する一方で、乳価の値上げは僅かな上、個体販売費が前年に比べ半減、場合によっては十分の一以下と、多くの経営体が先の見通しの立てられない未曽有の局面にあり、廃業の決断をする農家も既に出てきている。

今年もメンターとして本プロジェクトに関わらせていただくにあたり、デンマークではどのようにこの危機を乗り越え、次世代に畜産のバトンを渡そうとしているのか見聞したことを報告する。

2. デンマークの酪農

⑴　デンマーク畜産の背景

デンマークの国土面積は、431 万 ha（北海道の約半分）でそのうち農地面積は約 60％、平坦な地形と温暖な気候を生かした多様な農業が盛んである。ハイテク分野も進んでおり、畜産現場でも積極的に活用されている。デンマーク畜産と言えば、アニマルウェルフェアやオーガニックが有名で、消費者の関心やニーズも高い。国産品を買い支える消費者意識と生産者の努力の両輪が、デンマークの強い畜産を形成している要素の一つと言える。

⑵　世界情勢とデンマーク酪農

世界情勢の急変は、デンマーク酪農にも大きな影響を及ぼしている。日本同様、穀物の確保は重要課題で、現地の酪農家によると、乳量が下がるが当面は給与量を減らして凌ぐしかないということである。またデンマークの未経産牛の最大輸出国は、ロシアとウクライナだが、両国に現在個体販売が全くできないことも生産者には大きな痛手となっている。

⑶　乳業メーカーと酪農家

デンマーク最大の乳業は Arla 社だが、有機生乳だけを扱う乳業もあり、通常普通の生乳よりも高乳価で取引される。近年、生産者を守ろうと Arla 社が有機生乳よりも高値で普通生乳を買い取るため、市場では少々混乱が起こっている。しかし後者の乳業は、古くからの取引先農家から信頼もあり、農家が価格を理由に離れていることはないという。生乳流通には生産者あっての乳業という考えが根付いており、酪農家は乳業との連携でこの危機を乗り越えようとしている。

⑷　ニッチな独自市場を創るバイソン農家

世界的にも珍しいバイソン生産者、元会計士の Niels 氏が畜産業へ転身したきっかけを聞くと「バイソンは hobby（趣味）だった」と答える。現在 200 頭のバイソンを飼育し、牧場創設以来ヨーロッパ 15 か国に 700 頭の繁殖用雌牛を販売している。宿泊や集会用の建物を備えた農場内では、観光客がバイソンの飼育風景を見学できる他、肉の購入、レストランで食事もできる。ある程度型が決まっている従来の畜産経営に対し、殆ど前例のないバイソンのビジネスは、Niels 氏が自ら創り上げた他者の真似できない彼独自の市場である。今や世界でトップ 10 に入るバイソン生産者のスタートは、たった 4 頭。「人と違う特別なことをするならまずは小規模から。ゆっくり成長するのが良い」という Niels 氏の話から初期投資が大きく、ハードルが高いと言われている畜産の新規就農に新たな選択肢が見えてくる。

⑸　時代に合った農業教育

昨年のプロジェクトと比較して、Dalum 農業学校のカリキュラムは、生産や流通だけでなく「次世代に畜産を残すために」を意識づける構成だった。

講義の中で度々登場した flexible（柔軟）という言葉が示すように、大規模で集約的な安定生産の重要性と、小資本が成熟した経済の中で活路を見出す市場開拓。農の多様化でデンマーク畜産を次世代につなげようという方向が、教育の中で既に実践されている。

3. おわりに

デンマークの教育は、解が固定されていないソフトランディングだと言われている。

教師はじっくり生徒の話を聞き、丁寧に対話を重ねて一人一人の答えを見つけさせる。また実習と座学を繰り返しながら学ばせる「サンドイッチ教育」は、生産現場で起きていることをダイレクトに感じ、学校で理論と紐付けすることによって、いち早く時代の動きを察知し身に付けた知識で変化に対応することができる。

「教育が重要だ」と Dalum 農業学校教師陣は繰り返す。農業大国デンマークであっても全国民中の農業関連人口は僅か 3 ％。人も大切な資源だと考えるデンマークではその 3 ％の人々をしっかりと守り、この数字がこれ以上減ることのないよう、若手人材への教育に力を注いでいる他、消費者に対しても家畜の生産現場を見せるオープンファーム等を通じて食と農の教育が積極的に行われている。

プロジェクトに参加した高校生たちは今、日本の畜産が過去最大の危機に瀕している中で、将来この道に進みたいという志を持つ貴重な人材だ。オンラインではあったが、海外の畜産を体感できる生きた教育に触れたことで、今後の学習や活動への意識も大きく変化するだろう。これからさらに学び、経験を重ね、そして社会人となった暁には、是非各々の思い描く畜産を実現し、日本の畜産業を明るく変えていってほしいと願う。

メンター

龍泉洞黒豚ファーム
髙 橋 千 南

1. はじめに

私がデンマークで養豚研修をしたのは、今から 16 年前のこと。幼い頃より海外に興味をもち、留学を考えていた学生時代に飛びつくように海外農業研修に参加した。16 年経ち、今回メンターとしてこの貴重なプロジェクトに参加させていただき、私の感じた大きな変化を養豚に特化して記す。

2. アニマルウェルフェアの取組

当時私の研修していた農場では、アニマルウェルフェアという言葉は、非現実的な言葉として認識されていた。当時、アニマルウェルフェアとして提唱されていたことが「動物に苦痛を与えないこと」、すなわち種豚ではストールでの飼育をしない、子豚では断尾、削歯、去勢をしないことが主であった。当たり前に飼養面積の規定はあったものの、断尾や削歯、無麻酔での去勢は禁止されていなかった。これは効率よい経営に当時必要だったからである。

しかしながら現在デンマークにおいて、種豚のストールでの常時飼育は原則禁止されているし、断尾おおび削歯、無麻酔での去勢は禁止されている。

これを実現させたのは、畜舎内の構造や飼養形態を変化させていることが一因としてあげられるだろう。

種豚では、フリーストールの形式がとられており、IC チップ入りの耳標と自動給餌システムにより群飼でも個体管理を容易にするシステムも見られた。

肥育舎は従来の豚房の 2～3 倍の広さを有し、迷路のような通り道が設けられ、豚が自由に行動でき、ストレスが低減されるような工夫がされていた。

人間の労力を大幅に増加させないよう、畜舎の構造自体を変化させている。日本では、何か新しいことに取り組む際、人に負荷がかかることを回避しない傾向にあるように思う。しかしデンマークにおいては、規定を守りつつも収益を上げ、いかに労力をかけず目標を達成するかに重点を置いているように思う。これが新しい設備や道具を生み出す原動力だと思う。現実主義、合理主義は変わらず健在という印象を受けた。

3. デンマークの放牧養豚

家畜種問わず放牧に目が向けられていることにも驚いた。日本においては豚熱が現在も流行しており、家畜保健衛生所からの衛生指導も神経質なものとなっており、飼養管理衛生基準には移動時に地面（屋外）を歩かせないという一文もある。放牧している養豚場は、絶滅危惧種に近い。一方デンマークの放牧養豚では、母豚が出産し離乳までの間を子豚と共に放牧地で過ごす。しかも群飼のままである。予定日の 1 週間前頃から放牧内にある専用のユニットに入るが、産後 10 日で子豚と放牧地を自由に動き回り、草を食んだり泥浴をしたりしている。放牧養豚において泥浴環境の設置は義務だというのだから驚きである。

4. 環境問題意識

デンマークでは、自給飼料を中心に家畜を飼養し、飼料作物や採草用の農地の一角に風力発電の風車を建てており、元々畜産業における自給能力が高いというのが私の印象である。

自給体制は変わらないものの、環境配慮、エネルギー効率の観点から、バイオマスプラント発電がグリーンエネルギーの主流となっている。また、水資源に乏しいデンマークにおいて土壌・水質汚染は極めて重要な課題であり、窒素やリン等の成分ごとに詳細な規定が設けられている。また農薬等の使用には、講習を受け合格し証明書を取得しなくては使用できない等の決まりもあり、デンマークにおける窒素の再利用率は 80％にも上る。

5. おわりに

日本、世界においても当然のことではあるが、デンマークでは、時代の流れを読めないのなら養豚農家は経営維持できない。それはデンマークにおいて、家族間でも事業継承する際には、畜舎も土地も家畜も付属設備も必ず購入しなくてはならないため農家も経営スキルが求められる。私の研修していた農場でも農場主は、複数の養豚農家でグループを作り、勉強会や情報共有し、飼養形態や飼養管理の改善に取り組んでいた。

私はデンマーク研修中に、散々農場主から言われた言葉がある。

「Bestemmer selv!」つまり「自分で決めろ」ということである。

何でも自分で決めなさい、あなたが何を考えどう決断するのか、あなたの人生を決めるのはあなたしかいないのだから。

今、母となり、私が我が子にかける言葉である。

もちろん人の話に耳を傾けることは大切である。しかし与えられた情報を鵜呑みにせず、現地に足を運んで自分の目で見て観察し、感じて、自分なりに考えてみてほしい。観察力を磨き、広い視野で考え、自身で決めた道を皆さんにも歩んでいただきたい。

その一助となれていたら幸いである。

dalum landbrugsskole
ACADEMY OF AGRICULTURAL BUSINESS • DENMARK

October 2022

Dalum Academy of Agricultural Business / JAEC report

Dalum Academy is a modern Danish agricultural boarding school, founded on a strong folk high school tradition, where young farmers are not only taught technical lessons about crops, husbandry and on-farm economics, but also gains knowledge and personal development towards becoming active participants in the society they are part of. The Academy is today a self-governing institution, supported by the Danish Ministry of Education, and as such belonging under the same legislation as other Danish vocational institutes.

Dalum Academy has existed as Danish educational institute since 1886, and has been working with international relations for more than 30 years. With offspring in the results in Danish agriculture, hands-on knowledge is transferred to various countries and stakeholders all around the world, both as lecturing done for incoming participants to our campus in Denmark, as well as outgoing lecturers doing classes, seminars and on-farm training locally.

My job at the Academy is to develop and maintain all aspects of our international activities. Coming from primary agriculture before transferring to the educational world 5 years ago, it has always been a pleasure for me to watch young people grow as humans as well as in their mindset, by introducing them to knowledge, training their skills and handing over responsibility – especially the mind-openings that happens internationally on all sides, when working cross-country and culture.

The JAEC and Dalum first met around the year 2000, and have collaborated several times since then. Due to world-wide pandemic precautions, the year 2021 was the first time an online course was introduced between our two parties – for two weeks we all became global citizens in front of our laptops, as Japan and Denmark met, through a translator located in New Zealand!

My colleagues and I were sincerely happy to be invited to do a prequel this year – this time with the topic *Next Generation Livestock Farmers*. Again, we saw an opportunity to bring in both international agricultural and general knowledge close to our Danish core mission - as well as continuing strengthening the existing partnership with the JAEC. The interest, eager and preparation shown by the students in both 2021 and 2022, tells us that the Japanese food-producer of the future is in safe hands, if these young people are able to continue in the same flow as now.

It is my heartfelt hope, on behalf of all the involved from our Academy, that we have been able to inspire and encourage the 19 participants to not only follow their own dreams, but also to become role models in their networks and surrounding society – to show that *your background does not have to decide your future, but skills, interest and determination do!*

Best regards

Carsten Friis Poulsen
Head of International Division

DALUM LANDBRUGSSKOLE ACADEMY OF AGRICULTURAL BUSINESS DENMARK 1886 • 1907

DALUM LANDBRUGSSKOLE
Academy of Agricultural Business • Denmark
Dept. Dalum • Landbrugsvej 65 • DK-5260 Odense S
Dept. Korinth • Spanget 7 • DK-5600 Faaborg
Tel. +45 66 13 21 30 • dalumls@dalumls.dk • www.dalumlandbrugsskole.dk

受入学校

Dalum 農業学校
国際事業部 部長
Carsten Friis Poulsen

Dalum 農業学校は、デンマークの近代的な農業寄宿学校で、伝統的な民俗高校を母体としてます。ここでは、若い農業従事者たちが、作物や畜産、農業経営に関する技術的な授業を受けるだけでなく、自分たちが所属する社会にとって積極的な参加者になるための知識を得ることや、人間的な成長を目指しています。Dalum 農業学校は、デンマーク教育省の支援を受けた教育機関であり、デンマークの他の職業訓練機関と同じ法律に則ってい ます。

Dalum 農業学校は、1886 年にデンマークの教育機関として設立され、30 年以上に亘って国際関係に取り組んできました。デンマークの農業で成果を上げている若者たちを中心に、デンマークのキャンパスにやってくる参加者への講義として、また、現地での授業やセミナー、農場でのトレーニングなどの講義として、世界中のさまざまな国や関係者に実践的な知識を伝えています。

Dalum 農業学校での私の仕事は、国際的な活動のすべての側面を開発し、維持することです。私は初等農業出身で、5 年前に教育界に転身しましたが、知識を紹介し、技術を訓練し、責任感（特に心）を引き出すことで、若者が人間として、また考え方として成長して いくのを見るのは、私にとって常に喜びです。

JAEC と Dalum 農業学校 は、2000 年頃に初めて連絡を取り合い、その後も協力関係を築いてきまし た。世界的なパンデミック対策として、前回の 2021 年プロジェクトでは、初めて両者の間でオンラインコースが導入されました。2 週間、ノートパソコンの前で、ニュージーランド在住の通訳を介して、日本とデンマークが出会い、プロジェクト参加者全員が地球市民になれたのです！

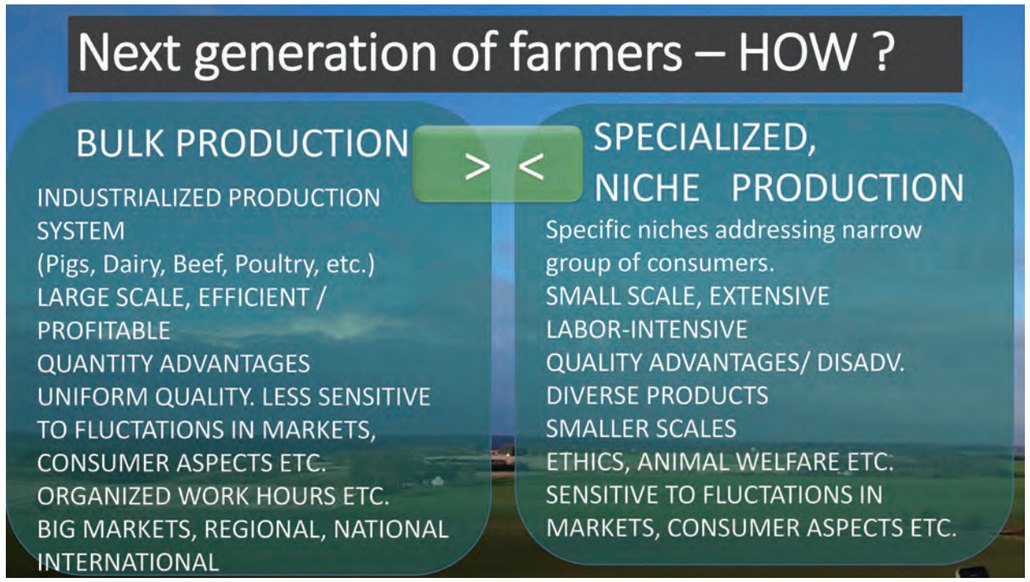
今回は「次世代の畜産」というテーマで、Dalum 農業学校はプロジェクトに携わることができ、心から嬉しく思っています。前回同様、デンマークのコアミッションである国際的な農業と一般的な知識の両方をプロジェクトに取り入れることができ、また、JAEC との既存のパートナーシップを引き続き強化する機会となりました。前回の 2021 年、今回の 2022 年のプロジェクト参加者たちが示した興味、熱心さ、準備の良さを、継続していければ、日本の未来の農業は安泰であることを物語っています。

このプロジェクトに参加した 19 名の青年たちが、今後、自分の夢を追うことだけでなく、ネットワークや周囲の社会で模範となるような存在になることを、Dalum 農業学校を代表し心より願っています。
これまでの経歴が将来を決めるのではなく、スキル、興味、そして決意することが将来を決めるのです。
皆さんのご活躍を応援しています。

訳・プロジェクト事務局

6 未来の畜産業に対するアイデア

19 人の畜産アンバサダーが、このプロジェクトを通じて
学び考えたことを、一枚の紙にまとめました。
外国のやり方が素晴らしいから日本に取り入れるというのではなく、
畜産が素晴らしいから、どうしたらもっと魅力的になるのか、
フレッシュで心温まるアイデアをご覧ください。



Dalum 農業学校 最終日の授業のスライド。
次世代の農業について、みんなで考えました。

北海道帯広農業高等学校　砂　川　　律

DENMARK

若者のための畜産 ～日本の畜産の未来～

就農するまで → 義務化されたシステム 「サンドイッチ教育」

■ 一般教養と現場作業を繰り返し学ぶ！

農業教育 → 都市部でのイベント・実習体験

■ 家畜を連れた都市部での畜産イベント
■ 中学生を対象とした実習体験

就農する際の知識量・都市部と地方部で畜産への認識の差が少ない！
若者全体への農業教育の推進！

就農するまで → 様々な方法

■ 高校・大学卒業後・牧場研修後・他職業を退職後　etc …

農業教育 → 地方部でのイベント・農学生への実習体験

■ 農業が盛んな地域での畜産イベント
■ 農業に興味のある学生を対象とした実習体験

農業が盛んでない都市部と農業が盛んな地方部で、畜産への認識に大きな差が生まれる！
一部の若者へしか農業教育が行われない！

日本の畜産の現状課題

■ 代表的な後継者不足

これから日本の畜産が行うべきこと

■ 積極的な農業教育の推進！ 特に都市部の若者を対象としたもの。

■ 農業の重要性を広める。みんなの生活は農業によって支えられている！

■ 農業の魅力を広める！悪い印象ばかりが広められてしまっている。

北海道倶知安農業高等学校　山内彩花

Danmarkの畜産業

◎アニマルウェルフェアに配慮した方が売れる？

デンマークでは動物が幸せに、快適に飼われていたお肉の方が売れているそうです。

→ 味や値段だけでなく、どこでどうやって育ったのか『目に見えない価値』を想像している！

⇓ これを日本の畜産でも!!

現在…

- A5ランクのお肉が食べたい！
- こっちの方が安いかな
- きれいな霜降りだ～ おいしそう！

＋

将来

- このお肉は動物が幸せに飼われていたんだって！
- 環境にやさしく飼われていたんだね

この他にも、色々な購入基準を増やしたい!!

⇒ 手にとる人たちが「どんなお肉が食べたいか」という選択肢を増やせる

生産者、消費者、動物、環境のすべてがつよくつながる畜産業を目指す

宮城県加美農業高等学校　早坂凌雅

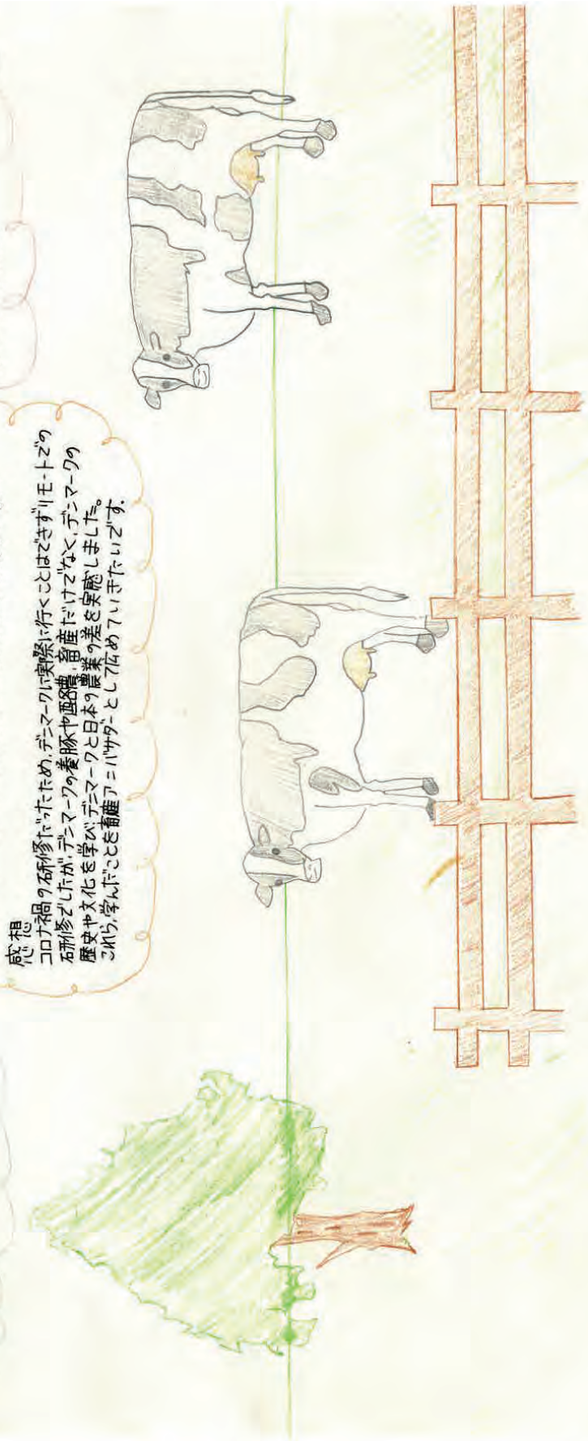
未来の畜産に向けた私のアイディア

～デンマーク研修を終えて～

デンマーク
①アニマルウェルフェア家畜に良い飼育をしている畜産農家が多い。
・商品の販売時に生産過程を付加価値としている
・国民のアニマルウェルフェアや有機農業の認知度開心度が高い
②大規模経営の畜産農家が多い

日本
①アニマルウェルフェアや有機農業の国民の認知度がない
・アニマルファーム など農業に関するイベントなどが少ない作業者に農業の魅力が伝わっていない
↓
担い手不足になっている
②個々の家族で農業を営んでいるため小規模経営農家が多い
③耕作放棄地が多々あり土地の活用が上手くできていない

感想
コロナ禍の研修だったため、デンマークに実際に行くことはできずリモートでの研修だったが、デンマークの養豚や酪農、畜産だけでなく、デンマークの歴史や文化を学び、デンマークと日本の農業の差を実感しました。これから、学んだことを畜産アニバサダーとして広めていきたいです。



日本でやるべき事
①畑や田など使われなくなった土地を使いたい人に譲る仕組みを作り耕作放棄地などを有効活用する。そうすることで景観保護に繋がる
②農業に関するイベントやオープンファームなどで家畜の魅力農業の魅力を消費者に伝える
伝えたことで担い手不足解消にもつながり耕作放棄地やアニマルウェルフェアへの関心度認知度が高まる。

宮城県農業高等学校　林　　ら ん

Denmark研修

宮城農業高校 2年
林　らん

～稼げる畜産.ライフスタイルと畜産経営～

法律
関心
ジェンダーフリー
経営規模
担い手
動物福祉
福利厚生
稼ぎ方

Japan
小規模経営
法律×
動物福祉△
(アニマルウェルフェア)
興味・関心△

Denmark
大規模経営
法律◎
動物福祉◎
(アニマルウェルフェア)
興味・関心◎

国民の

★国民の興味・関心を高めること

★法律を定め、国全体で取り組むこと

福島県立修明高等学校　小 林 椋 堅

デンマークオンライン研修

デンマークの畜産業

養豚

生産が効率化されている

トレーサビリティによる風通しの良い畜産業

政府の定期的な検査

日本とデンマークの違い

日本	デンマーク
・高校では農業高校に所属しないと農業に関わることがあまりない。 ・農業従事者に対する助成制度が少ない。	・中等教育時に農業について学ぶ授業がある。 ・就農するまでのシステムが確立されている

研修を通して、今後の日本は就業しやすい環境の確立によって、深刻な担い手不足が解消されていくと思いました。また私自身日本の畜産業を盛り上げることができるように来年度からは畜産業関係者として現場で働きながら普及活動などもしていきたいと思います。

栃木県立宇都宮白楊高等学校　酒　井　謙　心

デンマーク研修より

稼げる畜産

○デンマーク

- 大規模、ロボット化をしている農家が多い
- 飼料を自国で生産
- 有機農業を行い生産された商品に付加価値をつけ販売

○日本

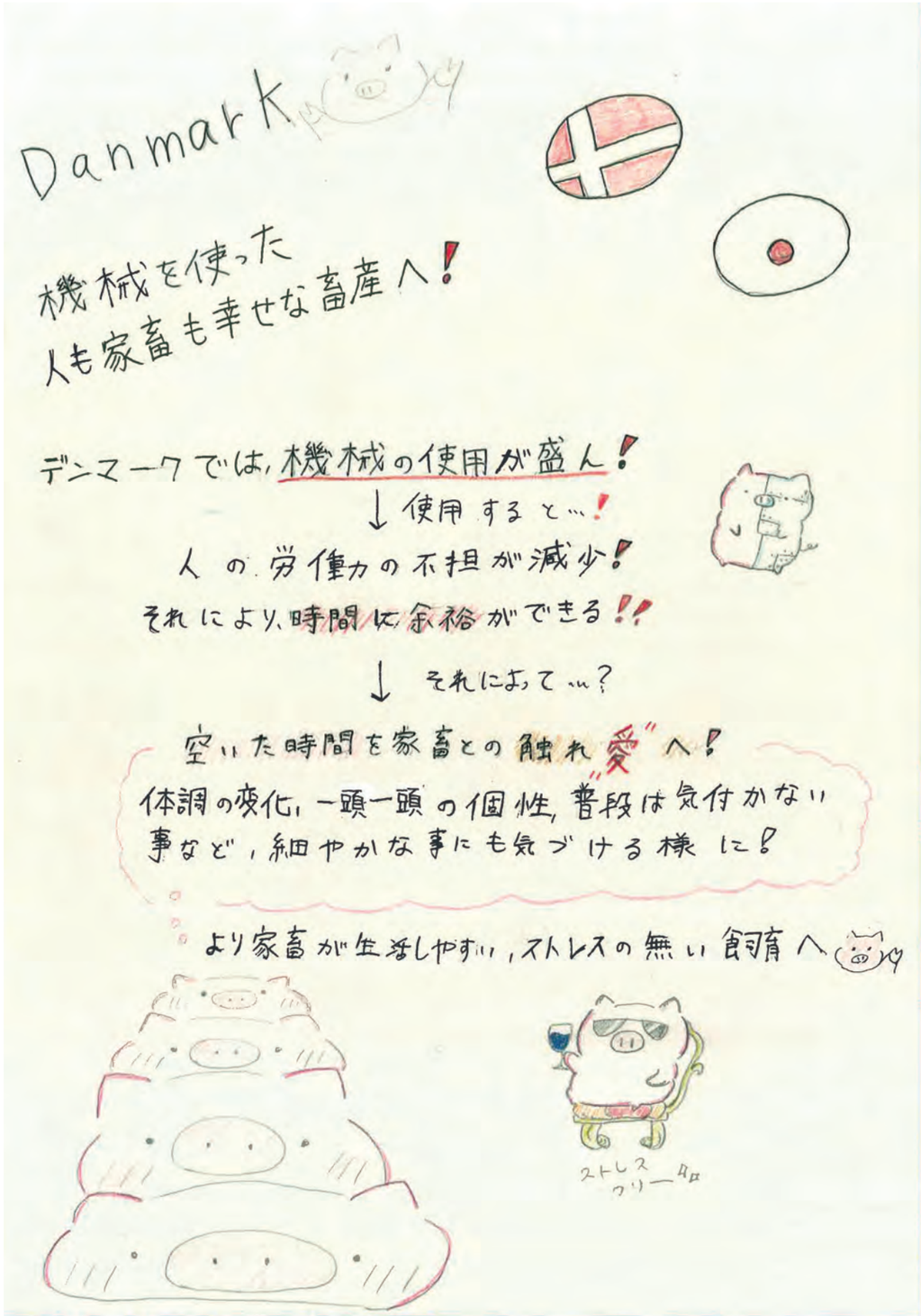
- 小規模、他の作物と兼業する農家が多い
- 飼料の多くを輸入に頼っている
- 肉質の向上、ブランド化し、付加価値をつけ販売

⇒未来の畜産業に対するアイデア

今からできること－大規模農業、ロボット化を進め、
効率・生産性を上げる

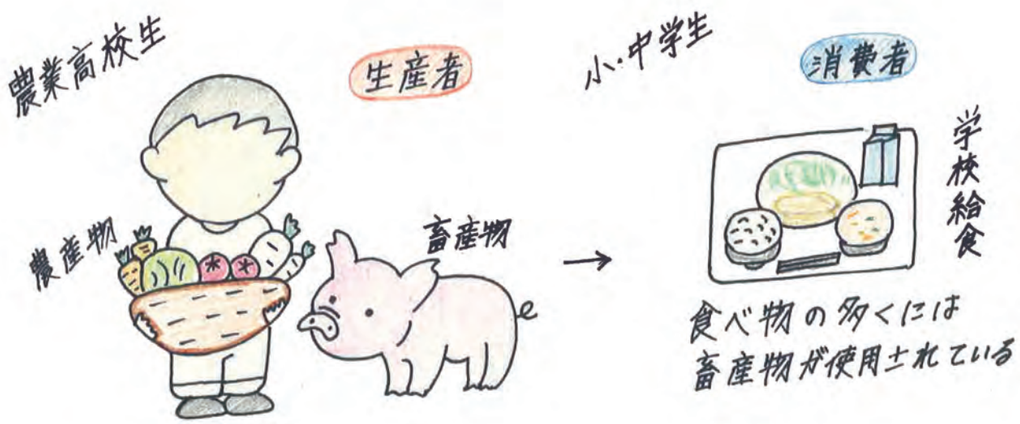
未来の畜産に向けて－日本で飼料の生産を行い
飼料自給率を上げ、安定した農業経営をする

栃木県立鹿沼南高等学校　前　田　夏　海



栃木県立栃木農業高等学校　竹澤愛笑

畜産に理解のある生産者育成を目指して



消費者である小・中学生に対して食育を行うことで、畜産の魅力を伝えることができるだけではなく、畜産が職業選択の中に入るのではないか

畜産の魅力発信＋意識改善

臭い
危ない
汚ない

小子高齢化
担い手不足
農家の減少

撃退

群馬県立勢多農林高等学校　平井　綾

未来の畜産業に対するアイデア提案

今回の研修では、デンマークと日本の畜産業を
ジェンダーフリーという観点から比較してきた

日本JP
- 男性が力仕事の固定概念
- 暇のない職業
- 役割分担が明確
- 農具が重い

デンマークDK
- 女性でも経営者として働く
- 育休制度も充実!!
- 作業をマニュアル化
- 女性用の農具も

↓

男女問わず働きやすい環境整備が重要！！
そこで…

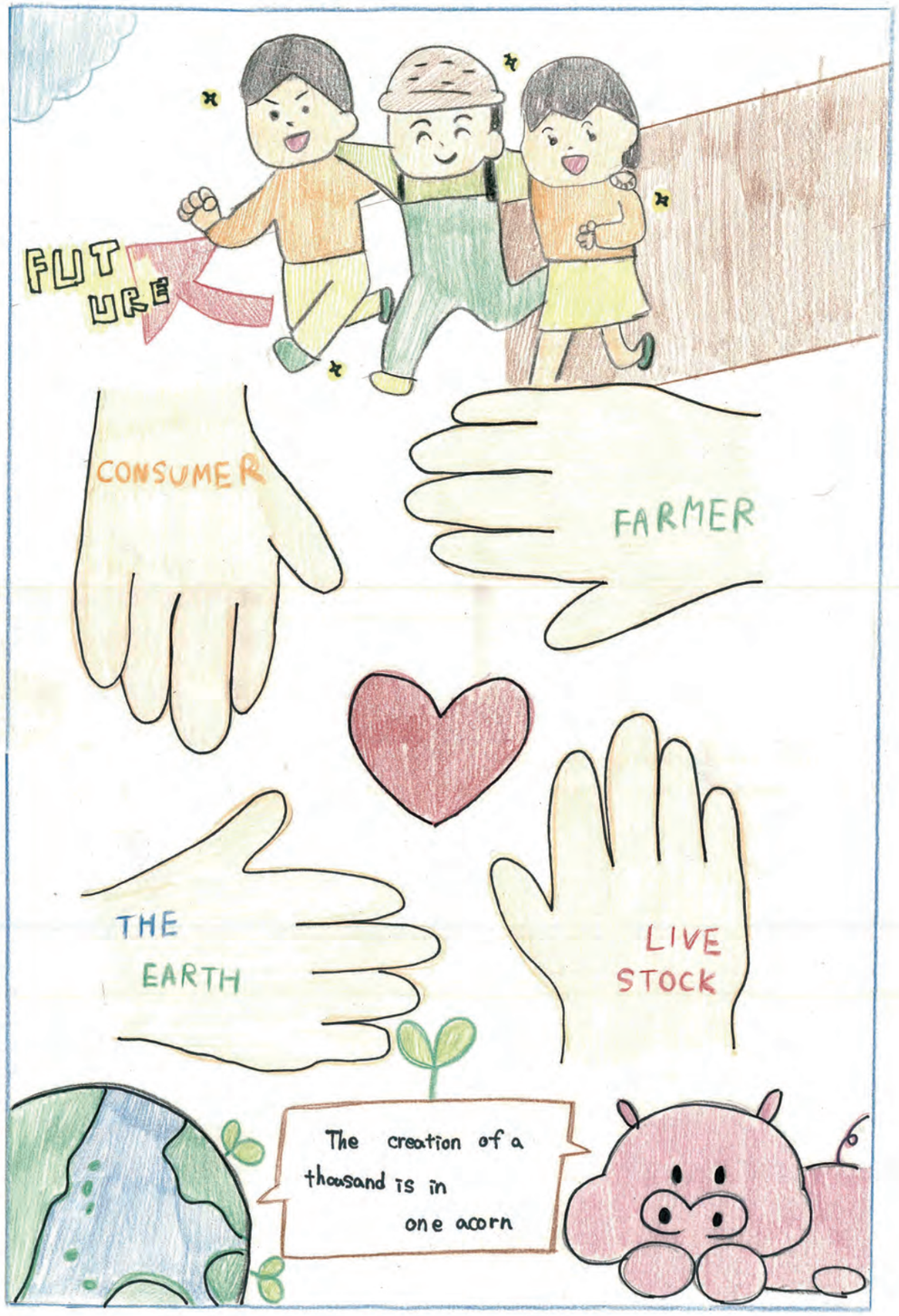
○作業のマニュアル化
マニュアル化することで誰でも仕事のできる状態
↓
休暇を取れるようになる

○それぞれの特性を活かした共生社会
生産者は生産だけでなく、消費者に**見せる**生産が大事
例えば…
女性の情報発信能力を活用して農場の魅力発信をする
・消費者の参加型イベントの開催
・耕作放棄地を放牧地として利用し、消費者に生産現場が見えるように

↓これらによって
農業に興味を持つ人も出てくるかも!?

現在、日本の新規農業就業者人口は減少傾向↘
必要なのは、**農業への興味・関心を高める**こと！！

筑波大学附属坂戸高等学校　**金　澤　亜　依**



東京都立園芸高等学校　**志　村　真　桜**

DENMARK研修

DKの放牧

土壌汚染の予防

面積当たりの飼養頭数を制限
マメ科の植物

窒素を削減

牛が躍る日

春に放牧が再開し、喜ぶ姿が風物詩に

畜産を知るきっかけに！

動物福祉AW

家畜がのびのび暮らせる環境

ストレス軽減
健康の促進

濃厚飼料削減

主に放牧地に生えている草を食べる

コスト削減

私の理想の畜産

放牧

- 動物福祉
  アニマルウェルフェア
- コスト削減
- 持続可能

日本で行うには

問題
- 土地が限られる
- 野生動物の被害
- 担い手不足

解決するには
- 短時間、小範囲
- 耕作放棄地の有効活用
- 女性の担い手の確保

今回畜産を学んで、畜産って

奥が深い！　可能性がある！　面白い！

と気付かされました。また、学んだデンマークの技術をそのまま取り入れるのではなく、日本の良い所である小規模でも高品質で安全な畜産物の生産をより高めるために応用して取り入れるのが大切だと思いました。これからも畜産を学んでいきたいです！

東京都立瑞穂農芸高等学校　松島杏桜

Danmarkから学んだ"担い手不足解消

デンマークでの取り組み

有機畜産

- アニマルウェルフェアに配慮した経営

健康向上　付加価値up↗

↓

オープンファーム

- 牧場の様子を知ってもらう。

食料生産に対する関心up↗

消費者意識
飼育環境
付加価値　に注目

新規農業従事者が増える！

私が求める
日本の畜産像

① 小規模経営でも魅力的なストーリーをつくる！
② オリジナリティが評価されるように！
③ 畜産の楽しさ・面白さを知ってもらう！

私たちと一緒に畜産を学ぼう!!

岐阜県立岐阜農林高等学校　田島ほの花

DENMARK!!

ジェンダーフリー畜産
～男女共生の畜産社会を目指して～

JAPAN

- 女性の就業者人口が少ない。
- オーナーは、男性が務めるケースが多い。
- 小規模農家だと、育児休暇などを取ることが難しい！

違い!!

DENMARK!!

- 女性の就業者人口が多い。
- オーナーは男性と同じく、女性も務めるケースが多い！
- 男性も女性も、誰もが育児休暇などをしっかりとる！（あたりまえ）

デンマークでは…！

☆男性も女性も自分自身の強みを活かしながら働いている。
- 「男女平等・公平」は国民意識で根付いている。
- 個々の力を活かし、役割分担！

☆仕事と家事の両立
- 仕事を役割分担をして、全員で行うことがあたりまえのように家事も分担することがあたりまえ。

↳ 女性も、家事・育事の負担を感じることなく、仕事に専念できる！

女性の強み

- マルチタスク
- 綺麗好きな人が多い。
- 母性があり、分娩介助、搾乳、仔牛の世話が上手！
- 広い視野を持っている。
- 男性とは違う視点を持っている。（SNSでの情報発信にも強い！）

↓ 必要不可欠!!

日本の畜産業の活性化には女性の強みも

⇒ 男性も女性も共に働き、日本の畜産業がジェンダーフリーな職業として誰もが働きやすい職場環境へ!!

静岡県立富岳館高等学校　伊　藤　優　志

島根県立出雲農林高等学校　岡　田　百　夏

広島県立油木高等学校　西田直輝

未来の畜産へのアイデア提案

ジェンダーフリーを普及するために！

現在の問題点

・休みが不定休

・重労働というイメージ
→女性の産業者が減少

その為には

意識改革＆大規模化

の必要性がある！

問題を解決させるための提案

大規模化
経営の規模を大規模化させ従業員を増やすことにより産休や育休復帰が当たり前の環境を作れる

意識改革
畜産業の機械化が進み，男女格差はなくなり，作業も簡易化されている。また女性の方が動物の扱いが上手く，畜産業界としては求められている

今後私が具体的にできること

意識改革
若い世代に発信し、男女問わず畜産においての負のイメージを払拭してもらうことが大切！(InstagramやYouTubeなどで情報発信)

大規模化
個々の畜産農家が手を取り合い，１つの大きな組織や組合として運営することで作業の効率化及びスマート化を目指す

令和４年度
畜産ティーン育成プロジェクト

愛媛県立野村高等学校　飯田茉景

デンマークでの取り組み

- バイオマス発電で排出物の有効活用！ → 環境への配慮
- AWが重視されており、動物本来の行動ができるなどストレス減！ → 動物への配慮
- オープンファームやイベントが活発に行われる！ → 情報発信

が持続可能な畜産につながる？

環境への配慮

◆ 循環型畜産
- 動物の排泄物
→ 畑に元肥として還元
- 自給飼料生産
- エコフィード
→ 動物の飼料

私が目指す畜産の形

持続可能な畜産のためにやりたいこと

動物への配慮

◆ 有機畜産
- 自然に近い形で放牧
→ 耕作放棄地を利用

害獣をよせつけない景観維持やコスト削減のメリットが！

情報発信

◆ 6次産業
- オープンファーム
- 地産地消がコンセプトのカフェを展開
- 消費者の方との交流

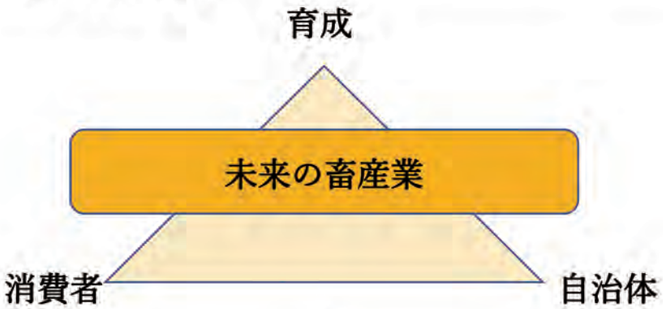
プロジェクトを通して

日本や外国の方の考え方や価値観に触れたり、自分の意見を伝えたりすることで、物事を様々な視点から見ることの大切さを実感しました。また、畜産に限らず、生きていく上で柔軟な思考ができる人になりたいと思いました。貴重な機会をくださって、ありがとうございました。

熊本県立菊池農業高等学校　永　野　春　菜

未来の畜産業に対するアイデア

➢ 日本の畜産業が今よりも、もっと素晴らしいものになるように未来の畜産業サイクルを提案します。このスタイルは育成・自治体・消費者の 3 つから形成されます。



育成　**技術取得のための研修**

➢ ファーマーズスクール

以前のしくみは親から子に農業の基礎を教えていたが、子が農業を継がない今新しい取り組みとして、第三者（ベテラン農家）の元で学ぶしくみ

自治体　**農業を「見える化」**

➢ オープンファーム

消費者と生産者がつながるきっかけづくりを目的

消費者　**消費者の意識改革**

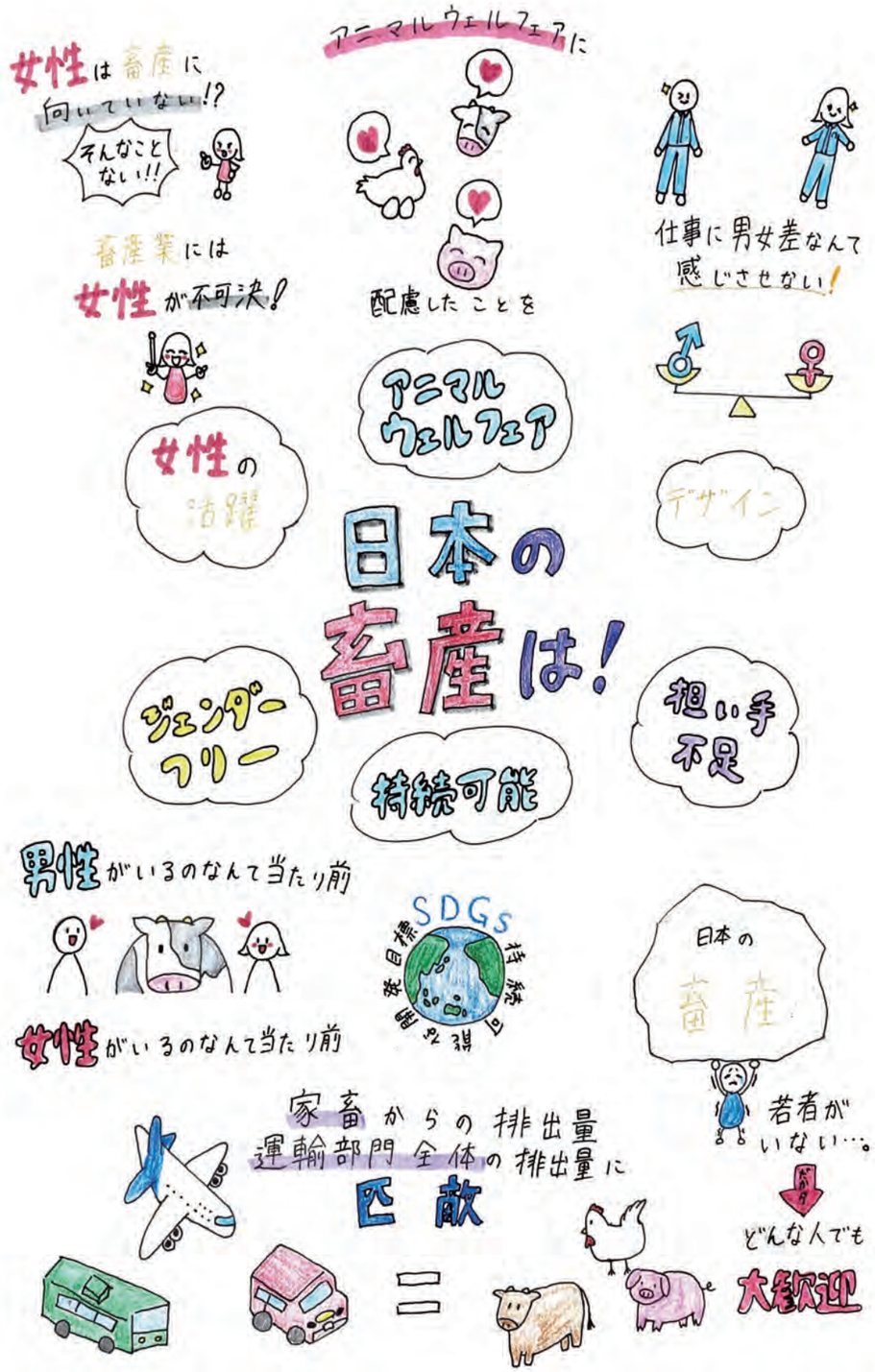
➢ サンドイッチ教育

座学と実践を並行して行うことで、農業の楽しさ・やり見つける

感想

研修で学び、生産者だけの問題だけではなく消費者にも理解と協力が必要であると学びました。自分には関係ないではなく、自分にも出来るがあるのではないかと考える！

熊本県立南稜高等学校　中　嶋　彩　乃



7 むすび

平成 30 年度（2018）年から未来の畜産女子育成プロジェクトを実施してきましたが、令和４年度は畜産ティーン育成プロジェクトに名称を変更し、女子ばかりでなく男子高校生も一緒に行えるプロジェクトになりました。

ウィズコロナの時代をにらみ、何とか海外での研修の実現を目指していましたが、最終的には海外渡航・帰国の際のトラブルを防ぐためにオンラインでの実施を決めました。
今年度もまた、畜産業の盛んなデンマークを学びの舞台とし、様々な農家、農業経営の形、取り組みを紹介しました。例えば、農家が自分の経営を消費者に知ってもらうために来訪者を農場に招き入れるオープンファームは、高校生たちが農家と都市部の消費者を結びつける取り組みに気付くきっかけでした。

2022 年 9 月 29 日には You Tube ライブで報告会を行いました。アーカイブとして残っていますので、参加者がデンマークの畜産から何を学んできたのか、ぜひ視聴いただけますと幸いです。
また、昨年度はコロナ禍で控えられていましたが、プロジェクト参加者が畜産の魅力を直接伝える活動である畜産アンバサダー活動も、学校内、地域、日本各地の会場で実施できました。
本会主催で実施したブロック別国際化対応研究会（会場は 福島県、栃木県、滋賀県、島根県、大分県）では、研究会参加者たちから高校生たちへ、賛辞やエールが贈られました。発表前は緊張した面持ちでしたが、終わった後は充実感に満ちた笑顔を見せていました。こういった経験を通じて畜産に対する思いをさらに強くし、将来に向けて畜産ライフを充実させていってくれると思います。

このプロジェクトを通じて、デンマークの畜産を学んだ高校生たちが広い視野を持ち、畜産業を大切にし、夢を追い続けることができたなら、日本の畜産はきっと明るく素敵なものになると信じ、私たちも努力を続けてまいりたいと思います。

最後に本プロジェクト事業実施にあたり、多大なご支援を賜った皆様に対する感謝の印としてここにご紹介し、むすびといたします。（順不同）

日本中央競馬会
公益財団法人 全国競馬・畜産振興会
農林水産省 経営局 就農・女性課
駐日デンマーク王国大使館
全国農業高等学校長協会
全国高等学校農場協会
日本学校農業クラブ連盟
Dalum Landbrugsskole
通訳 Jerry Jewett さん
株式会社 Magic Plus
中日本フード株式会社
尚絅大学 現代文化学部 光成有香先生
事業推進委員　髙橋ゆかり先生
　　青山浩子先生
　　遠藤友治先生
　　福島直紀先生
メンターの藤田春恵さん、髙橋千南さん
スペシャルサポーター岸田隆志先生
事業に応募して下さった高校生の皆さん
畜産アンバサダーの皆さん

令和５年３月
畜産ティーン育成プロジェクト事務局

日本の畜産をもっと元気に！

若者たちが畜産業の魅力を知って将来の職業として目指すために

畜産ティーン育成プロジェクトは、全国の畜産を学ぶ高校生たちのために海外畜産研修を実施しています。今回はデンマークの畜産業をオンラインで学びました。参加した高校生たち（畜産アンバサダー）が学んだこと、そして畜産に対して思っていることをご紹介します。

畜産の担い手

北海道帯広農業高等学校
砂川　律

就農するための道筋が確立されていることが大事だと思う。学校や大学で一般教養と専門知識、技術を学ぶことを義務化すれば、畜産を目指す人の知識量の違いが少なくなるのでは。就農するときの不安を少しでも減らしてほしいな。

栃木県立栃木農業高等学校
竹澤愛笑

若者のための畜産をつくっていくためには、小さな頃から家畜動物とのふれあいや体験が必要じゃないかな。そして、農家になるまでのしっかりとした教育システムを確立させることも大切だと思う。

ちょこっと！

デンマークの畜産農家数は約16,000。畜産農家数は年々少なくなっているけど、機械やロボット、デジタルツールを駆使しているんだ。

東京都立瑞穂農芸高等学校
松島杏桜

デンマークではオープンファーム（農場の一般公開）やレストラン、宿泊施設、パーティーなど、消費者が楽しみながら畜産を学べる取り組みがありました。デンマークの先生は“クレイジーなアイデアから始まった”と言ってたけど、少しクレイジーなことも時に必要なんじゃない？

農業機械

栃木県立鹿沼南高等学校
前田夏海

農業機械の導入は、労働力を軽減できるし作業効率を上げられます。そのおかげで家畜の健康管理や衛生面を管理する時間が増加するので、管理者である人間と家畜の両方に必要なことじゃないかな。

静岡県立富岳館高等学校
伊藤優志

デンマークの農業機械は日本の機械よりも発展しているように感じました。ロボット搾乳や自動給餌機、餌を押すロボット、自動除糞機など、今まで見たことのない機械を駆使していてかっこいい！負担軽減や仕事と家庭との両立には必須です。

アニマルウェルフェア

愛媛県立野村高等学校
飯田茉景

アニマルウェルフェアって何だろう？なんとなく放牧をイメージしていたけど、デンマークの農家さんから、動物一頭一頭の個性をしっかり観察して「それぞれに合った飼育を心がけることが大切だよ」って聞きました。

熊本県立菊池農業高等学校
永野春菜

放牧は、アニマルウェルフェアと環境保全の両面で優れていると思います。でも、日本では十分に放牧できるスペースはありません。耕作放棄地を使用しながら少しずつ放牧が日本の農業に浸透してほしいです！

北海道倶知安農業高等学校
山内彩花

人間にも動物にもやさしい経営がいいな。家畜のことを考えたアニマルウェルフェアや、お客さんが欲しくなる付加価値のある畜産物を考えてみたいです。「値段の高い肉」にはどんな理由があるのか、消費者に伝えなくてはいけないと思います。

ちょこっと！

アニマルウェルフェア（家畜福祉）
最終的に食べられちゃったり、人間のために利用される家畜だけど、快適でストレスの少ない飼育環境を保ち、動物の体と心的な自由を確保することの重要性が見直されているよ。

飼料

栃木県立宇都宮白楊高等学校
酒井謙心

日本は濃厚飼料（家畜のエサ）を輸入に頼っているので、世界情勢や円安の影響を大きく受けます。デンマークではウクライナとロシアの問題なども見据えて、長期的な対策として新しい飼料の開発により輸入に頼らない工夫をしていました！

再生可能エネルギー

東京都立園芸高等学校
志村真桜

デンマークでは糞尿を堆肥化するだけではなく、バイオマスプラントを導入して発電しているんだって。
国内電力の25～30%をまかなうほどで、デンマークの社会全体が環境に優しい畜産を求め、選んでいるからだと感じました。

ちょこっと！

自給率には色々な種類があるけど、日本の家畜のエサの自給率は25%（令和元年）しかないんだって。国際的な飼料の価格上昇は、日本の畜産にとって大きな悩みのタネなんだ。

社会保障

宮城県加美農業高等学校
早坂凌雅

税金が高くても、医療費や教育に向けた補償も含め、社会的な保障がしっかりしているデンマークって良いな！良い国は国民の意識、幸福への考え方が利益中心じゃなく、安心や安全への意識が高くなるのかも。

広島県立油木高等学校
西田直輝

デンマークの社会保障制度の充実は、間接的に畜産従事者の生活のしやすさにつながっていると思う。出産と子育ては、男性でも女性でも、産休・育休などをしっかりとれるようにして、一緒に担っていくのが大切！

ちょこっと！

福祉国家として有名な北欧の国、デンマーク。消費税は25%と高いけど、その一方で、医療費無料、出産費無料、教育費無料、充実した高齢者サービスなど、社会福祉がとても充実してるんだ。

生産者と消費者

筑波大学附属坂戸高等学校
金澤亜依

農家さんが一方的に努力するだけでも、消費者が偏った考えで要望するだけでもダメなんだ。今の畜産にできることと、できないことがあること、私自身も含めて消費者が畜産の現状を理解しなければ。

福島県立修明高等学校
小林椋堅

消費者を思う気持ちや姿勢は、デンマークの畜産を学んで一番感銘を受けたこと。豚舎に24時間いつでも消費者が見られるＷｅｂカメラを設置して、安心で安全な畜産物を食べたいという消費者の気持ちに応えていた。これって画期的じゃないかな！？

宮城県農業高等学校
林　らん

家畜は愛玩動物じゃない。私たちは経済動物と携わっているということを忘れてはいけないと思います。消費者が畜産ことを知らないのであれば、畜産に携わっている私たちが畜産業の現状を発信することが大切だと感じる。そして改善していかなくちゃ。

ジェンダーフリー

群馬県立勢多農林高等学校
平井　綾

デンマークから男女のそれぞれの尊重、働きやすい環境づくり、制度の改善を学びました。最初はただ男女が同じ仕事をすることが平等だと思っていたけど、適切な環境とチームワークが本当のジェンダーフリーなのかなって思うようになりました。

岐阜県立岐阜農林高等学校
田島ほの花

デンマークでは男性も家事や育児を当たり前のようにするって言っていました。なんでも協力し合って支えあいながら生活をするのが大事だなあ。自分のスキル（強み）を最大限に生かせる仕事であれば、男女の差を気にすることはないよね。仕事と家庭の両立は男女一緒に！

熊本県立南稜高等学校
中嶋彩乃

性別や身長、筋力の差などにより働く機会を制限されるのではなく、働きやすいと感じることのできる環境作りが大切なんだと思います。日本がデンマークよりちょっと遅れていると感じたのは、性別による役割意識が根強いことかな。

島根県立出雲農林高等学校
岡田百夏

男女で共に働くというのは、男と女を意識しながら仕事するということではなく、個々の能力を尊重し合うってことなんだ。男性と同様に女性の活躍が認められて、畜産農家から必要とされているデンマーク。素敵だと思います。

ちょこっと！

世界経済フォーラム（WEF：World Economic Forum）による各国の男女格差の大きさを表す「グローバル・ジェンダー・ギャップ指数」は、2022年7月の発表によると、調査対象となった世界146か国のうち、日本は116位、デンマークは32位という結果なんだ。この指数は、各国の男女の格差を経済・教育・健康・政治の4分野で分析し、評価しているよ。

日本中央競馬会 令和４年度 畜産振興事業
畜産ティーン育成プロジェクト事業報告書

発行	令和５年３月
発行者	公益社団法人 国際農業者交流協会
住所	東京都大田区西蒲田５丁目 27 番 14 号 日研アラインビル８階
電話	03-5703-0252
E-mail	mirai@jaec.org
URL	https://www.jaec.org
校正・デザイン	Ami Muraguchi
印刷	株式会社 エーヴィスシステムズ

無断転載禁止

集まれ！畜産アンバサダー

次の舞台はオーストラリア・クイーンズランド州
2023年畜産ティーン育成プロジェクト始動

オージービーフに代表されるオーストラリア。
広大な土地を生かした放牧、オーガニック、
輸出、アニマルウエルフェアの考え方を
キーワードにクイーンズランド州の畜産業を学びます！

◆ プロジェクト参加者募集 ◆

研修参加者（生徒）20 名、引率者（教員）２名
募集開始：令和５年４月下旬予定

※募集の詳細については、４月下旬頃に本会ホームページにてご案内いたします。

◆ 畜産ティーン育成プロジェクト（予定）◆

オンライン 事前研修 2023 年 6 月中の 5 日間 ▶ オーストラリア 現地研修 2023 年 8 月中の 10 日間 ▶ 研修成果報告会 帰国翌日、都内にて ▶ 全国 畜産アンバサダーとしての活動

海外の畜産業を学んでこれからの日本農業を考えよう
畜産業の素晴らしさやその魅力を
プロジェクト参加者と一緒に発信しよう